

910.26-Y67-2ウ



1200500754516



始



7

910.26
Y67
2



矢
崎
彈
著

代
の
女
性

日本出版株式會社



1017
296

まえがき

この書は、明治、大正、昭和の三代にわたる代表的な名作小説にあらわれる女性を辿つて、近代日本における女性の愛と倫理が、いかなる變遷を^か累ねてきたかを歴史的に述べようとしたものである。いわば、文學作品の女性を捉えて描いた女性思想史たらしめようとした。

文學が、現實の反映であるならば、小説に反映された女性群像を歴史的に捉え、それを系統づけることによつて、女性思想史を形作ることも可能な筈である。私がそれを敢えてしたのは、女性發展の歴史的な具體性を掴み、こんにちの女性に對する、はげしい毀譽のあらしに答えたいと思つたからである。

敗北に終つた侵略主義の大太平洋戦争——。日本ファシスシードもは、國防國家の基礎的責任の擔い手と、欺きの言葉によつて、あらゆる嘆稱と激勵の聲をふりあげたのである。結局それは、欺瞞であつたとしても、女性も國防へ、生産へというファシストの聲によつて、それを機縁に—

應それまでの因襲の圍みを解いたことは事實である。しかし、かような進出が、當然もたらす女性の新しい性格が、一面で讃えられながら、他面から、主として男の保守的な感情の反撥を招きつゝあるという、矛盾に遭遇してはいないだろうか。そのみではない。一般の女性讚美の聲が、女性の長く背負わされた否定的な傳統への愛着をたち切れずに、女性の劃期的な前進が、遮られる虞れさえなくもないのである。

事實、この戦争に於ける總動員の一部としての女性であつたのだ。その動員された女性について、私には一つの體驗と、一つの聞き覚えがある。私は一部の女性、とくに運輸事務にたずさわつた者には好印象もあるけれども、わずか十七八歳で軍需工場を轉々し、官僚的というより謂ゆる傲慢、權眼で睨むという、無性格の存在をも認めねばならなかつた。また或る科學者からは、旋盤工としての女性の體質的マイナスを聞いた。これらは單に女性のみ弱點や缺點といふのではないが、殘存せる過去の因襲と無性格が、戦争中かえつて増長されたという例證は尠くはない。しかし私は、その一方には男子をしのご仕事に應じ、また職場の解放に、過去の因襲の打破に努力した多數の女性のおつたことも信じた。

終戦後の、こんにちの状態は、はじめての選舉權、新憲法の發布、男女共學の實現などの蔭に、多くの女性が殘存する資本主義によつて失業し、「夜の螢」として亂舞する傾きもある。これは勿論、女性のみ罪惡とはい切れぬとしても、これまでの日本女性の正しき生長が妨げられ、女性の特質の多くが失われたことは事實であらう。而してこれは、恐らく大震災後のモダンガールや、アメリカニズムを履きちがえた無性格が、清算されずにそのまま殘存し、こんにちに及ぼす根柢となつたのではあるまいか。

今日の女性の性格と傳統、その發展と退歩に係わる一切の課題を解くには、少くとも、明治、大正の歴史的變化と生長の來歴に注目しなければならぬ。發展の歴史に係わりなく、歴史的現象を突然の疾風や、輕はずみな妄動として理解している限りは、今後の躍進的な女性の進出も神話的にならざるを得ない。一般には、明治、大正における女性の先驅的な運動や、思想の流れは、甚だ忌むべき、過失の歴史のように思われ勝ちである。女性の本質に悖り、民族の精神に背く破壊の憎惡すべき歴史として振返るものすらある。だが、果してどうであらうか。

男の本質ということとは、あまり際立つては言われぬ。しかし、女性の本質、女らしさと云うことは、今も永遠不滅の掟として、女性非難の端々に調子をかく聽かれる。女性の本質とは、果して如何様なものか、誰がその本質を作り、誰が、それを守るように傳統づけたのであらう。それは、

自然の運命であるという、暗黙の肯定のなかで、多くの曖昧な非難の聲は言葉を濁すであろう。人間の原始時代からの歴史発展の特質は、先ず自然への抵抗、その征服によつて地球上の覇者となつたことである。そして、凡ゆる人間の努力は、その自然的な運命を切拓き、打開するところに、生長の嚆を望み得たのである。ひとり女性のみ、ひたすら自然に順應し、屈從してきたのであろうか。

「永遠に女性なるもの、われらを引きて往かしむ。」(ゲエテ)という頌歌の側らに、「女なる故に」や、「弱きものよ、汝の名は女なり。」が、いつまでも附纏うという面白さは、何と解かれるべきであらう。今後の日本に世界史的発展を築こうとするには、それらの課題の不思議を、三代の女性にあらわれたモラルの變化、愛情、風俗などとの關いを通じてこそ、初めて可能であり、革新的となり得るであろうことが考えられる。劃期的な歴史創造の、今日の女性にしても、かつて見ない有史以來の國民的愛情の共感に揺振られる時代の婦人も、過去を引継ぎ、それを擴充する役割を持つて現れたのである。決して、無からの創造に憑かれたのではない。

戦争は、いかにも彼女らを躍進せしめたように見えても、それは一面で、こんにちの状態は、また過去に逆戻りし、或は曾てない放埒や無性格に停滞しないとも限らない。こんにちの民主革命は言葉のみで、まだ残存の資本主義は最後の身ぶるい激しく頑固である。そして彼らブルジョ

アジは、封建的なものをまだ引摺りながら、女性一般への神秘の幻想を支えている。これらの神秘の幻想、資本主義は、こんにちの女性が、よほど民主革命の方向に協同的になるのでなければ、過去の残滓は、なおも執拗に女性の前進を阻んでゆくであらう。

明治、大正、昭和の小説にあらわれた女性は、以上のような切實な、女性こんにちの課題を解く鍵として、その思想や、觀念の風俗的、歴史的な發展の生々しい具體として、悲喜劇の舞臺に立ちあらわれる。何が悲喜劇の分類を行なつたのであろうか。彼女らの涙や悦びの聲は、こんにちの女性一般の發展にどう連なるものであるか。過去の嘆きは、その犠牲的な涙によつて、こんにちの歡喜となり得ているか。みずからの發展と、その新・歴史的役割の嚴しい責任の自覺は、いきおい、みずからの性格や、環境への凝視を深めさせるであらう。そのような、自己革新の凝視を意義あらしめ、前進の榮養たらしめるには、みずからを支える傳統的性格の來歴を知らずにはいられない筈である。かような考察から、この小さい企ては始められた。それが、抱負を満たすものであるか、否かは、讀者諸氏の明敏な批判を俟つのみである。

明治女性の歴史的な苦惱は、みずからが、自らの運命の支配者として生きるために生まれた。そのような歴史的理性は、いかような因襲と對立しなければならなかつたか。歴史の命じた明治女性の自覺は、果して女性の生長を、どのように促がすものであつたか。みずからを、自らで形

成し、建設しゆく歩みに、目覚めた黎明期の女性の苦惱は、また、自己形成を環境に依頼せず、自發的に成し遂げねばならぬ女性のこんにちへの、教訓の數々を含んでいる。

大正期は、總じて解放された女性の悲劇と、その頽廢の時代であつた。しかし、その頽廢の腐蝕のなかにも、昭和へと傳わる強靱な、女性の生活力と、聰明な知性の芽生えがあつたのである。歴史は、側面的には進まない。かならずや、頽廢のなかに次の發展を、發展のなかに恐るべき停滞の要素を交えつゝ發展する。そして、昭和時代へと、女性の傳統は、次第に前進的な光りを注ぎ入れてきた。

しかし不幸は我が國をファシスト體系に操り、國民を、其影響は、いかにも強く作用した。今後、言わば女性本來の革新というより、男女の差別なき、例えばソヴィエトに於ける女性の躍進に沿うべく、協同的努力を傾けることによつて、はじめて日本女性の上に光りをもたらすことが出来るであらう。

この書が、女性のこんにち、今後の前進に何らかの判斷力と榮養とを與え得るならば、幸い、これに過ぎるものはないであらう。

一九四六年七月

著者

目次

まえがき.....一

序章 回顧(女性史の蘇生).....一三

第一章 傳統の惱みから解放へ(明治期).....二九

I 黎明期の苦惱

- 1 女權擴張と「蟻中樓」.....三二
- 2 最後の叫びと「十三夜」.....三五
- 3 二つのタイプと「不如歸」.....三九
- 4 紅葉の女性と「金色夜叉」.....四二
- 5 「婦系圖」と死の抗議.....四五
- 6 美しい滅びと「瀧口入道」.....五〇

I 自己形成への歩み

- 1 名譽の犠牲(「地獄の花」)……………一五
- 2 「煤煙」と戀愛の畸形……………一八
- 3 愛憎の分裂と「死の勝利」……………一九
- 4 「虞美人草」の藤尾……………一九
- 5 婦人の自立と福澤諭吉……………二〇
- 6 獨立への歩み「魔風戀風」……………二三
- 7 「人形の家」のノラ……………二三
- 8 むすび・「青鞥派」の運動……………二六

II 明治女性の環境と輿論

- 1 北村透谷の戀愛觀……………二五
- 2 開化期の環境と良妻賢母主義……………二六
- 3 後期の自覺の性格……………二八

第二章 解放の悲劇から生活愛へ(大正期)……………一五

I 致養の悲劇

- 1 推移の過程……………一五
- 2 「律子と瑞枝」の決意……………一五
- 3 性格・環境・運命……………一六
- 4 美しい時代の浮標「眞珠夫人」……………一六
- 5 觀念の敗北……………一七

II 生活の慧智と悦び

- 1 「あらくれ」のお島の生活力……………一七
- 2 環境のちがいと慧智の方向……………一八
- 3 「つゆのあとさき」の自己喪失……………一八
- 4 「何が彼女をさうさせたか」……………一九
- 5 新しい自覺の基礎……………二〇

Ⅱ 解放された犠牲（大正期の省察）

- 1 因襲の冷笑と愛情の技術化……………二〇四
- 2 職業的擴大の結果は！……………二〇七

第三章 働く慧智と新世代の創造（昭和期）……………二二三

Ⅰ 愛情の流浪から眞實へ

- 1 「廢園」の近代的人格……………二二五
- 2 「眞實一路」の受難……………二二七
- 3 物慾の破滅と「美しき園」……………二三五
- 4 「假裝人物」の流轉の悲劇……………二四四
- 5 「若い人」における二重心理……………二五五

Ⅱ 歴史の發展と愛情の擴充

- 1 女性の勤勞的役割の變化（「煉瓦女工」）……………二六九

Ⅱ 現代女性の發展と歴史への愛

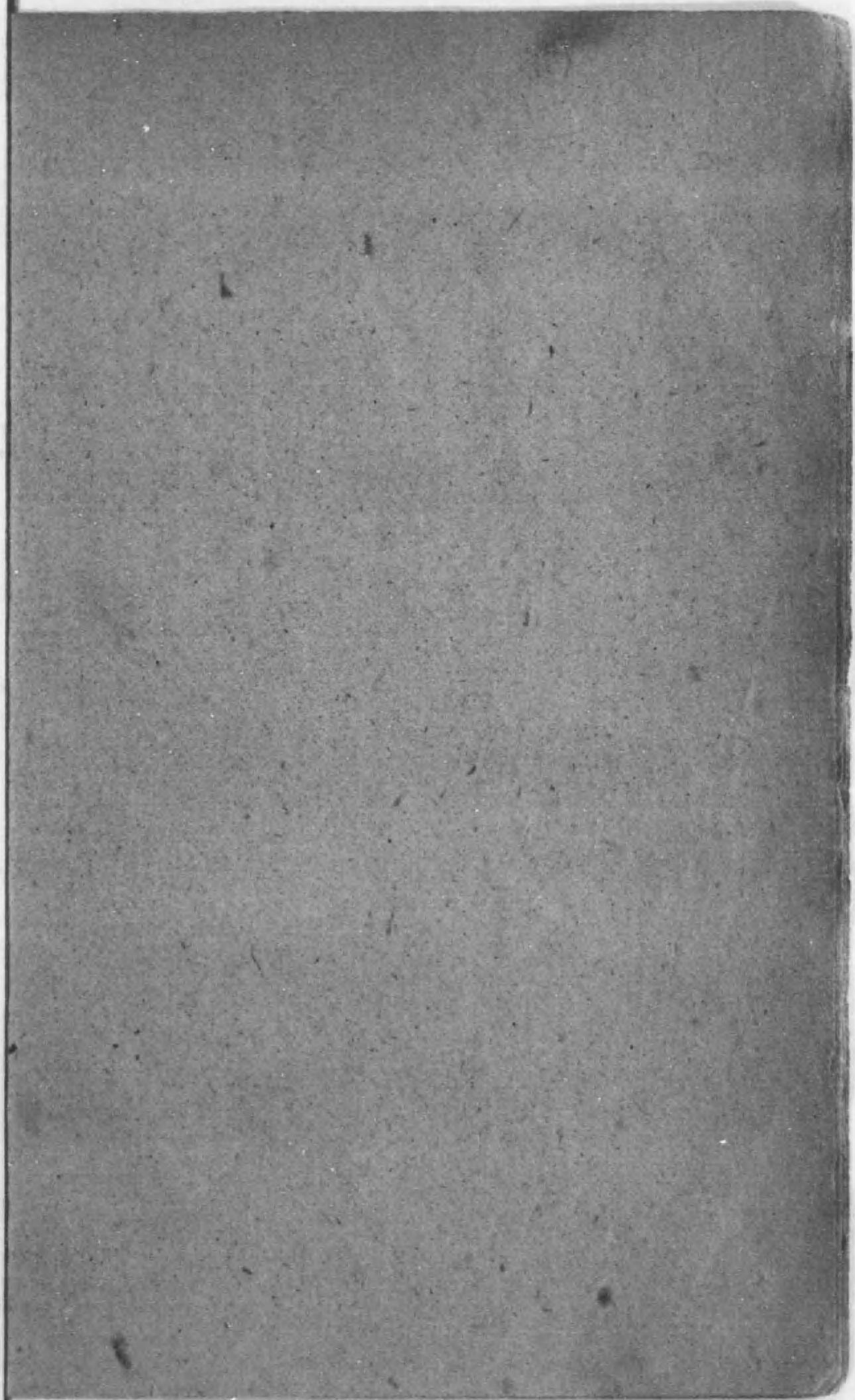
- 2 「母系家族」の女性像……………二八〇
- 3 愛情の計算と技術……………二八八
- 4 躍進する女性像（「東京の女性」）……………三〇〇
- 5 働く女性の自覺と男性の後退……………三〇八

Ⅲ 現代女性の特質について……………三一四

- 2 未來への發展の課題……………三一九

あとがき（小説の女性と現實の女性について）……………三二四

欠



第一章 傳統の惱みから解放へ（明治期）

欠

この章の主要な作品と作者

廣津柳浪「巖中樓」

樋口一葉「十三夜」

徳富蘆花「不如歸」

尾崎紅葉「金色夜叉」

泉鏡花「婦系圖」

高山樗牛「瀧口入道」

永井荷風「地獄の花」

森田草平「煤煙」

夏目漱石「虞美人草」

小杉天外「魔風懸風」

1 黎明期の苦惱

明治の年代は、一般に近代文化の昂揚期と云われている。言い換えれば、鎖國の夢から覺めて舊時代からの離脱と、新文化の創造とが、この時代の人心にとつて大きな關心でもあつたからである。もちろん人心とは言つても、それが一部先覺者のみに限られていたことは事實だが、維新の變革から生み出された新しい制度や生活が、何かこの時期の人々に未來への限りなき希望と確信とを與えていたことは確かである。西歐思想の移植に伴つて、あらわれた社會風潮の動きや文化の改造にも、皮相な傾きと浮薄な雷同の意識こそあつたが、若き日本の前進の態勢に相呼應する生氣の漲り、理想への鼓動は力強く羽搏いていた。そのような國家的革新の動きのなかで、女性の生活にも、僅かではあるけれど變化が見えていた。初めて力を入れるようになった女子教育はその一例である。

知識は勤勞への怠惰を誘うかの如く、文盲は、婦徳の一部のように言われた舊い觀念が一掃さ

れて、女子教育の振興が明治初年に唱えられたとき、わが國における婦人解放の最初の一頁が開かれたのである。

おもえば、明治七八年のころ開かれた女子師範學校は、新時代とともに女性の使命もより大きく擴大されねばならぬことを豫告したものである。鎖國三百年の惰眠を破つて、一躍日本を「外文明國の第一線に立たしめねばならぬ」という國民的氣魄は、この女子教育の課題にまで及んだのである。それゆえに、身過の術や、結婚資格のための女子教育とは、自から類を異にしていた。教えるものも、教わるものも俱に、學問そのものの研究に眞摯な熱情を打込み、日本文化の前進に寄與するためという自負に満ち溢れていた。

こうした當時の革新的風潮に並んで、婦人問題も擡頭した。女の主權に對する初めての表明が、知識人のなかから生れてきた。

廣津柳浪の「醫中樓」にあらわれる女學士山村敏子などは、こうした「新しい型」の女性の一人であることは確かであろう。

彼女は熱心な婦人参政權の主張者である。婦人参政黨擴張運動のために私生活を抛つて下阪する。大阪で初めて會つた久松幹雄は、改進黨の主幹で、學力識見ともに具わつた青年である。婦人参政運動の助力を乞うために幾度か會見するうち、彼女は幹雄を秘かに戀するようになる。し

かし幹雄にはすでに松山操という愛人がある。彼女は諦めた。そして、専心参政運動に没頭する。だが運動に對する助力は、その後も熱心に頼むのである。しかし、一般狀勢や機運というものを考へた幹雄は、時機の到らぬことを諄々と説いて彼女に反對する。しかし彼女は、こうした反對にも失望せず懸命に努力する。だが、擴張運動は一向に進展しなかつた。心身ともに疲れ切つた彼女は、ついに病床に仆れる。

ちようど、そのとき東京の父が大病に罹つたという報せを受ける。しかも、その報せに前後して、議會に提出されていた婦人参政權案が否決になつたという電報が配達されてくる。彼女は望みを失つた。青春を賭けて闘つた理想が、容赦なく打碎かれたからである。彼女は出奔した。あてのない出奔をした。

このようにして、美しく聰明な彼女の理想は破滅してゆくのである。先進の女性によつて實踐された開拓の途ではあつたが、現實は彼女の要求を容れないのである。いや、容れないばかりでなく、慘めに踏み碎かれてしまつた。長い年代にわたつて、中世から近世へと築かれて來た封建道徳や一般の慣習は、一朝一夕に容易く變革できなかつたのである。従つて一部知識人の間のみ考へられた、これら理想や要求は、現實生活とは餘りにも隙があり過ぎたのである。もちろん、當時の風潮が、國會開設とか條約改正とかいう明治文化發達史上の混亂時代であつてみれば、男

子が一樣に政治に狂奔するにつれて、婦人もまた、自然その方面に興味を寄せるようになるのも當然とは思われる。しかも、それに加えて西歐の自由平等の思潮などが慌しく取入れられてきた矢先であつたから、より一そう政治的に傾いていつたのも不思議ではない。「蜃中樓」の主人公、山村敏子などは、この意味では確かに時代女性の一部を代表した婦人であつた。

彼女の意見がどんなものであつたか、その演説によると、「斯く一方には自由権を貴び置きながら、唯婦人の上にはばかり體格と氣質とに些少の差異あるを口實となして、幸福の根本とも申すべき權利を與えないという理由はありますまい。」

彼女は、當時の男女が平等の權限の上に立つていないことが如何に偏見であるか、女性の精神力が劣悪だという俗見に強く反撥した。「斯かる道理があるにも構わず、男女は同權なるものにあらず、婦人は精神力に於て男子に劣れり、故に參政權を與う可からず、と云う論者がありましようか。私は決してあるまじと思ひますれど、演説に新聞に時々如此暴論を聞きますのは、妾の社會の爲に最も悲しむ處であります。」

しかし、このような先進女性の革新論も彼女の意中の人にさえ蹴られる始末であつた。男子の普選さえ空論に思われていた當時、女子參政權運動が、いかに細い小鳥の囀りであつたかは、この小説の名の示す通りである。

彼女の慕つた改進黨の黨士は、彼女の意見を全面的に否定し、女子に參政を許した曉は「空想と柔弱と血の道騒ぎのほか何の利益」も、もたらす筈はないと痛烈に非難した。

これらの所謂「新しい型」の女性たちは、當時政治小説としてあらわれた東海散史の「佳人の奇遇」や、末廣鐵腸の「雪中梅」二部作や、須藤南翠の「新粧の佳人」「綠簑談」などにも、特徴的な姿で描かれている。極端な歐化主義に對する反動がやつてきたのは、ちよらど、これらの小説が出た前後からであつた。束髪や洋服が廢れて、丸髻や高島田が流行し初めたのである。また、それまで何か時代おくれのように考えられていた茶の湯とか活花の類が、示し合わせたように復活されてきた。女子教育にも、以前とは違つた方針が目立つてきた。二十年代へ入つてから女子大學やその他各種の公私立女學校も設立されたが、この時分には明治初期のような、女子自身の啓發向上を目的とする教育方法は見られなかつた。一説には、突飛な女政客などを出したことに深く怖れをなしたからだとも言われているが、そのような教育、思潮の國粹的轉換には、歐化主義のみでは日本文化が成熟し得ないという一般の國民的自覺が作用していた。廿年から日清戰爭に至る期間の日本は、いわゆる歐化主義の敗北、或いは國粹思想との妥協の時代であつた。

開化思想の先驅者として有名な福澤諭吉さえ二十一年には「尊王論」を著して皇室の尊嚴を説き、その他の多くも、歐米模倣に痛撃を浴せ、國粹保存に努力した。しかし、極端な國粹論と

もに、現實日本の發展のために、頑迷固陋に陥らず、歐米文化の長所を取入れ、それを飽くまで日本の精神によつて消化するよう警告した折中主義者、或いは新保守主義者も誕生した。かような國粹論の濫頭により、或いは、その折中主義の風靡の傾向は凡ゆる面に波及した。従つて、婦人運動にもそれは響いた。

すなわち、この時期になつてからというものは、進歩的だと言われた婦人たちの政治的行動というものは、すつかりその影を潜めてしまつたのである。

文藝の方面に樋口一葉の名が見えたのもその頃であろう。誰であつたか、日本における過去女性の最後の叫びを代表したものが、一葉だという意味のことを言つていたが、まことに一葉の作品にあらわれる女性は、求めることのない歸めの女たちである。どん底に落されても、耐え忍んで袖を絞るといつた、哀愁の色濃い因襲的な女性たちである。「にどりる」のお景にしても、「十三夜」のお關にしても、「われから」のお町にしても同様である。

2。

「十三夜」の主人公お關は、しがたない暮しに育つた美しい娘である。十七のとき、その美貌を見込まれて勅任官の原田勇と結婚する。貧しくして育つた娘の立身を、お關の親たちはつねに喜び誇つてゐる。結婚後七年を過ぎて、夫婦の間には六歳になる男の子まであるようになる。だがどういうものか、夫はお關を見ると常に辛くあたる。何ごととも内輪で貞淑なお關は、すべてを自分の身ひとつに包んでじつと耐える。彼女は實家の親たちと逢うことはあつても、ついで洩しはしなかつた。心配をかけまいと思ふからである。

しかし、どうしても夫の虐待を耐えることが出来なくなつて、ある夜、突然父母の家を訪ねる。だが格子戸の外に立つと、中から父親らしい落着いた笑い聲が聞えてくる。「相手は定めし母様、あゝ何事も御存じなしに、あのよう喜んでお出遊ばすものを、どの顔さげて離縁状もろうて下されと言われたものか、叱られるは必定、太郎という子もある身にて、置いて驅け出して来るまでに種々思案もし盡しての後なれど、今更にお老人を驚かして是れまでの喜びを水の泡にさせます事つらや、寧ろ話をすに戻らうか」そう考えると、俄に家へ入ることもならず、しばらくは迷つた。

「戻らうか、戻らうか、あの鬼のような我良人のもとに戻らうか。あの鬼の、良人のもとへ——えい厭々」と、身をふるわす途端に、よろよろとして格子へ突きあたる。その物音に中から「たれだ」と父親の大きな聲が聞えてきた。お關は我に復つたように、あわてて戸内へ入るのである。

親たちはもちろん、お關の來訪を喜んだ。「今夜来てくれるとは夢のような、ほんに心が届いたのである。自宅で甘い物はいくらも喰べようけれど、親の拵えたは又別物、奥様氣を取すて今夜は昔のお關になつて外見も構わず豆なり栗なり氣に入つたものを喰べてくれ」と、たまたま十三夜で拵えた供物をすすめてくれる。決心もし、心を鬼にもして出かけて來たお關は、父母のとうした心遣いを眼のあたりに見て、言い出しかねたのであつた。しかし、思いあまつて口を切つた。

「私は今日まで、ついに原田の身に就いて御耳に入れた事もなく、勇と私との中を人に言ふた事は御座りませぬけれど、千度も百度も考え直して、二年も三年も泣盡して今日という今日どうでも離縁を貰うて頂こうと決心の臍を固めて來ました」

そう前置きして、彼女は父母のまえで次のように自分の苦衷を訴えるのである。

「今までは黙つていましたけれど、私の家の夫婦さし向いを半日見て下さつたら大抵がお解りに成りましょう。物言ふは用事のあるとき慳食に申附けられるばかり、朝起きまして機嫌をきけば不圖協を向いて庭の草花を態とらしき褒め詞、是にも腹はたてども良人の遊ばす事なればと我慢して、私は何も言葉あらそいした事も御座らせぬけれど、朝飯あがる時から小言は絶えず、召使の前にて散々と私が身の不器用不作法を御並べなされ、それはまだ辛棒をしましうけれど、

一言目には教育のない身、教育のない身と御蔑みなさる。それは素より華族女學校の椅子にかゝつて育つた者でないに相違なく、御同僚の奥様がたのようにお花のお茶の歌の畫のと習い立てた事もなければ、其お話しのお相手は出來ませぬけれど、出來ずば人知れず習わせて下さつても濟むべき筈、何も表向き實家の悪いを吹聴なされて、召使いの婢女どもに顔の見られるような事をなさらずとも宜かりそうなもの、嫁入つて丁度半年ばかりの間は關や關やと下へも置かぬようにして下さつたけれど、あの子が出來てからと云うものは丸でお人が變りました、思い出しても恐ろしゆう御座ります。」

さらに彼女は續けて言う。

「私は暗闇の谷へ突落されたように暖かい日の影というものを見た事が御座りませぬ。初めのうちは何か申戯と態とらしく邪慳に遊ばすのと思つておりましたけれど、全くは私にお厭きなされたので此様もしたら出て行くか、彼様もしたら離縁をと言ひ出すかと苛めて苛め抜くので御座りましよ。よしや良人が藝者狂いなさるうとも、圍い者してお置きなさるうとも、其様なことに格氣する私でもなく、婢女どもから其様な噂も聞えますけれど、あれほど働きの御方なり男の身のそれ位はありうちと、他處行には衣類にも氣をつけて氣に逆らわぬよう心がけておりますに唯もう私の爲る事とて一から十まで面白くなく思召し、箸の上げ下しに家の内の楽しくないは

妻の仕方の悪いからだと仰しやる。それも何ういう事が悪い、此處が面白くないと言ひ聞かして下さるようならば宜けれど、一筋に詰らぬくだらぬ、解らぬ奴、とても相談の相手にはならぬの、いわば太郎の乳母として置いて遣わすのと嘲つて仰しやるばかり、ほんに良人というではなく、あの御方は鬼で御座りまする。」

いかに彼女の結婚生活が悲惨なものであつたかは、これによつても領けるであろう。虚げられるものの弱さが、惻々と讀者の胸に迫つてくる。

子の母親であるお關にとつて、子供を棄てて出るつらさは、おそらく骨身にも應えたであろう。彼女の親たちも、それを不憫と思わぬではなかつた。が、「大丸話に金輪の根を巻きて、黒縮緬の羽織何の惜氣もなく、わが娘ながちいつしか鬘う奥様風」を眼のあたりに眺めると、「これを結び髪に結いかえさせて、綿銘仙の半纏に袴がけの水仕事さすこと」のいかにも忍びがたく思われて、「一旦の怒りに百年の運」を取外すようなことがあつてはならないところから、種々の利害を説いて離縁を思い止まらせようとする。「區役所がよいの腰辨當が釜の下を焚きつけて呉れるとは格が違ふ、従つて喧しくあろう、難しくもあろう、がそれを機嫌のいいように整えて行くのが妻の役」だとも言ひし、又「うわべには見えねど、世間の奥様という人達の何れも面白く可笑しき仲ばかりは有るまじ、身一つと思えば恨みも出る、何のこれが世の勤め」であつて見れば、諦めること

も出来るではないか、とも言つて勧める。それに原田から亥之(お關の弟)が、いろいろ世話を受けていることなども算えあげて、「辛かろうとも一つは親の爲弟の爲、太郎という子もあるものを今日までの辛棒が成るほどならば、これから後とて出来ぬ事はあるまじ」「同じ不運に泣くほどならば原田の妻で大泣きに泣け、なあ、合點、そうではないか、合點がいつたら何事も胸に刺めて知らぬ顔に今夜は歸つて、今まで通り慎んで世を送つて呉れ」と因果を含めて諭すのである。

すると、千度も百度も考え直し、二年も三年も泣きつくした揚句に、どうでも離縁して貰おうと決心して家を出たお關ではあつたが、父の言葉にわつと泣き伏して、「それでは離縁を言うたも我儘でござりました」「ほんに私さえ死んだ氣にならば、三方四方風波たゝすに済むゆえ、「今宵かぎり關はなくなつて、魂一つがあの子の身を守るのと思ひますれば、良人のつちく當るくらい百年も辛棒できそふな事、よく言葉も合點がゆきました。もうこんなことはお聞かせ申させぬほどに心配をして下さいますな」と詫び入り、「お父様、お母様、今夜のことはこれ限り、歸りますからは、私は原田の妻なり、良人を講るは濟みませぬほどに、もう何も言ひませぬ、關は立派な良人を持つたので弟の爲にも好い片腕、あゝ安心なと喜んでいて下され」と、涙を隠しつつ歸つて行く。これが「十三夜」に描かれたお關である。

要するにお關は、諦めの女だつたのだ。自分の境遇に負わされた束縛や不運に、叛きもせず、

反抗もせず、悲しむことによつて自らも慰めようとする従順な女であつた。彼女が原田と結婚する前のことである。近くに住んでいた煙草屋の録さんという若者に、お關は祕かに思ひを懸けられる、彼女にもまた、その若者が他人ではなかつた。近くに住んでいた關係から、二人はたびたび會つた。言葉こそ交しはしなかつたが、それでも愛する者同志の眼は、言ひより多くを語つたに違ひない。お關はまた、用達の往き歸りを店の前を通るようにした。そして「行く行くはあの店の彼處へ坐つて、新聞見ながら商いをする」自分を想ひ描いたりした。

だが、原田から結婚の申込をうけると、親たちは身分の違ひの氣にしながらも、嬉しい訪れに遇つたように、お關の本心などは構わず嫁に仕立てしまつた。お關は逆らわなかつた。それが自分にとつて、どんなに不幸な事柄であつても、親の言葉に逆らいたくはなかつた。離縁を言つて繼つた今の場合も、身一つと思えばこそ恨みもあれ、これが世の女の務めだと悟れば諦めも出来よう、と父親から言われれば、それが千度も百度も考え直し、二年も三年も泣きつくした揚句の決心であつても「私さえ死んだ氣になれば」と言つて素直に心を翻えず。

彼女は何一つ求めないのである。良人が藝者狂いをしようが、圍い者に現をぬかそうが、「男の身のそれ位はあり」勝ちのものだと考へる。彼女の斯うした諦めの根柢には、女は男より劣つたもの、卑しいもの、従つて弱いのが女だという抜き難い信仰が、何の疑いもなく宿つてゐる。そ

して、女は、たゞ良人の我儘は許すべきもの、わが身の不運は諦むべきものと、われから女性を弱いもの扱いにして、みすからを憫んでゐるのである。

作者一葉は、かように因襲のなかに跪く女性の苦惱を、堪え忍ぶかたちを描いたが、しかし、それは諦めと絶望が、絶對の運命であるかのように描かなかつた。たとい、微かな響であつても、この呪うべき運命から、因襲の頸木から、飛出さねばならぬという焦躁を寫し出したことは特記されねばならぬ。一葉の誠實な生きかたは、新しい時代の方向を豫見することが出来なかつたとは云え、舊い因襲の強い圍みが安住の地でなく、兎も角そこから脱出しなければ、何らの曙光も望めないことを暗示してゐると云うべきだろうか。

3.

一葉の描いた女性を、政治行動にまで走つた「蜃中樓」の敏子のような女性と對比すると、そこには明らかに、二つの女性典型の築かれつつあることが窺われる。これは、ずつと現代にまで續いてゐる特徴的な二つの女性像である。このことに就いては後章で觸れるが、とにかく今ことにあらわれてゐる二つの女性像には、日本女性の特質が、あざやかな輪廓で描かれてゐる。

これは明治年代になつてから、初めてはつきりと示された二つの生活態度だつたのである。女性の生活態度にあらわれた斯うした相異は、もちろん、女子教育の異常な進展や、社会風潮の變化などに多く影響されたことは事實だが、一つには、當時の情勢と並んで、女性自身が、おのれの生活を、おのれ自身で眞剣に考えざるを得ないような位置に、すでに立たされつつあつたことが原因でもあつたと思われる。

つまり武士階級の崩壊から、士族という稱號だけになつた一庶民たちが、あわただしく襲つてくる生活經濟の不安に立向つて、ともかく獨立した生活地盤を得なければならぬ必要から、働くということに眞剣になつて來はじめた故である。高祿を食んだ武士の娘であらうと、二十人扶持ぐらゐの端武士の息子であらうと、一樣に生きる手段を考えねばならぬところにまで追いつめられて來たのである。こうした一般的社會事情に比例して、女性たちも生きるという現實の問題に、直接か間接か關與しない譯にはいかなかつた。必然の理として、彼女たちの自覺に變化が見えはじめた。しかし、女性たちの生活の變化が明瞭な展開を示すようになつたのは、すつと後れて、明治も終り、大正に入つてからのことである。つまり職業婦人という形に於て、一應の完成を見るわけである。して見ると、この二十年から三十年へかけての年代には、僅かにその端緒が芽生えかけていたという程度に過ぎなかつたとも云える。

小杉天外の「嵐風戀風」に出てくる初野という女性などは、この意味の典型として算えるのは誤りではなからう。

だが、それを考える前に、私は「十三夜」のお關に近い幾人かの女性の、傷ましい心情の經過に思いをとどめて考えたい。これは單に、年代を近う意味だけでなく、女性の相貌の推移が歴史的だつたという確證を、小説に映つた女性像のなかで考えて見たかつたからである。この意味で、泛ぶ小説は、しばしば「紅涙」を絞つたと云われる蘆花の「不如歸」である。

「啼いて血を吐くほととぎす」

これは大正期の人たちに、よく唄われた歌謡の一節である。

絹を裂くような、けたたましい聲で啼く「杜鵑」トビ聲帯の破れるまで啼き續けて死んでゆく「ほととぎす」。

まことにこれは、「不如歸」浪子の死に相應しい象徴である。

片岡中將の令嬢として育つた浪子は男爵川島武男の許に嫁入つて幸福な結婚生活を始める。二人の仲は圓滿であつた。側の眼に羨まれるほど、たがいの愛情は固く濃やかに結ばれ、ともに偉

せであつた。

しかし結婚後一年を経たとき、浪子は不幸にも肺を侵される。はじめは悪質の風邪ぐらゐに考えていた浪子の容體が日の経過に随つてますます悪くなり、ついに咯血する。武男も初めて肺を蝕まれていることを知つて、浪子に轉地療養をすすめる。浪子は、乳母と看護婦とを伴つて逗子海岸へ轉地する。ところが浪子が肺病に罹つたのを幸いに、かねてから懇意に川島家へ出入りしている山木は、浪子を川島家から放逐して自分の娘豊子を後釜に坐らせ、娘の年來の望みを遂げさせてやろうと畫策する。

川島未亡人（武男の母）も浪子の病氣が病氣ゆえ、萬一武男に感染してはと憂えていた矢先だつたので、山木の進言は直ちに功を奏し、未亡人は武男に離縁をすすめる。

ちよらど、艦隊演習で艦へ歸つて行つた武男の留守に、未亡人は片岡家へ山木を遣わして離縁を言渡す。父が會いたいと言うので迎えにまいりましたという伯母の言葉に、何も知らぬ浪子は看護婦に扶けられながら、歸京する。たまたま歸宅した武男は、自分の不在中に浪子を離縁したことを知つて怒る。

時、明治二十七年七月十八日。

清國との開戦愈々一決して、武男の乗組む旗艦松島にも出動命令が下つた。

數ヶ月後、武男は負傷して佐世保の病院に入院する。しかし、一ヶ月餘りで傷は全癒し、ふたたび戦線へと向う。

明けて二十八年、媾和使來り、四月中旬には平和條約の報遍く傳わり、三國干涉の噂に次いで、遼東還附の事あり、同五月末、大元帥陛下凱旋し給いて、戦争は宛ら大鵬の翼を收むるが如く倏然として「巴」んだのである。武男も六月初旬には、大尉に昇進して凱旋する。

だが浪子は、すでにこの世の人ではなかつた。

これだけの粗筋からも窺えるように、浪子は、女として報いられるものもなく死んでいつた。

その短い生涯で營んだ武男との結婚生活も、目を算えれば何日だと言うのであろう。武男の艦内生活をも含めて纔か一年である。しかし、短かつたとは云え、幸福であつた。二人の結婚生活が幸福であればあつただけ、浪子の死は「そう傷ましく思われる。何故ならば、病を得たという、ただ、それだけの理由で、最愛の夫と離別し、幸福な結婚生活をも失わねばならなかつたからである。しかも、それが當事者の合意に基ずいて行われたものでないだけに不幸であつた。

彼女は自分の體を侵しつゝある病魔を呪つた。また蝕まれてゆく自分の肉體をも恨んだ。口喧しい姑とは云え、病氣さえなければ離縁などという、怖ろしい手段はとらなかつたであらう。

彼女は病氣が怖ろしいというよりも、病氣によつて生れる結果が悲しかつたのである。それは

武男にとつても同様であつた。彼も母が浪子との離縁を迫つたとき、及ぶ限り抵抗はしたのだが、彼の母は「浪が可哀相じや、主人の卿には代えられん、川島家には代えられん」一點張りで聞き容れぬのである。

「浪も可愛相な縁なものじやが、病氣すつが悪かじやツか、何と思われただて川島家が断絶するよかまだ宜じやなツか、晴。それに不義理の不人情の言いなはるが、此様な例は世間に幾らもあります。家風に合わんと離縁する。子供が無かと離縁する。悪い病氣があつと離縁する。此が世間の法。晴武どん、何の不義理な事も不人情な事もないもんじや。全體こんな病氣のした時やの、縁の實家から引取つて宜言じや。先方から云わぬから此方で云い出すが何の悪か事恥かしか事があつもんか。」

川島未亡人にとつては、浪よりも、世間の非難よりも、家の傳統が大事だつたのである。川島家を存続させるためには、犠牲を惜まぬし、手段もまた選ばなかつた。武男が妻のために飽くまで意を通すならば、勘當もまた巳むを得まいという考えにさえ導かれる。

彼は離縁演習が終つて歸る途この話は保留して置いて貰いたいと頼んで出かける。しかし、歸宅して見ると、すでに浪子は離縁されていた。彼も、その無縁な因襲に、ひとこと口を尖らさずにはいられなかつた。

「實際ひどいです。今日も一寸返子に寄つて來ると、浪さんは居らんでしよう。行くに尋ねると何か用があつて東京へ歸つたと云うです。變と思つたで、が、まさか母上が其様な事を、貴にひどく——」

憤る武男を尻目に、母は冷たく言うのである。

「最早あとの祭りやなツか。彼方も承知して綺麗に引取つたあとの事じや。此上如何すツかい。女々しか事をしなはツと親の恥ばつかいか、卿の男が立つまいが」

女々しい事をする親の恥だけでなく、お前の男も立たないと言う。もはや、因襲は親子の對立にまで及んだとも云えるのではないか。

黙然と聞いていた武男は断れよとばかり下唇を噛みながら、たちまち勃然と立ち上つて、病妻のために需めてきた林檎の籠を微塵に碎きながら、

「阿母、あなたは浪を殺し、まだその上武男を御殺しなすつた、最早御目にかかりません」と、席を蹴つて軍艦に引返して行くのである。

こうして一度は昂奮のあまり、母に叛いたが、彼の決意はどこまでも不徹底のものにならざるを得なかつた。彼は浪子との復縁を望みはしたけれど、自分の意志を通そうとすれば、母と衝突することは自明である。しかし、「母との間を前にも増して乖離」さすことは堪えられなかつた。

それは、「母に逆らうの苦は已に嘗め」ていたからである。従つて、こうした桎梏に縛られて悩むことを「齟齬しと思えど、脱るゝ途を知ら」なかつたのである。

言うまでもなく、彼は因襲の絆に縛られたのである。浪子が習俗の掣に殉じたと云えるならば、彼は、家族組成の縛めから脱れ得なかつたのだ。ともに彼等は、彼等の懐から幸福な生活を奪い取る黒い手を拂い退けることが出来なかつたのである。それを振りちぎることによつて、或いは眞實の生活と、理想とを、おのれのものにすることが出来たかも知れぬ。だが、それをすることは、親に逆らうことであり、傳統に對する反逆である。世嗣のために嫁取るといふ觀念に随わぬことは、當時の人の道に逆らうことであり、道德の掣に反くことである。彼らは、その觀念の重壓から逃れるには、あまりに弱かつた。

しかし、それならば人間同志がその深く結ばれた生活で得る愛情と悦びとを、いつたい誰の手で守り續けて貰つたらいいのか。

結局、當事者のいたわりと努力を俟つ以外なんの途もなかつた譯である。

しかし、「不如歸」にあらわれる相愛の男女は、彼らがその結合によつて得た愛や悦びを、守り續ける強さがなかつたのではあるまいか。つまり、最悪の事態を、もつと執拗に押切つて行く勇

氣と決斷が、武男になかつたからではあるまいか。

浪子はその短い生涯を傷ましく畢えねばならなかつたのも、要するに武男の意志の弱さに原因があつたのだ。彼が優柔であり、不徹底だつたからである。生活を片輪にしつつある習俗に、彼は如何なる生活と行動とをもつて双向つたと云えるであろう。このような人生に對する行動の弱さが、彼等の生活を破局へちかづけたのであるし、滅びの淵へ追いつめていつたのである。

これは浪子にとつて不幸であつた。同時に、女性一般にとつても悲しむべき事態であつたかも知れない。最愛の夫と離別し、結婚生活をも失つて病に死んでゆく浪子は、しかし、例外なく悲劇の主人公であつたに違いない。

4。

これを「金色夜叉」のお宮と比較するとき、その心情において、性格において、幾多の共通點さえ見出される。それは「婦系圖」のお蔭や、「煤煙」の隅江や、「虞美人草」の小夜子にも通ずる傾向である。

「金色夜叉」は、言うまでもなく、尾崎紅葉の死の前年に書かれた小説である。

紅葉の文學者としての聲望は、一般には可なり仰々しいものであるが、彼の文學は初め西鶴の模倣から始まり、明治開化の理念によつて拓かれた國民の新しい精神の衝動には、むしろ反撥している側にあつた。彼は、封建的因襲への執着が強く、新しい改革の方向に與^{まは}することには眼の輝きを失つていた。しかし、西鶴の寫實主義を學んでいたから、ともかく、當時の社會の、外形だけの動きは描き得た。

皮相な外面的實相や通俗な人間心理の動きを、文學的な好奇心で捉え、その描寫の技巧にのみ捉われたのが紅葉であつた。彼は、女性や性道德に對しても新しい芽生えを素朴に捉え、そこに人間の歴史的な進化を眺めることは出来なかつた。

つまり、在來の舊道德に立向つて、來るべき時代のために曉の鐘を打ち鳴らすというような、新鮮な構圖を人生體驗として持つた人ではなかつたのである。

紅葉の小説にあらわれる女性たちは、一樣に貞節で従順で、男から一步へり降^{くだ}つたところに、おのれの生活と心の住家とを見出している。つまりは、舊時代の傳統を望郷的に美わしい抒情と夢によつて再現しようとしていたのである。

男性に對する顧慮のない崇拜と忍従が、幅太い輪廓で彼女らの道德に垣をめぐらしているのである。それは「多情多恨」のお種にしても、「おぼろ舟」のお藤にしても、「色懺悔」の若葉と芳野にしても、「むき玉子」のお喜傳、「三人妻」のお艶、「不言不語」のたまきにしても同様である。

白河樂翁は「女はすべて文盲なるをよしとす。女の才あるは大に害をなす。決して學問などいぢぬものにて、假名本讀むほどならばそれにて事足るべし。女はたゞ内にくどくとして日を暮すもの故、馬鹿なるが女の知るなり」と言つたが、女の知的特性が寧ろ學問を失うという側面にある如く教えている點は、この頃の婦人道德に對する輿論の一端を傳える言葉として興味がある。

これが紅葉の見解と、どの程度に相異しているかは、ここでの問題でない。ただ、紅葉の小説にあらわれてくる女性たちが、共通的に夫唱婦從の觀念に生きている事實を考えれば、當時の婦人道德の理想が、一般的には必ずしも白河樂翁の言葉を頭から否定するような傾向になかつたことだけは窺える。

尤も、當時このような封建的な觀念からの脱出に向つて、清新な氣概と、それ故の懷疑と懊惱を累ねた「文學界」一派のような舊道德破壊の叫びも盛上りつゝあつたのではあるが。

貫一と宮は親の許した間柄である。

貫一の亡父に生前恩をうけた鳴澤隆三（お宮の父）は、父母なきあとの貫一を引取つて養育していた。

尋常中學から高等中學へ、そして行く行くは大學を卒業させて、娘宮の夫として自分らの後生を見とつて貰う考えであつた。「貫一は篤學のみならず、性質も直に、行も正しかりければ、此人物を以て學士の冠を戴かんには、誠に獲易からざる婿なるべし、と夫婦はひそかに喜んでいたのである。

貫一もまた、他姓を名乗ることは潔しとしなかつたが、「美しき宮を妻に爲るを得ば、此身代も屈辱も何か有らん」と考えた。宮も、貫一を離れて生活の未來は信じられなかつた。

或るとき歌留多の會へ招かれて、宮は富山という男に見初められる。洋行歸りの富山は、富山銀行の後繼者であつた。その夜、彼が歌留多會へやつて來たのは、妻とすべき女をそれとなく物色しようと思つていたからである。宮は、彼の理想に叶つた女性であつたのだろうか。彼の眼は、際立つて美しい宮の容姿に釘づけにされた。

「あれがらう」

彼は、さつそく心にそう決めたのである。

鳴澤家へ箕輪夫人が訪れたのは、それから間もなくであつた。富山が宮を嫁に欲しいと云うのである。宮の父母も一時は迷つた。しかし、相手が富山であるだけに惹かれて、内諾を與える。

宮の父は貫一が悲歎に暮れるであろうことを心配して、なだめる方法を色々工夫した。豫想

どおり貫一は驚く。

「之に就いては、私も種々と考えたけれど、大きに思う所もあるで、いつそ彼は遣つて了つての、お前は最少しの事だから大學を卒業して、四五年も歐羅巴へ留學して、全然仕上げた所で身を固めるとしたら如何か」

と、隆三は、彼の苦痛をはぐらかすような條件を持出すのであつた。

貫一は、宮の本心を糺すために翌日、熱海の温泉に母と滞在する彼女を訪ねる。潮鳴りのする海邊に、暫く振りで會つた二人の愛情は蘇生の思いで向合つた。だが、富貴の眩しさに一度とらわれた宮は、富山との縁談をどうしても思い切ることが出来なかつた。この時の貫一の憤りは有名である。

「宮さん、恚して二人が一所に居るのも今夜限りだ。お前が僕の介抱をしてくれるのも今夜限り。僕がお前に物を言うのも今夜限りだ。二月十七日。宮さんよく覚えてお置き。來年の今月今夜は、貫一は何處で此月を見るのだから！ 再來年の今月今夜……十年後の今月今夜……一生を通して僕は今月今夜を忘れん。忘れるものか。死んでも僕は忘れんよ！ 可いか宮さん、一月の十七日だ。來年の今月今夜になつたならば、僕の涙で必ず月は曇らして見せるから。月が……月が……月が曇つたらば、宮さん、貫一は何處かでお前を恨んで、今夜のように泣いていると

思つてくれ」

心騒ぐまゝに縋りつく宮を振拂いながら、貫一は、怨みの捨臺詞を吐き残して立ち去る。

宮は富山と結婚したが、些^ちしも幸福の訪れではなかつた。彼女は結婚まえを憶い後悔の念に誘われる。今更の如く貫一が懐い出されてきた。貫一を失つたところに、自分の本當の生活の姿は發見できなかつたからである。

熱海から姿を消した貫一は、その後、この世の最悪の人間と看做された高利貸の手代になつて、ひたすら金を積む。苦惱から復讐へ、愛より金に心うばわれた宮との運命に向つて、貫一の憎悪は、最悪の人間に成り下つて、みずからの失意を忘れようとするに至る。

以上が「金色夜叉」の梗概である。

ここで考えられるように、宮は初め富貴に對する憧れに強く動かされたまゝ、愛情の眞實を侮蔑した女性である。彼女にとつては、愛情も尊いであろうが、物質的にも自由に振舞える生活なくして何の愛情か、という囁きから逃げられなかつたのだ。

貫一は、誰よりも自分を愛していた。自分もまた、貫一に本心を揺ぶられない譯ではなかつた。しかし、結婚の對象として考えた貫一は、果して缺點を持たぬ男と言えるであろうか。これは疑問というよりも見え透いていた。なるほど、彼は雀が米を食うのは僅か十粒が二十粒だと言つ

た十粒か二十粒の米に事缺かして宮さんに不自由はさせないとも言つていた。

しかも、十粒二十粒の生活をしてまで彼の愛情を受け容れねばならぬという理由がどこにあるう。たしかに、二人は將來に對する默契を交したには違いないが、それは徳義の問題であつて、世間の認める契約ではない。従つて、たとえそれを破つたからと云つて、自分に罪があるのではない。彼が女の要求するものを満たすだけの力と條件を具備していない故である。

その證據には、明治音楽院へ通つている時も、ヴァイオリンのプロフェッサをする獨逸人から結婚を申込み、ある病院の院長からも妻に欲しいと望まれた。望まれるに値する自分だつたからなのだ。して見れば、富山の縁談を承諾したことが、どうして不可解なのか。たとえ、その爲に一人の男が不幸に陥つたとしても、まったく自分のみの關與する事柄ではあるまい。なぜならば、愛情以外に女を満足させる何物もないような男であつて見れば。

このような、物質への憧れになびく個人主義思想の誘いを受けて、宮は富山との結婚生活に未來を信じて飛込んだのである。一度は、男の強い愛情の手を振拂つて、おのれの信じた生活に憧れた彼女ではあつたが、家庭に身を收めた瞬間から、おのれに許された幸福というものがどんなものであるかを振返さざるを得なかつた。

自由に振舞える生活、十粒や二十粒で満足できない女の欲求をも満たし得る生活、そうした生

活を得ることは出来たが、自分は一體どれだけのものを望み、どれだけのものを與えられたと云うのであろう。彼女は、自分の利那に捉われた行動や考えを悔い、省み始めた。より少ない望みで満足している従順な「人形」だつたことに、はじめて気が附いたのである。

富山との結婚生活で、彼女の享受したものは、事實、十粒か二十粒に過ぎなかつたかも知れない。つまり彼女は、恵まれた物質生活の包圍のなかに坐りながらも、自分がそれを自由に振舞えるのでないことを知つた。

かように富貴の世界も、女性にとつて如何に空虚であるかを知つた宮は、貫一との以前の愛情を慕わしく回顧する。宮は悔悟の心で、貫一のもとに歸つて未來を夢みようとするのであるが、復讐の情熱に焼きつけられた男は頑固に拒絶する。そして、この鏈れのまゝ、この作品は、作者の死によつて未解決に終つた。

未完のまゝではあるが、ともかく、この小説が金と愛との計算に戸迷い倒れてゆく女性の物語であることは疑う餘地もない。そして、金と愛との二筋道に、ともかく分裂する心の迷いを味つたところに、こゝにあらわれた宮の苦惱が、近代に繋がるものであることを知る。たゞ宮は、その二筋のどちらにも徹底できなかつた。貫一の愛情に生きることと物質の生活に酔うことも、そのどちらかの一面にも信念をもつて突進できなかつた。

要するに彼女の不幸というものは、實際生活に對する態度の不徹底と、それに伴なう心理の動搖とに原因があつたのだ。「不如歸」の浪子が、招かざる悲しみに亡びたのに反し、「金色夜叉」の宮は、みずから招くことによつて苦しみ、中途半端である故に、結局、愛情の眞實のなかにも、物質生活の享樂のうちにも、おのれの生きる途を見出し得なかつたのである。

「文學界」の運動とは、雑誌「文學界」(明治二十六年創刊)を舞臺として、北村透谷を中心に、島崎

藤村、馬場孤蝶、屋野天知、戸川秋骨、戸川殘花、平田禿木、のちには上田敏等も執筆していた。

彼らは主として、封建的な舊世代からの離脱と、新しい時代の脈動の激しさを浪漫的に表現した。

まだ舊世代から、はつきりおのれを別ち得ぬながら、新しい個人の意識に強い羽搏きを感じつつ、清純な戀愛に憧れ、ルネッサンス的な人生や人間への憧憬や渴仰に餓えていた。

舊い世代との訣別はあつたが、いまだ新しい理想が定かならぬ時代の懊惱や懷疑が、人生を強く肯定し、人間を廣く解放する立場から考えられた。それ故に、彼ら「文學界」の一派の運動は、新しい時代創造の混沌期における建設的な氣魄の衝動的な現れであつた。

より少ない望みで満足する従順な「人形」は、かならずしも「十三夜」のお關や「不如歸」の浪子や、富山との結婚生活に女の生涯を滅ぼしていつた宮だけに限られてはいないのである。鏡花の「婦系圖」おんなけいずにあらわれるお蔦も、その意味では、おのれから何一つ求めることもなく死んでゆく女である。

お蔦は、淺草で左棲をとつていた女である。そうしているうちに、酒の席で早瀬主税と知合い二人は離れがたい愛情の世界に結び合う。主税は、獨逸文學者酒井俊藏の門弟で、酒井の令嬢お妙とは互に心を許す間柄である。

お蔦と人目を憚つて家を持つてからも、主税はお妙を秘かに想い続ける。お妙も彼を憎からず考えていた。たまたま文學士河野英吉から、お妙は結婚を申込まれるが、俊藏は、早瀬主税が承諾しなければ娘はやれぬと斷る。それは門弟の主税とお妙との間を寛大に見ていたからである。だが、主税にはお蔦がある。俊藏は主税にお蔦と別れることを勧める。師の言葉に反くこともならず、彼は蔦と別れて、ひとり静岡に赴き、獨逸語の私塾を開く。偶然、車中で知合つた河野の妹菅子に、主税は色々世話を受ける。菅子は、静岡某校の校長で理學士島山の妻である。

菅子は主税と交際を續けるうち、越えるべからざる關係に陥る。菅子の姉道子も、不圖した機

會に主税と知合い、夫の宥し難い關係を結ぶようになる。

主税と別れてから、路地裏の佗しい住居に獨りで暮していたお蔦は、健康を損ねて床に臥していたが、ついに重態に陥る。同じ頃、主税も、道子の夫の經營する病院に起き臥するのであつた。俊藏やお妙や姉藝者の小芳に見守られながら、お蔦は愛人に逢うことも出來ず死んでゆく。ほど經て訪ねて來たお妙から蔦の死を聞かされ、主税は深い悲しみに沈んだ。

健康の恢復したのを機會に、お妙は主税に歸京を勧める。しかし、彼は仔細あつて彼女を引留める。それは河野の父英臣が、お家の一門を引連れて久能山に見物かたがた日蝕の觀測をしようとする催しに、落合おらとする爲であつた。

主税は久能山のいただきで英臣に會見し、自分が菅子や道子と關係したのは河野一家を破滅させる爲だつたと述懐する。英臣は怒つて拳銃を握る。だが弾は外れて夫人の胸板を貫くのである。道子姉妹は抱合つて崖へ身を投げる。

その夜、宿へ歸ると、主税は蔦の黒髪を抱きながら、お妙の寢靜まるのを待つて毒を嚙むのである。

ここで見るように、お蔦は古風な諦めの女である。自分の負わされた運命に抵抗もしなければ、

また男から離別を言出されても、それが男の將來にとつて幸福の道であるなら、自分は犠牲になることも厭わないという傳統に培われた女であつた。

お蔭には主税とお妙との間柄も判つていた。知つていたばかりでなく、二人のためなら潔く一さいを諦める覺悟さえしていた。彼女は主税と世帯を持ちたいために自分の着換えから持物をみんな借金の抵當にしてまで一緒になることを楽しんでいながら、ようやく愛人と借家住居の生活ができる境遇になつて、離別を言出されれば苦情ひとつ言わないで別れて悔いがない女なのである。

彼女の生きかたは習俗に捉われた無抵抗の態度であり、その諦めのうちに充實した心理を感じる女であつた。このことは義理のしがらみに逆らうことの出来ない主税の生活態度に共通する人生觀である。

彼もお蔭と暮す境遇のなかに幸福を感じていた。永久に續けてゆく生活だと考えはしなかつたが、破壊するには忍びなかつた。もし許されれば生涯の苦樂を共に味いたい情性から抜けられなかつた。だが、それにも拘らず、恩師の言葉に出逢うと、一溜りもなく心は飄々するのである。

ある時、料亭の一間に誘われて、彼は俊藏から次のような言葉を聞かされる。

「是も非もない。さあ、たとえ俺が無理でも構わん。無情でも差支えん。婦が怨んでも、泣いて

も可い、憧れ死に死んでも可い。先生の命令だ、切つて了え。俺を棄てるか。女を棄てるか。むむ、此の他に言句はないのよ」

すると彼は、考えさせてくれとも言わず、即座に返事をするのである。

「婦を棄てます。先生」

かくて、彼は最愛のお蔭との生活を、にべもなく清算するのである。俊藏には義理がある。恩がある。恩顧に背くことは人の道ではない。彼はそう我身に言い聞かさねばならなかつた。

こうしてお蔭との生活を清算はしたが、彼にはお妙と結婚する意志は毛頭なかつた。彼の考えでは、むしろ、お妙を護ることが出来れば本望だつたのである。恩師に報ゆる微意が、それで通じることとも考えた。従つて河野英吉がお妙に結婚を申込むのだと言つて家柄を尋ねにやつて来た時も、門閥を笠に着て、俊藏の家風や生活状態を蔑むような態度に出られと、自然中傷しないでは済まされなかつたのである。

河野の父英臣は、英吉の言葉に随えば、兄弟一家一門を揃えて、天下に一階層を形造らうと云うのである。従つて、「成るべくは銘々夫々の収入も、一番の姉が三百圓なら次が二百五十圓、次が二百圓、次が百五十圓、末が百圓と云つた工合に長幼の等差を整然と附けたい」と考える。「謂つて見れば、貴族院も一家族で一黨を樹てる事が出来る。内閣も一門で組織し得るようにとい

う遠大な理想があるんだ」と言う。

そして、そのような自己繁榮のためには、娘の結婚に對する理想など、どうあろうと構わず、「親の鑑定で婿を見て授ける」のであつて、従つて「否も應も有りやしない。衣服の柄ほども文句を謂わさん」主義だと憚りもなく吐き出すのだ。

河野の申込に彼が反對したのは、一門の繁榮に役立つ「人形」でさえあればという河野の、あまりのエゴイズムに不快だつたからである。河野一家に對する呪わしい氣持が、この時から彼に意識された。

静岡に來て獨逸語の私塾を開いてから、とくに彼が河野一家に親しく近附いたのは、一つには權門に對する憤りを晴したかつたし、一つには、婦の系圖で一門の誇りを得ようとする陋劣な英臣の魂膽を、腹の底から憎んでいたからであつた。

彼は車中で知合つた菅子と、たゞならぬ關係を結び、又その姉の道子とも關係を結んだ。(道子は、英臣が不在の折、夫人と別丁貞造との間に生れた不倫の子であつた。)彼は、英臣の野望に致命的な傷を負わせたことを北叟笑んだのである。榮達へのエゴイズムを呪う心は、彼をして、かような残酷な道をも辿らせたのであつた。

このようにして、彼は河野一家を破滅に導きはしたが、彼自身を救う道は強いて見出そうとはしなかつた。彼は自分が救われる前に、義理にしたがい、人情に膝を曲げるのである。つゞまるどころ、彼の本意は、俊藏に對する恩報じが、たつた一つの絶對の目的だつたのだ。恩顧に報ゆることが出来さえすれば、それで本望だつたのだ。「人間並にや附合えねえ肩書つきの悪丁稚を、一人前に育てた上、大切な嬢さんに惚れているなら添わせて遣らう、と仰しやつて下すつた先生御夫婦のお志」が、自分の運命にも代え難く思われたのであろう。

従つて、義理に殉じようとする彼の志の前には、愛人の微笑も見えなければ、愛情の床しさもなかつた。彼はそれで満足だつたし、また、それが眞實の生活とも考えられたに違いない。こうした男との愛情に、女の一さいを捧げて死んでゆくお葛は、客觀的には不幸と云うよりも慘めであつた。臨終に居合わせた俊藏は、早瀬に代つて慰める。

「皆居る、寂しくは無いよ。然し何うだい。早瀬が來たら、誰も次の室へ行つて貰つて、恠うやつて二人許りで言いたいことがあるだろう。致方がない、断念めな。断念めて——己を早瀬だと思え。世界に二人と無い夫だと思え。酒井俊藏を夫と思え、情夫と思え、早瀬主税だと思つて、言いたい事を言え、したいことをしろ、不足はあるまい。念佛も彌陀も何も要らん、一心に男の名を稱えるんだ。早瀬と稱えて袖に縫れ、胸を抱け、お葛……早瀬が來た、此處に居るよ」

と云うと、縋りついて、膝に乗るのを横抱きに頸を抱いた。

トつかまろうとする手に力なく、二三度探りはすしたが、震えながら緊乎と、酒井先生の襟を掴んで、

「咽喉が苦しい、あゝ、呼吸が出来ない。素人らしいが（と莞爾して）口移しに薬を飲まして……」

酒井は猶豫わず、水薬を口に含んだのである。

がつくりと咽喉を通ると、氣が遠く成りそうに、仰向けに恍惚したが、

「早瀬さん」

「お蔭」

「早瀬さん……」

「む」

「先、先生が逢つても可いつて、嬉しいねえ！」

——泉鏡花全集「婦系圖」より——

「婦系圖」に描かれる女性たちの経路には、それぞれの意味で傷ましい歴史が疊まれている。愛人と生別れになつて死ぬお蔭、衣服の柄ほど文句を言わさないで嫁しづけられる道子たち姉妹。

ここには一樣に、自覺を知らぬ女性たちの儚い死の抗議がある。

しかし、彼女たちは、こうした亡びゆく姿態のなかに世に逆らう心を貫き、うるわしい抒情詩をわが身をもつて描いた。彼女たちは、新しい自覺に生きず、抗議に亡びたことによつて美しい。しかし、蘇生しがたい約束に亡びゆかねばならなかつたのは、どこまでも哀れである。

しかし、このような客観的な哀れさも、當人たちの主観のなかでは、世の掟にみすからを亡ぼすことのなかに、なんらかの張合いを感じ、男を想う心は、こうした屈從のなかにこそ眞實があると思ひ得たのである。

6。

こうした境涯に、おのれの青春を喪い、その肉體をも滅ぼしていつた女に「瀧口入道」の横笛がある。横笛は舞子白拍子である。或る花見の宴で「春鶯囀」を舞い、その婉やかな姿に二人の男から想いを寄せられる。一人は四位少將維盛卿の身内で足助二郎重景と云い、年よりやく二十。「小松殿の身内に花と謳われし」壯年である。もう一人は同じ小松殿の身内で、その武骨者を知られた齋藤瀧口時頼である。彼は二十三であつた。

二人は、ともに横笛を戀い、或るときは文に、或る時は人づてに、心情を訴えていたのである。ある日、時頼は思案をかさねた末に父親に打明ける。しかし、物堅い父は聞き容れぬばかりでなく、思い切らぬときは義絶するとまで怒る。時頼は詮方なく諦め、永の暇を乞うて出家になる。ほど過ぎて彼の噂は傳わり、大奥にまで囁かれていつた。横笛はとどろく胸を抑えながら様子を聽いて見ると、情なき戀路に世を果無んの業だと言う。彼女は人の手前も忘れて、「そは誠か」と糺すと、女どもは面白げに高笑いして「罪造りの横笛殿、あたら勇士に世を捨てさし」と異口同音にさわぐ。

横笛はつらくと、惟うのであつた。

「世を捨つるとは軽々しき戯事に非ず。瀧口殿は六波羅上下に名を知られたる、屈指の武士。希望に満てる春秋、長き行末を、二十幾年の男盛りには断りて、樂しき此世を外に、身を佛門に歸し給う、世にも憐れの事にこそ。數多の人に優りて、君の御覺殊に愛たく、一族の譽を雙の肩に擔うて、家には其子を杖なる年老いたる親御もありと聞く。他目にも數あるまじき君父の恩義惜氣もなく振り捨てて、人の譏り、世の嗤いを思い給わで、弓矢とる身に瑜伽三密の嗜は、世の無常を如何に深く觀じ給いけるぞ。あゝ是れ皆此の身、此の横笛の爲せし業」であつて、刃こそ當てないが、自分が手にかけて殺したも同然。そう思えば思うほど彼女はせつなく思われ、「せめて

嵯峨の奥にありと聞く瀧口が庵室に訪れて、我が誠の心を打明かさばや」と決意して、黄昏に紛れて旅に出る。

しかし、數もない在家を彼方此方にさまよひながら漸く訪ねると、「世を隔てたる此庵は、夜陰に訪わるゝ覺えなし、恐らく門違いにて候わんか」との答である。横笛は、ここまで訪ねて来たおのれが身の上を訴え、一言の許を乞うのである。しかし時頼は容れなかつた。

「如何に女性我れ世に在りし時は、御所に然る人あるを知りし事ありしが、我が知れる其人は我を知らざる筈なり。されば今宵我れを訪れ給える御身は、我が知れる横笛にてはよもあらじ。よしや其人なりとて、此世の中に心は死して、残る體は空蟬の我れ、我れに恨みあればとて、そを言うの要もなく、よしまた人に誠あらばとて、そを聞かん願ひもなし。一切諸縁に離れたる身、今更ら返らぬ世の浮事を語り出でて何かせん。聞き給えや女性、何事も過ぎにし事は夢なれば、我れに恨みありとな思ひ給いぞ。己れに情なきものの善智識となれる例世に少なからず、誠の道に入りし身の、そを恨みん謂れやある。されば遇うて益なき今宵の我れ、唯々何事も言わず、此儘歸り給え。二言とは申すまじきぞ、聞き分け給いしか横笛殿」

こうして横笛は、會うこともならずして、「往生院の門脇に蟲と共に」泣き明かすのである。白白としたる夜明に、今はとて涙に曇る聲張り上げて、「喃瀧口殿、葉末の露とも消えずして今まで

立ち盡せるも、妾が赤心打明けて、許すとの御身が一言聞かんが爲め、夢と見給う昔ならば、情なかりし横笛とは思い給わざるべきに、など斯くは慈悲なくあしらい給うぞ、今宵ならでは世を換えても相見んことのありとも覺えぬに、喃、瀧口殿」

だが聞えてくるものは、時頼の唱うる念佛と鈴の音のみである。「何とせん術もあらざれば、横笛は泣く／＼元來し路を返り行きぬ。」

その後横笛は、一旦は御所に歸つたが、間もなく行術知れずになる。

長閑に晴れわたつた或る日、瀧口入道は、嵯峨の都を距てた南の里深草を訪れ、とある民家に立寄つた。先を急ぐ身でない瀧口は、その家の老婆とよもやまの話に時を過したが、ふと聞いたのが戀塚の由來である。老婆の話すところによると、この先の深川に沿つた邊りに一棟の庵があるが、その庵に何の故か若く美しい上臈が訪れて住み、朝夕絶ゆることなく優しい聲で讀經を續けていた。

時折水汲みに谷川へ下りる姿を里人は見て、天人でもあれほど美しくはあるまいと語合つた程だという。だがその上臈は何を思い惱んでか病みつき、間もなく歸らぬ人となつたが、誰ひとり、なぜ彼女が尼になつたかを知らなかつた。人々は涙ながらに、庵室の側らへ心ばかりの埋葬を營んでやり、卒塔婆一基を標したが、誰いうともなく「戀塚」と呼ぶようになったと云うのである。

瀧口は哀れを催し、「そは氣の毒なる事なり、其の上臈は何處の如何なる人なりしぞ」と訊ねた。

「人の噂にきけば、御所の曹司なりとかや」

「ナニ曹司とや、其の名は聞き知らずや」

「然れば、最とやさしき名と覺えしが、何とやら、おゝ——それ儘に横笛とやら言ひし、嵯峨の奥に戀人の住めると人の話なれども、定かに知る由もなし、聞けば御僧の坊も同じ嵯峨なれば、若し心當りの人もあらば、此事傳えられよ——」

横笛は死んだのである。おそらく、誰に繼ぐこともなく死んだのであろう。

世を果無んだ男への誠から尼にまでなり、人里を距てた庵に起き伏して償われる日を待ちつつ、世を畢えた横笛の死は傷ましい。彼女の尼になろうとした決意には、女の眞情が深い強さで罩められている。彼女が瀧口に求めたものは、「許す」という、ただ一言の情であらう。しかし横笛は、それさえも報いられず死に赴いた。彼女は庵に籠つて讀經を續けた。やがては魂と若い肉體とを失うであろうことを豫知しつつ、涙を込めて讀經を續けた。

かくて彼女は、顔さえ知らぬ男の心情に、おのが青春の誇りを賭けてまで殉じた。美しい亡びであつた。こうした亡びに泛ぶ幾人かの女性に、「婦系圖」のお蔭があり、「不如歸」の浪子があつ

たのを、讀者は知つてゐるであらう。

しかし横笛は、平安時代の女性であり、平安時代の道徳を身につけた女である。つまり、おのれが、おのれ自身の主人公であり得ない時代の生きかたに育つた、弱い心情の持主であり、實踐者でもあつたのだ。従つて彼女の人生とは、美わしい亡びであり、殉ずるの道であつた。

お蔭や浪子たちは、その環境や生活において必ずしも同一ではない。同一ではないけれど、その心情や倫理には、年代の隔てをもたぬ一致が見出される。これは傳統の故でもあり、女の生活に負わされた宿命の故でもあらう。

しかし、どうした脆さと弱點に苦しみつつ、多くの女性たちは、新しい歴史の形成のために、いかに多くの闘いと努力とを続けねばならなかつたことか、「地獄の花」の富子や園子がそうであつたし、「新生」の節子や、「煤煙」の朋子や「魔風戀風」の初野姉妹がその一人であることに疑いはない。これらの女性たちは、ともかく自分を解放するために環境と闘い、習俗とも逆らつた。

Ⅱ 自己形成への歩み

1。
園子は、ある私立女學校に教鞭を執つていたが、ふとした機會から黒淵家の家庭教師に雇われる。

黒淵家は、とかく世間から疎んじられ、さまざまな風評の傳えられている家である。それは、主人の長義が、よほど以前に西洋人の妾と姦通して、その西洋人の財産をば妾の手を経て横取りした、というような噂が一般に信じられていたからである。従つて「黒淵家は巨萬の財産と此の大きな邸宅とを有つているにも拘らず、全く社會へは顔出しも出來ぬほど」排斥されていた。

だが、園子はその家に馴れてみると、むしろ好感さえ抱くようになった。それは家風と云い、家庭の情態と云い、世間の風説とは、まるで違つていたからである。それに主人の世間を憚るような弱い氣質が、家庭には却つて温かい雰圍氣を與え、園子自身も苦痛を感じる氣遣いもなかつた。

黒淵長義には二人の子供があつた。二十六になる富子と、園子の預つてゐる男の子である。富子は一ど法學士と結婚したが、一年と経たぬうち自分から離縁して、以前、別荘だつた向島の大きな邸宅に獨りで暮らしてゐた。園子は彼女の境涯が、何か自分と同じ宿命に生きる女のように想われて、ことさら足しげく訪れた。二人は人生や社會に對して或る種の共鳴さえ感じ合うようになった。富子は或るとき、園子に向つて次のように言う。

「自分は世間の評判などには決して心を向けずに、自分の爲たいと思ふ事を少しの遠慮もなく自由振舞つてゆけばいい。もう卑しい汚れたものになつて了つた自分の身には、如何なる事をしようが決して人を瞞着するような卑劣な罪を犯さなくもよい。自分の名のために束縛されるような愚かな煩悶に苦しむこともない。自分は全く世間から離れた一人身で、夫もなければ子供もなく、何時何處から見ても只この富子と云う一個の女であるからは、道德とか社會とか家族とか云うものが在つて初めて必要の起つた道德などというものからは全然その範圍外にある身體になつて了る事が出来た。」

束縛も受けずに暮らしてゐる富子のそうした生活を、園子は羨ましく感じたことは一再でなかつた。園子を黒淵家へ家庭教師として紹介してくれた笹村も、時折はやつてきた。彼はクリスチャンで文學志望の青年である。園子は彼とよく會つた。二人は幾度か會ううちに戀愛に陥る。

黒淵家では毎年夏になると小田原の別荘に避暑するのが例になつてゐたが、この夏は園子も加わつて出かけることになつた。

別荘へ来て一週間ほど過ぎた頃、園子は俄に笹村に逢いたくなり、手紙を出す。彼は翌日直ぐやつて來たが、別荘へは來ないで宿へ泊つた。黒淵夫人は笹村の來たことを女中から聞き、園子に眞偽を訊ねる。彼女は知らないと言張るが、女中が汽車から降りる笹村を見たのだと言う。夫人は笹村と園子との間に何かあることを感じ、極度に嫉妬する。笹村と夫人とは、以前から已に深い關係が結ばれていたのである。笹村は、夫人にとつて若い燕だつたのだ。園子はそんなことは知らず、家人の寢靜まるのを待つては宿へ遙いに出掛けた。

偶然にも、園子の奉職する學校の水澤校長も避暑に來ていて、笹村を訪ねようとする園子と砂濱で出逢つた。水澤は、あなたが此方にお出での事も存じていましたから、いずれ明日にでもお訪ねしようかと思つていたと言ふのである。園子は不安でならなかつた。一刻も早く立去りたかつた。彼が待つてゐるであろうと思ふと、心が逸るのであつた。それで、ちよつと町まで急用があつて参りたいのだと言ふと、では南陽館にいますからと答えるのである。南陽館といへば笹村のいる宿ではないか。彼女は慄然とした。

黒淵夫人は笹村が南陽館という宿屋にゐることを知つて、夜更けにこつそり出掛けて行く。園

子も氣附かれぬように後を追つた。だが彼女は宿の入口で水澤に逢つてしまふ。水澤は折入つて話もあるからと言つて自分の部屋へ園子を案内する。彼の話というのは園子を妻に欲しいというのだ。彼は妻を亡くしてから、すつと獨身をとおしていたが、秘かに園子を戀していたのである。彼女は考えさせてくれと言つて辭したが、翌日になつて南陽館を訪ねると、笹村はもう東京へ立つたという。黒淵夫人もその日、體の具合が悪いからと言つて東京へ歸つて行つた。

彼女は深い失望に襲われた。四五日過ぎた頃、黒淵家の醜惡が大々的に新聞に書立てられた。富子の行跡のことであつた。長義は心配して直ぐに東京へ向つた。園子も歸るべく心を決めたが、その日の夕方、突然南陽館から使いの者が手紙を持つてきた。水澤校長からである。文面は言うまでもなく結婚のことであつた。彼女は斷りかねて出かける。水澤は待ちかねたように、彼女が行くと直ぐ切り出した。だが園子は自分は養女である關係から他家へは嫁げない旨を話した。水澤は彼女が嫁げないなら、自分は苗字を變えてもいいと言うのである。

「いえ、冗談に御聞きなすつては困ります。餘り輕率に申し過ぎたかも知れませんが、それは畢竟、私の最後の決心なので、私が斯う打明けて、あなたをお望みしたからは、是非とも御承諾して頂かなければならないのです。園子さん、先ずあなただけのお考えを聞かして下さいませ」

園子はきつぱり斷ることもならず、曖昧に濁して歸らうかと考えた。彼は辭退するのも構わず

送つてゆくという。二人は外へ出た。雲は空を暗く蔽つて、風の強く吹く夜であつた。

別荘へ歸つた園子は、今更のように水澤の自分に加えた行爲が口惜しく思われ、睡りもせず泣いた。丁度そんな折である。黒淵夫妻が亡くなつたという電報が来る。駭いている追もなく東京に向つた。黒淵夫妻の死は自殺であつた。夫人と笹村の醜い關係を目撃した長義が、自分の居間に夫人を誘つて拳銃を放つたのである。秀男を頼むという遺書が園子あてに遺されていた。そして財産の三分の一を園子に譲ると附加してあつた。

園子は、昨日までの自分をさつぱりと清算し、新しい生活に生きるべく決意した。學校へも辭職届を出し、養母にもそのことを告げようと思つた。それから「狐の如く隠れた神の信者」笹村をも訪ねて、その罪を悔悟させようと考え、昂然として馬車に乗る。

これは荷風の「地獄の花」の梗概である。ここで窺えるように、園子は昂然と胸を張つて、生活に對する自信と決意とを新たに呼吸するのである。

* 荷風の「地獄の花」は、人間の性格や運命が遺傳と環境によつて決定されるというフランス自然主義、特にエミール・ゾラの影響によつて生まれたと云われている。

しかし、彼女の斯うした決意には、誇りを失つた女の自嘲と哀惜とが語られている。彼女は富

子が言つたように、「この世間が云い嘘す汚い地獄の中に、安心して自分の信ずる道に進む事が出来るようになった」と自分に言い聞かす。彼女は以前の如く、單に世間の毀譽のみに捉われて清く生きるなどという事はすつかり革めて、何の束縛もない自由の生涯を送らうと考える。また、彼女は過つていたとも考える。「自分が今まで一點の過失なく、能く道徳の繩張中に這入つて居たのは、心から徳を好んでいたのではなく、全く世の譏そしりを心配したからの事であつた。然るに、今は、もう全く富子と同じような自由の體になつて、已に破られた其の肉體の操は最早や保つる要なく、貞操と徳行とを看板に世渡りする地位からは、其の身を逃れ得た。今は如何なる汚行も自身を欺く事はないのである」と。

要するに、彼女らの考えた唯一の自由というものは、女の誇りを失うという側面でのみ得られるものであつて、肉體の純潔を保とうとする限り、自分の信ずる道に進むことも出来ず、生活の喜びを享受することさえ出来かねたのである。彼女らの道徳とは、名譽であり體面であつた。そして女性の體面とは肉體の純潔を意味し、名譽とは高尚な人格を意味するものと信じていた。従つて肉體の純潔を失ふことは、女の凡てをも失ふものと錯覺した。誇りを失うということが、女の全生活を破壊するものだと思つていたのである。

たとえば水澤校長が許しを乞うために訪ねて來たとき、園子は悲痛な面持で次のように語つて

520。

「御心配あそばすな、私はもう世の中には出られない身體でございますから、たとえ如何にお怨み申しても、決して貴方の御名譽に関わる様な事を致す力は無いので御座います。私は全く約束いたしましたものとも、もう結婚する事は出来ない身になつたので御座いますから、無論この後は、如何様に被仰つて下さいましても、私は貴方の御心に従う事は出来ませんのですから、どうか私と云う……女の身の果無い事をお思ひ下さいまし」

彼女の決意とは、實は悲しい悟りだつたのである。これを富子と較べたらどうであらう。彼女は自分から離縁を迫つた思わしい結婚生活と夫とに對して、むしろ抗議さえしている。

「眞實ほんとうに私は口惜しくつて、何か氣味の可い復讐をして遣りたいと、仕舞にはもう私の方から全然夫だと云う優しい氣は無くなつてしまいましたね。私は或る晩わざと外へ行つて泊つて來てやつたんですよ。そして二日ばかりして歸つて來ると、夫は大變に立腹しましてね、不貞だとか不義だとか御大層な言草を並べますから私は此處だと思つて、もう胸の中に有り文けの事を言つてやつたんですよ。ねえ、そうじゃありませんか。自分は結婚前から子供まで拵えて置きながら、人が鳥渡ちやうとでも氣儘な眞似をして見せれば直ぐと自分の事は棚に上げて了つて、不貞操も聞いて呆れるじや有りませんか。全體貞操なんてものは、夫妻ともく綺麗であつてこそ保てる

ものだと思ふんです。」

夫の不義に對する富子の斯うした非難には、社會的に獨立することの出来ない女の無力さが語られていただけでなく、傳統的に負わされてきた女の生活の狭さをも反映されている。

彼女には、結婚生活は、男と女とが對等の資格で結ばれるもの、對等の戀愛感情で成立するもの、という風にしか受取れなかつた。従つて、兩者のどちらかに、相手を見下したり傷つけたりするような行爲や意圖があつた場合には、一方は權利をもつて當然それを責めるし、また非難もしなければならぬ、と云うのである。

彼女は正當にも斯うした理由に基づいて、法學士に離縁を迫つたのである。彼女は、破談の宣告を與えることによつて、「氣味のいい復讐」をしたとも思つた。また夫に精神的打撃を與えることによつて、男一般への憎悪と反感が表現できるのだとも思つた。彼女は、女の手から離縁状を叩きつけたと云うことに、何か勝ち誇つた優越さを感じたのである。

しかし、敗れたのは、結局、彼女だつた。

彼女は失われた肉體の純潔を惜しんだのみか、女である自分を失つたことを悲しんだ。彼女は斯うした悲しみを通して、はじめて解放され得た。つまり、習俗や道徳に考慮する必要がなくなつたからである。しかし、「卑しい汚れた身」にならねばならなかつたのは大きな犠牲であつた。

いわば彼女らは、おのれの肉體を傾けることによつて、習俗や制度に抗議したのである。それより他に抗議の方法は見當らなかつた。これらは、名譽と體面のみが人間の資格であるかの如く考えられていた一時期の思潮が、自覺しつつあつた女性たちを、いかに慘めに脱落させていつたかを物語る一例である。

2.

「地獄の花」の富子や園子たちが、女の自負と誇りが肉體の純潔にのみあるかの如く考えていたのに反し、「煤煙」の朋子は、その思考や倫理の點で遙かに自由であるばかりでなく、その時代の道徳律に對しても、極めて無頓着に、おのれを振舞わせている。これは三十年代における教養ある女性の、一つの典型として興味ある性格でもあるが、またそこにあられる隅江という女性も、岩野泡鳴の「毒藥を飲む女」の千代子と同様、悲劇的な境遇の女として忘れ難い存在である。

隅江は、要吉に言わせると「何の感動もなく生きる女」であつた。要吉が朋子と熱烈な戀愛に陥つてゆくのを知つても、自分を悲しもしないし、不運だと歎きもしない。彼の歸りの遅いと

き彼女は淋しそうに火鉢の前で待つているが、歸つて來た夫に何處へ行つたとも聞かねば、遅いとも早かつたとも口に出さない女である。(次の一節参照)

「洋燈をもつと明るくせんか」

べつだん慳食に言つた譯でもないが、始終氣兼ねておどく／＼している隅江は、叱られた様にでも思つたらしい。遽あわてて洋燈の心を思いきり上げたが、要吉の顔を一目見て、直ぐ膝の上に眼を落してしまつた。……

隅江は、そんな女である。要吉は時折この辛抱づよい女を色々に想い描くことがある。

「この女に良人の愛情を求める心が有るのだろうか。そんなものは、最う要らぬのじやなからうか。辛抱強いと云えば是ほど辛抱の好い女もない。けれども、何處までが辛抱で、何處からが無神経なのを分らな」かつた。

「……それが皆自分の所爲であると思ひながら、矢張り物足らなかつた。男と女とが差向いで坐つて、誰の前で話しても差支のないような話でなけりや出来なくなる、それで子供だけは生む。これが世間一通りの夫婦と云うものであらう。要吉は取返しの附かぬ物を落して來たような心持がした。」彼は、何よりこの平靜な無風帯に堪えられなかつた。彼には、うるわしい幻想を掻き立

てる女、絶えず精神に緊張を與える女性が必要であつた。伸びきつた弦のような危険が、絶えず相手と自分との間に張られていなければ満足できないような状態が、彼の欲求には多分にあつたのである。従つて、控目に、因襲のなかにおのれを消して生きる隅江のような女性が、とうてい彼を満足させることは出来なかつた。

要吉やその友人の神戸が中心で、若い女性に一週一回あて、外國文學の研究などもつ「金曜會」という集りがあつたが、そこに眞鍋朋子もいた。彼女は女子大學を出た、文學を好む先進の女性であつた。

いつか、彼は朋子の書いた「末日」という短篇小説を読み、その終りに「傳説によればサッフオーは、顔色はダークであつた。」と書添えて送る。これは、その前日、彼が金曜會で語つた「サッフオー断片」に關聯した暗示なのである。辻占のように待つていた要吉のところへ、朋子から、翌日すぐ返事がきた。そして、手紙の終りの次の文句が、彼の眼を強く射た。

「此夜この頃、お言葉のはし／＼まで繰返して、思い亂るゝことの繁く候」

金曜會以外の場所で、落合う日が、次第に繁くなつてゆく。二人は、一つの溝に、離れがたく落込んでしまつたのである。

しかし、二人の愛情の發露は、素材ではなかつた。要吉からみると、朋子が、手紙の言葉にも

似ず、どこか冷靜すぎるように見える。彼自身もまた、本當に彼女を愛しているかどうか、おのれの心に聞き糺しても、曖昧であつた。そして、その曖昧なまゝで、不安なまゝでいることに、一種の快感さえ覚えるのである。明らかに、この戀愛が、近代的な自意識の遊戲に落ち込もうとしてゐた。

青い麥が五寸に伸びた春日和煦の一日、二人は初めてお互の心理を尋ねあうのである。

「……私は今こんな事を貴方に打明けたとて、決して貴方から何物をも求めるのじやない。況して貴方の前途を如何しようという考えなどは少しもない。何の希望もない。何の目的もない。それは全く絶望的な執着です。私は唯、貴方に會つて、此事を白狀して、若し貴方の心の隅に私というものを記憶してさへ貰えたら、それで十分です。私はそれで満足します。」と、要吉は低い聲で囁くのであつた。しかし、朋子は、よそめにはまるで化石したような様子で、何らの感動をも示さない。要吉は、この無感動に堪えられず、おのれの言葉の誇張をさへ意識して、いよ／＼度を失つて急ぎ込んでゆく。彼は、いかに彼が道徳上の破産者であるかを説き、今の氣持はまるで難破船だ、……「唯、貴方に依つて力が與えられたい、新しく生きる道が求めたい。」と、哀願する。すると、朋子は、何度も問いつめられたすえ、「先生が私に仰有つて下さつたような、左様

いう心持を抱いたものなら、私の方が先なんで御座います。」と、冷靜な彼女の秘めた心を、ようやく綻ばして見せる。このように、燃える情熱を冷靜な姿で装う朋子の氣質は、その後の要吉を、常に疑心暗鬼に陥らせる機縁となる。或いは、二人の感情對立の原因となる。

初めての、二人だけに秘められた折角の機會において、要吉と朋子との最初の、そして、それが最後まで、この戀愛を畸形化する端緒が作られる。いわば、この初めての二人だけの接觸において、一さいを投げ與えたい欲求を告げる朋子を、要吉は、「普通の男のするように、直ちに彼女を自分のものとするような手段を講じないで、却つて相手から遠ざかるような態度」をとつたのである。

讒言のように、暖れた聲で、彼のより強い抱擁を求める彼女に、要吉は、たゞ怖れたじろぐだけであつた。彼女は、言うに餘る嬉しさに泣くのではなく、彼女の情熱の意思が、理解されなかつたことに絶望して、ひたすら泣く。そうして、この時から、二人の間に心理的な溝が作られるのである。

愛情の身ぶるいを冷く見守られた朋子は、聲を震わせて、「一切を棄て、北極までも隨いて行く様な心持に成つてゐる。」と言う、要吉の言葉に返事も與えず、失望の色で別れ去つてゆく。この

ような、最初の機會における愛情の互の喰い違ひは、いよいよ二人の戀愛の本質を明らかにして憎悪の炎を燃やし続けるのである。

「……眞實の我姿を解せられずして愛せられる程苦しいものはない。眞を申せば、私の世界には戀も愛も同情も皆無意味の文字に過ぎない。殘れるものは只理解と云うことだけ。……先生から愛されようが憎まれようが、それは第二の問題で、理解が同情を生むかも未知數なのです。理解の結果が如何成ろうと、只理解それだけが唯一の幸福なのですから、……長たらしき告白を是非忍んで讀んで頂きます。……」

右のような書き出しで、朋子は、要吉に對する彼女の内心を、實に丹念に繰廣げるのであつた。

要吉との最初の機會における不満、失望は、要吉の態度からのみでなく、彼女自身の心理的な動搖からも生れていることを告げている。彼女によれば、疾うに早くから、要吉を心のなかに慕い續けていたが、表面ではそれを打消し、むしろ口外したり、要吉に知られたりすることが怖ろしかつたと云うのである。なぜ、本當のことが言えなかつたかと云えば、「唯ひとり我胸の奥に自由に先生を思わせて頂きたかつた……」からだと言っている。その理由は、自分は第一、二重心理に悩んでいる身で、要吉への愛情も正しい戀愛などとは云えぬ、いわば、彼女には、戀愛に相應しい精神の没我に達し切れなかつたからだという。「私は逆も熱い酒を盛る器じゃない。」と信じたからである。

では、彼女はどのような風に戀愛を考えたか。戀とは——純一無雜なものでしよう。と、彼女は述べる。——自分を形造る幾億萬の細胞の一つくが、等しきヴァイブレーション(震動)に燃えた時に——名附けるべきではないかと。そして、——私はそういうので無ければ満足しません。——と意味を強めている。そういう戀愛の信念に、彼女は達し得ぬことを承知しながらも、しかし、達したいと云う欲求はあつた。「永遠などという愚かなことは望まない迄も、只一轉瞬でも左様いう純な境界に入りたい。成ろうと努力しました。遂に駄目でした。」

かような二重心理の分裂を、みずから意識しながらも、彼女は、戀愛の理想に自らを溺れさせることを烈しく望んだ。「足りない、足りない。それじゃ足りない。」と、情熱の襲いに乗じて、要吉の冷酷を怨んだ彼女の心理過程は、そのようなものであつた。たとい、一瞬でも没我の境界を掴みたい努力は、要吉によつてしりぞけられた。心理の分裂に身の置きどころを失つた心が、純一無雜な戀を求めて、おのれを忘れようとした刹那は、ついに空虚に歸した。

朋子の戀愛の心理は、これまで述べてきたような小説における、男の作つた掟に生き、それに對立すると云うような女の苦惱ではない。世の常の倫理に對しては、要吉も、疾うにそれを越えている。彼女の苦惱は、すでに世の掟に反くことに何らの痛苦も感じてはいない、むしろ、おの

れ自らの意志の分裂に悩むのである。分裂に不満を感じながら後我の境地に統一の状態の來るのを待ち望みながら、ついに、それが果せなかつた。要吉に全身を委ねたいという表現も、實は、彼女の本当の希いであるよりも、そういう衝動の燃焼によつて、分裂の悩みを消し去りたかつたに過ぎない。だから、要吉の前に示した一さいの行爲や言葉は、總べて虚偽であると告白したすえ、――私は中庸ということは出來ない――と結ぶのである。「火か、さらすば氷」而して火は駄目だと確めたのです。氷です、雪です、雪國へ突進します。先生は未だ火に付き給うが、斯くて焚死する力がお有りですか。若し左様ならばそれ迄です。」と、消極的な要吉の態度を嘲笑うのであつた。「火か、さらすば氷」という言葉は、彼女の徹底的な生活の信念を象徴したものであり、要吉の煮切らぬ藝術的？な戀愛の態度に向けた烈しい抗議である。彼女は、二重の心理に迷つた。愛情を感じながら打明けずに、秘かにそれを娛たのしみたいという姑息なエゴイズムの半面に、そのような心を蹴りつけて、一瞬の火花を散らす戀愛のなかに自我を統一し、燃焼したいという焦躁もあつた。そして、その統一への希いは、彼女の迷いもあつたが、要吉のために否定された。どうせ燃えることが出來なければ、氷獄のうちに凍死するような情態が望ましいと、彼女も考へた。このような考へは、もちろんインテリ心理の觀念的な戯れを暴露したものであるが、同時に、要吉という男の中庸を守つた曖昧な態度への否定でもあつた。彼女の密やかな愛情に火

を點じたのは要吉であつてみれば、要吉は、その戀愛の展開に大きな責任があると、朋子は考へたのであろう。

右のような挑戰的な手紙を受取つた要吉は、その手紙のなかに、決して彼女が退却したのでなく、より一そう男に肉薄して來るのを感じた。彼は寧ろ、この戀愛で女に出抜かれ、打破られた自分を屈辱的に考へ始めた。――固より要吉も終局のない戀を夢想しては居なかつた。何時か、如何なる方法に於てか、終局を來すべきものとは思つていた。若し手際よく失戀することが出來たら、それでも構わない。唯こんな素早く女から先んじられようとは思わなかつた。――かように朋子が、最初の機會にふと漏られた刹那の情熱を、要吉によつて阻まれたという、僅かな行違ひは、朋子の要吉に対する反感となり、要吉の彼女に向ける憎惡の機縁となつた。このように、愛情の告白と同時に、お互に對立し、反抗する心が芽生え、愛と憎惡の苛立いびたしい混亂と衝突のなかで、互に常軌を脱してゆく。要吉は、既にそのことを感じ、或るとき朋子に次のように訴えている。

「私達の何は……左様だ、ま、戀だと言わせて下さい。私達の戀は宛然まらイブセンの戯曲のようです。ね。始まつたかと思えば既う終局キヤクエタローブに來ていた。」

このように、彼らの戀愛が出發と同時に破局を感じねばならなかつたのは、分裂に悩み、純粹

性に缺ける近代的戀愛の宿命である。そのうえ、朋子と要吉との、愛情の求めかたの相異からも、このような成行は避けられなかつた。と云うのは、家庭生活の無風帯に飽満した果て、新たな刺戟を求めたとはいへ、家庭生活を破壊してまで新しい戀愛に全身を埋めようと云うのではなく、極めてロマンチックな好奇心から、精神的な愛情の流れに浸ろうと云うのに過ぎない。それは「其面影」(二葉亭四迷)の小野哲也が、家庭の不和から脱れて、義妹の小夜子に寄せたような全身的な餘裕のない求愛ではなかつた。現實の不合理や矛盾は、一應こうしたものだとして傍觀してゆける餘裕があり、その上に、何か新しい刺戟と美を求めようとしたのが、要吉の愛情の由来である。現實の不満は、そのまゝ見過してゆけるこの餘裕とは、つまり新しい現實や、モラルを作るといふ氣魄がないと云ふことだ。矛盾した現實は、よりよく利用したうへ、趣味として何か新しいものを捉えようという態度が、要吉の特徴である。

* 二葉亭四迷の「其面影」は、公債を持つより、學生を育てた方が有利だという考えから、學費を補助して貰つた家の娘と結婚した小野哲也が主人公である。哲也は、自分を投資物と眺めるような妻や、妻の母を嫉妬して、義妹の小夜子と強い愛情で結ばれるのであるが、小夜子は、姉への義理から「肉より靈」を、求めて宗教に溺れ、哲也との愛情をおもひ諦める、という筋である。

明治時代の家族關係の不調和と、そこから離脱しようとして離脱できず、哲也は大陸に放浪し、小

夜子は宗教に逃げるという自由戀愛の慘澹たる敗北の姿である。敗北ではあるが、小夜子と哲也の戀愛には、眞摯な、全身的な愛情が交される意味で、「煤煙」と違つた悲愴さを湛える作品である。

要吉の趣味的な愛情に較べて、朋子の愛情は、遙かにひたむきである。彼女も、現實的に愛情の結果など考へてはいない。しかし、少なくとも、おのれの全身を震動させ得る愛情に理想を求め、精神の二重性を克服しようという、誠實な努力を見せている。このような男の遊戯的、藝術的な餘裕は、當然、おのれの全靈を麻痺する悦びを得ようとした朋子の必死な愛情を満足させる筈はない。そして、要吉と朋子との愛情の闘いは、毎に壓倒的に男を引摺り屈服させようとしていく。「始終機會さえあれば自分で幻影をつくつて、自分を欺いている。幻影の中に生れて、幻影の中に死んだら思い残すことは有るまい。」と言ひ、だから、目覺めることは虚無である。あなたも人を欺くと共に、自分をも欺いて幻影のなかに生きようとする要吉の我儘な、和解的な生活の信條に對して、朋子は返事を與えない。問詰められて、「短刀の如く」彼女は吐き出す。「無かも知れませぬ。無に堪えようと思ひます。」女は男に比べて、遙かに生に對して徹底的である。

かように、二人の戀愛は復讐と憎惡の闘いの悲劇を構成する。しかし、前述したように、自分の意思に徹底しようとする朋子は、決して男の説得に妥協してはゆかない。彼女は、その意味で、徹底的に自分を自分ひとりで處理しようとする近代人である。これまでの他力本願的な因襲の絆からは全く解放されているのである。

そのことは要吉も察して、「この女は自分の手に自分の生命を握っている。何時でも自分は自分の主人で有ると云う自覺を持つていらしい。」と考へ、彼自身は尙も、「運命に依頼し、相手に依頼している自分は何たる卑怯者だ。」と、反省している。つまり、これまでの愛情において、女性が恒に、男の愛情のエゴイズムに屈服していたのであるが、朋子は、決して自分を屈從せしめなかつた。このような、二人の矛盾した精神の争ひは、互いの愛情がたぢきれぬ執着のうちに在りながらも、お互いの破滅を希う心を打消すことは出来なかつた。

朋子は、かように自負心つよく、自分が、自分の生命の主人公でありながら、事實は、自分の心の二重性から自由ではなかつた。二重に分裂する心を鎮める主人公は、自分のなかに見出せぬのである。このような矛盾と、ジレンマから、彼女は自らを死によつて解決することのみが、幸運であるように考へる。彼女は、要吉に宛てた手紙のなかで、矛盾に矛盾を重ねて終に無に歸す

他はなく、今は、凡てを超越した心境にあると言ひ、「私の最後の興味は涅槃寂靜の日に繋かれ留り候。この日を味わい樂しまむがために候。……私に取りて死が唯一の嚴肅なることに残り居候——」……我寂滅の日は、やがて君が寂滅の日と覺悟したまうや。……」と、書添えている。今は「我なく、人なく、」無なり、空虚なりと言ひながら、死出の旅路に男を誘うことを忘れてはいない。彼女の自的復讐欲の最後の羽ばたきである。

因襲を棄てたばかりではなく、自己の方向に男の意思を屈服させようとする彼女は、その征服心において、かつて類例を見ないものである。その愛情は、飽くまで自的であり、獨占することとに憧れ、征服の情熱に餓えている。要吉は、何時もそれに吃驚しながらも、彼女の病的な愛情に、やはり魅力を持続けてゆく。「私の戀は復讐だ、痛切な復讐。」だと、叫ぶ朋子は、包から小刀を出し、充たされぬ愛情に昂奮して、「私の肉を裂いて——血を吸つて下さいまし。……」と、さへ哀願する。「趣味としても可厭な趣味だ。一種の偏狂かも知れない。」と、要吉に言わせるように、朋子の斯うした昂奮の態度には、近代における自的な戀愛の、異常な破綻が、隠しおおせない。男の社會から、自由であることによつても充たされない愛情、おのれが自分の主人公でありながら、みずからが行動の支配者になれぬという二重心理の分裂は、かように朋子たち、近代の女性を、多くの悲劇に誘い込んだ。

ついに二人は、互いに違ふ目的のもとに、朋子は、男に對する憎悪から、「自分を滅ぼした男を滅ぼさずには置かない」という復讐の心理から死を庶い、男は、女に敗れたという自己卑下や、自分の藝術的戀愛が失敗に終つたという女への憎悪から、揃つて死の旅に出る。

しかし、この死は不成功に終る。死を控えた瞬間の激しい對立において、朋子の自己尊重は、頂點に亢まる。

次の文句は、旅の宿で、要吉に對する憎悪をこめて、朋子が書いたものである。

我生涯の體系は貫徹す。われは我が *Canis* に因つて斃れしなり。他人の犯す所に非ず。

三月二十一日夜

眞 鍋 朋

94

今一枚には、

拜啓、我が最後の筆蹟に候。今日學校に行きませんと申せしは、實は死すとの事に候。願わくば君と共にさるを許せ。君は知り給うべし、われは決して戀の爲めに人の爲めに死するものに非ず。自己を貫かんが爲なり、自己の體系を全うせむが爲なり。孤獨の旅路なり。天下われを知るものは君一人なり。我が二十年の生涯は勝利なり。君安んぜよ。而して萬事を許せ。さらば——

明治四十一年三月廿一日

この手紙は宛名を、友人にしたが、讀ませる相手は男であつた。自分の死後、この遺書を若し讀んだとしたら、男はひどく失望するだろう、恐らく悶死するだろう。朋子はそういう残酷な想像を娛しみながら、「片頬に刃のような冷笑」を泛べた、と描かれている。

しかし、男はより妥協的である。女が、男の腕に身を委ねたまゝ、そつと懐から短刀を出して、男の手に握らせると、男は、それを握つた儘たじろぐ。まるで、水に溺れる女のような聲で「ねえ貴方は」と、男は哀願した。「貴方は私の爲に死に、私は貴方の爲に死ぬ。左様言つて下さい。私を愛すると、唯一言。」しかし、女は、それに對して、いつまでも言えぬと、敵意を示して泣くばかりであつた。凡そ、朋子の自己尊重と、自己中心意識の飽くなき強情とは、このように執拗な粘り強さを有つていた。

互いに自己の意思を守り主張はしたが、女は終に、男の意思に随わず、自主性を全うしたという點で、朋子は確かにこれまでの小説にあらわれぬ積極的な意思を有ち、男の我儘な、趣味的な愛情に碎かれぬ強さを有つている。つねに、ある種の緊張と、充足感とに飢えているところにも、彼女の生に對する潑刺さがある。だが彼女は、みずから二重に分裂する精神を支えるために、戀愛が必要であつた。戀愛によつて、絶えず精神を燃焼させていなければ、彼女の生命は充足されなかつた。だからこそ、彼女は、不満を託しながらも、おのが青春の總べてを男に傾けずにはい

95

られなかつた。そこに彼女の弱點もあつた。つまり自主的に、戀愛を求め、擇ぶと云うのではなく、自己の生命の支えとして、餘儀なく戀愛に飛込み、しかも、その戀愛が、つねに、與える愛でなく、奪う愛により、愛の獨占によつて甦らうとするところに、彼女のエゴイズムのジレンマは明瞭である。

このようなジレンマに取附かれ、近代の病的な心理の犠牲となつて倒れた朋子は、近代エゴイズムの末路と、その性格を餘すところなく展開したと云えるだろう。彼女の愛情は、男の世界の掟に隨うことから解放された慢心の果に、自己優越の増長に耽り過ぎたのである。そして彼女の破滅は、勿論、そのように愛情の餘りのエゴイズムに根ざしていた。包容力を失つた偏頗な、愛情が自己的でないかたる犠牲の途を辿らねばならなかつたか、そこに明治文化が、ある頂點に開花した頃の、教養ある女性の間にしばしば見られた悲しむべき傾向が暗示されている。

この小説「煤煙」は、作者が、ダンヌチオの「死の勝利」を自身の生活のうえに實踐しようとして描いたものだと思はれている。「死の勝利」は、近代の病的な戀愛の一つの典型だと云われている。この中のジョルヂオは、愛に對し女性に對して魅惑されながら、そこへ熱情をもつて没

頭できぬために、絶えず相手のイポリッタを苦しめている。彼は、悦びの眞只中において、冷笑を感じ、相手をひたむきに愛しながら、他の女性の面影の忍び寄るのを消すことが出来ない。そのように、自分が二重の心理に分裂している故に、相手の愛情の絶對性を信ずることが出来ない、おのれを苛み、相手を蔑忍に取扱う羽目となる。このような男の不信は、愛情の裏に憎惡を、喜悅の陰に悲哀を絶やすことなく、そのようなジレンマから愛情の表現は、いよいよ暗形化されてゆき、激しい焦燥を雜えざるを得ない。

一方、女のイポリッタは、また、彼の焦燥的な愛情に隨いてゆけぬのを悲しみ、いつも愛人を肉感的に自分に結びつけて置きたいと云う欲望と、彼を獨占したいと云う要求に急立てられていく。そのような矛盾した分裂と、何物をも信ずることの出来ないことと云う虚無におちたジョルヂオは、ついに女を絶壁に誘ひ出し、相伴なつて共同の死のなかに轉落しようとするのである。心理の破綻を死によつて解決しようとする結末ばかりでなく、愛情における憎惡反感の近代的な分裂においても、この小説は、「煤煙」に似ている。また、ジョルヂオの通俗な戀愛を嫌う貴族性と、要吉の藝術的戀愛の心理にも共通性はある。しかしジョルヂオと要吉、イポリッタと朋子の性格は、かならずしも一致したものではなく、むしろ對立するところが少なくないが、最もその差の明瞭なところは、朋子の特徴が、ジョルヂオの心理的二重性と、イポリッタの占有欲とを兼ね具

えていることだ。いわば、朋子は、「死の勝利」の二人の主人公の特質を、一つのものとして與えられている。そして、ジョルヂオにおける不信の表情だけが要吉に残っているけれども、「死の勝利」における激しい虚無感と焦躁は、「煤煙」には感じられない。

幾多の相異は免れないとしても、「煤煙」は「死の勝利」と似て、やはり近代的戀愛の病的な展開として共通するところの多いものである。このような焦躁的なエゴイズムの悲劇は、おのれが、おのれの主人公となる實際的な力を失つたところに蔓延^{はびこ}る。概ね無力なインテリの中に、このような悲鳴が囁かれた。朋子の、自己以外に何らの興味もないと云う占有欲の強さも、實生活において、自分が自分の主人公になれぬ無力感の反動である。實生活において、無力なればこそ、その心理的な希求は、病的な蒼白さで燐光のように光つたのである。このように、現實における敗北にめげず、心理的にのみ理想をもとめ、悦びを感じようとする女性は、藤村の「新生」における節子など同類である。或いは、近代的な愛情の一つの動搖した姿として、分裂する心をもつ女性としての朋子は、昭和に現れた「寢園」の奈奈江を、胎内に孕んでいたとさえ云えるかも知れない。互いに、悩みの表情や犠牲の過程は違つても、同じく、共に近代の病的な心理に影響されている。心は二重に割かれ、生の目標が、闇に閉ざれつゝも、彼女らは、先ず何よりも自己に忠實であることによつて、眞實の光を待ち憧れたのである。

* 島崎藤村の「新生」は、大正の半頃に描かれた。中年の作家岸本は、過失から姪節子と離れがたい愛情に捉われるが、岸本の謙虚な懺悔と、人間的理解とによつて二人の愛情を淨化しようと努める。二人は、ついに習俗の掟に隨つて現實的には離れるが、心理的には、永遠の伴侶として幻想の世界に生き得ると信じるようになるという沈痛な人間記録である。

4。

「虞美人草」に描かれる藤尾も、當時の教養ある女性の一人として、興味ある性格で行動する女である。

藤尾には小野さんがある。小野さんは詩人で博士論文を書いている。彼には恩師の令嬢小夜子と約束がある。學業を卒えた曉に晴れて夫婦になろうという約束がある。だが小野さんは彼女を好まない。彼には藤尾という教養ある女性がいる。

藤尾は文學を解する女である。趣味と云い、嗜好と云い、小野さんにびつたり合致した女性である。藤尾には宗近という亡父の許した男がある。宗近は、「顔も體軀も四角に出来上つた」無雑作な男である。外交官の試験に落第しても平氣である。宗近は藤尾の兄（甲野）の親友

である。だが、宗近は藤尾に嫌われている。藤尾には「趣味を解し、愛を解し、温厚な君子」の小野さんが躍ついていて、小野さんは藤尾に英語と文學とを教えに通つて来る。

小野さんの博士論文はなかなか進まない。博士論文を書く暇が見つからない。藤尾と違うのが忙しい。藤尾の母も小野さんを気に入っている。武骨者の宗近はじめは嫌われている。宗近の人格を知っているのは甲野さんと糸公（宗近の妹）だけである。

甲野さんは哲學者である。生存と變化の意義を探求する哲學者である。彼には妹と母とが好めない。狡猾と猜疑で固まつている母が好めない。母は後妻である。藤尾は後妻の娘である。父は何年か前に逝つてゐる。母娘も甲野さんとは折合えない。彼が賢く善人である故に折合えない。小野さんは相變らさやつて来る。藤尾は小野さんといふ時が幸福である。小野さんも満足である。

ある時、恩師の井上孤堂先生が娘を連れて上京する。小野さんと交した默契を實現させるために東京に住もうと云うのである。小野さんは世話を受けた恩師のために家を探し、不足の家財道具も手傳つて買つてくる。孤堂先生は上京の理由を話す。だが小野さんには博士論文がある。

「お前の方にも色々都合はあるだろう。然し都合は、いくら経つたつて片附くものじゃない」
「そうでもないです。もう少しです」

「だつて卒業して二年になるじゃないか」

「ええ。然しもう少しの間は……」

「少しつて何時迄の事かい。そこが判然していれば待つてもいいさ。小夜も私からよく話して置く。然しただ少しでは困る。いくら親でも子に對して幾分か責任があるから——少しつてのは博士論文でも書き上げて仕舞う迄かい」

「ええ、先ずそうです」

「大分久しく書いてゐる様だが、まあ何時ごろ済む積りかね。大體」

「なるべく早く書いて仕舞おうと思つて骨を折つてゐるんですが、何ぶん問題が大きいものです、から」

「然し大體の見當はつくだろう」

「もう少しです」

「來月位かい」

「そう早くは……」

「來々月はどうだね」

「どうも……」

「じゃ結婚をしてからにしたら好かろう。結婚をしたから論文が書けなくなつたという理由も出て来そうもない」

「ですが責任が重くなるから」

——「虞美人草」から——

小野さんには藤尾がある。詩を解し、人生を美しく解す藤尾がある。小夜子には氣の毒であるけれど、藤尾には代えがたい。小野さんは猶豫を乞うて暇を告げる。

甲野さんも藤尾と小野の關係は知つている。しかし、出来得れば宗近に藤尾を遣りたいと考える。だが、自分を好まない妹に、それを勧めたくはなかつたし、また聞き容れる藤尾でないことも知つている。藤尾が喜んで承諾するのは家と財産をやろうという時だけである。

甲野さんは、この一物ある親娘と一緒にいることが苦痛である。出来ることなら別れたい。辛抱はして見たが耐えられない。ある日、母を呼んで家を出ることを告げる。藤尾にも家と財産をやることを言い渡す。だが宗近のことだけは聞いて置きたい。

「お前、宗近へ行く氣はないか」

「ええ」

「ない？ どうしても厭か」

「厭です」

「そうか。——そんなに小野が好いのか」

「それを聞いて何になさる」

「何にもしない。私の爲には何にもならない事だ。只お前の爲に云つて遣るのだ」

「私の爲に？——そう」

「兄さんの考えでは、小野さんよりも^{お前の}の方がよかろうと云う話なんだがね」母が言う。

「兄さんは兄さん。私は私です」
暫くして

「兄さん——あなた小野さんの性格知つていらつしやるの」

「知つている」

「知つてるもんですか。——小野さんは詩人です。高尚な詩人です」

「そうか」

「趣味を解した人です。愛を解した人です。濃厚な君子です。——哲學者には分らない人格です。あなたには一さんは分るでしょう。然し小野さんの價值は分りません。決して分りません。一さんを賞める人に小野さんの價值が分る譯がありません」

「じゃ小野にするさ」

「無論します」

——「虞美人草」より——

宗近は、外交官の試験に及第する。彼は藤尾を嫁に貰おうと父に相談する。糸子にも相談する。だが一様に止めた方がいいと言うのである。彼は甲野さんにも聞いて見る。「藤尾には小野がいる」宗近は未練げもなく諦める。

小夜子との破談を小野さんから引受けた浅井が、孤堂先生のところからの歸りを宗近の家へ廻る。就職口を探して貰いたいと言うのである。その機会に小野と小夜子との話ができ、浅井は彼に事情を聞かせる。宗近は小野さんのところへ人倫の道を説くために談じ込む。

小野さんは藤尾と大森に行く約束がしてある。三時には新橋の停車場へ藤尾がやつて来る筈。しかし小野さんは決意した。自分の行爲は、不本意だったと宗近に言明する。小夜子との結婚も承諾する。宗近は、小夜子呼び寄せ、三人して甲野さんの家へ乗りつける。糸子は既に、甲野さんを迎えに来ていた。藤尾が待ちほけを憤りながら戻つて来る。宗近は、更めて藤尾に小野さんの妻を紹介する。

「藤尾さん、これが小野さんの妻君だ。……まだ妻君じゃない。ないが、早晚妻君になる人だ。」

五年前からの約束だそうだ」

「嘘です。嘘です。——小野さんは私の夫です。私の未來の夫です。あなたは何を言うんです。失禮な」

「僕は只、好意上事實を報告する迄さ。序に小夜子さんを紹介しようと思つて」

「わたしを侮辱する氣ですね」

「好意だよ。好意だよ。誤解しちゃ困る」

「宗近君の言う所は一々本當です。是は私の未來の妻に違いありません。——藤尾さん、今日迄の私は全く輕薄な人間です。あなたにも済みません。小夜子にも済みません。宗近君にも済みません。今日から改めます。眞面目な人間になります。どうか許して下さい。新橋へ行けば、あなたの爲にも私の爲にも悪いです。だから行かなかつたのです。許して下さい」

激昂と失望から藤尾は自殺する。

こうして藤尾は、當時の教養ある女性たちが落込んだと同様の墓穴に、若く美しいその肉體を投げ込まねばならなかつたのである。言うまでもなく彼女は、自尊心の人並ならず強い女であつた。自尊心が強かつただけに、小野を失つた打撃に失望するより、小野に裏切られたという屈辱

の念に堪えられなかつたのである。彼女にとっては、戀愛に敗れることよりも自尊心を傷つけられることの方が、より忌わしかつたのだ。「頭で合圖をすれば、すぐ來るのみならず來る時は必ず詩歌の壁を、懐に抱いて來る。夢にだも、われを弄ぶの意思なくして、満腔の誠を捧げて、わが玩具となるを榮譽」とする小野に裏切られるとは、不面目というより屈辱の極みである。

自分は、彼を愛する資格が自分にあつたから彼を愛したのではなく、愛せられるべき資格が自分にあつたから愛せられたのだ。「わが眼、わが眉、わが唇、さてはわが才を認めて、ひたすらに渴仰」したればこそ愛を與えたに過ぎないのである。それにも拘らず彼は、牛を馬に乗換えたのである。これが辱めでなくて何であらう。彼女は憤らずにはいられなかつたのである。何故ならば、「文明の淑女は、人を馬鹿にするのを第一義とし、人に馬鹿にされるのを死に優る不面目と思う」からであつた。

詩を解し、愛を解し、人生を解すと考えたこれらの女性たちは、その淺はかな理智と聰明の誇り故に、おのれ自身をさえ欺いて行動しなければならなかつたのである。彼女らの虚榮心というものは、西歐から移された文化を裝飾的に、一から十まで身に着けて生きねば満足できなかつたのである。従つて「女大學」などに説かれている教訓を守つて、家庭に慎ましく生きることなどは、愚劣な方式だと考えた。滅ぼされるべき遺物だと考えた。何事をも新しい様式に置換えねば

満足できなかつたからである。

「虞美人草」に描かれる藤尾は、こうした意味における犠牲の典型である。彼女が他人に誇らうとしたものは、女のもつ特有の美點や長所ではなくて、實は、新しい知識や教養や趣味だけなのであつた。だから、糸子や、その他の女性を輕蔑したのである。

藤尾のような女性を見て、恐らく讀者は淺薄な教養に自惚れた女のいやらしい印象を與えられるに違いない。しかし、當時に浸潤しつつあつた西歐的な物質文化に影響された女性たちの間には、こうした傾向の女が、數かぎりなく居たのである。そして彼女らは一樣に、趣味や身振のなかに新時代の裝飾を採入れることで得意だつたのだ。舊い様式を極度に蔑視し、新しい好尚に見分もなく憧れたのである。こうした一般の傾向は、勢い女性たちのモラルにも反映し、實質的な物の考え方や、感情の動きに秩序を失わせるに至つたのである。

戀愛に敗れたことよりも、自尊心を傷つけられたことを「死にも優る」屈辱だと考える藤尾は「新しい女性」であることを自負する女性群の代表的な存在とも云えるだろう。これは「蜃中樓」の敏子や、「煤煙」の朋子とは違つた意味の「新しい型」の女性であることは疑えぬ。しかも、その生活意識や、モラルなどには、多分に共通するものがあるように惟われる。これは、自分と云うものを、一個の人格として考えるようになった、自我意識のあらわれとして注目に値する現象

である。つまり、自分の運命を自分自身で護ろうとする自覚が、女性たちの生活感情や思考のなかに、ようやく芽生えかけて来たのである。

5。

このような機運というものは、社会的には日清戦争後の日本近代化の急速な発展に伴う物質生活の反映とも考えられるが、一般文化的には、文學者の間に澎湃として起りつつあつた啓蒙的な文學運動などが、かなり影響力を有つていたようにも考えられる。それは彼等が、ともかく素直で、新しく、清々しい心の眼で、宇宙と人生とを觀ることを初めてその時代の若い人々に教へましたからである。

「春」の作者藤村は、この方面における先驅者透谷の戀愛に對する態度を、青木の名で次のように書いてゐる。

「戀愛は剛腹な青木を泣かせた程の微妙の音楽であつた。此世に屬いたものと云えば、名でも、富でも、榮華でも、一切の希冀を置かないと云つたような、一徹無垢な量見から、實世界の現象悉く虚偽であるまで觀じた程の少壯な青木ではあつたが、唯一つ彼の眼中に虚偽でないと見え

る物は戀愛であつた。彼のように戀愛の思想を重んじ、またそれを懼らず發表したのも少なからう。彼に言わせると、戀愛は人生の秘鑰である。戀愛あつて後に人生がある。戀愛を抽き去つた時には、人生何の色も味もない——」

——島崎藤村「春」より——

新時代の曙に浪漫的な情熱を煽られたと同時に、一面、舊世代との別離に懷疑懊惱を避けられなかつた透谷たちは、人生や社會に對して、また生活や戀愛に對して、このようにみつ／＼しい自己の世界を切り拓いていつたのである。文學者の間に起つたこれらの運動が、當時の思潮に著しく影響したのは偶然ではない。男女の交際にも益軒の「女大學」式の不自由な拘束は否定さるべきものとして、一部の女性たちは活潑に自己自身の主人公として行動している。「蜃中樓」の倣子にしても、「虞美人草」の藤尾にしても、「煤煙」の朋子にしても、「地獄の花」の富子や園子にしても、娘としては親のため、嫁いでは良人のため、老いては子の爲に、おのれの悲喜を殺し、諦めの人生に殉ずると云つた「十三夜」のお關のような、亡びの人生に終始してはいない。

もちろん、これらの女性の傾向が、當時における男女關係の大勢であり得たのではないが、一部の先進的な女性群の間における性道德や、戀愛や、結婚觀に或る種の自主的な限定を與えたことは事實であらう。そしてまた、その意味では確かに進歩的だつたのである。

貝原益軒の「女大學」は、徳川時代の女性道徳の標準であつた。「女は陰性也、女は夜にて暗し、故に女は男に比ぶるに愚にて……」という女性の侮蔑に始まり、女は夫にひたすら仕うるもの、「婦人は別に主君なし、天を主人と思ひ敬い……」「女は夫を以て天とす、返すも夫に逆いて天の罰を受くべからず」という風に、夫は天と等しい絶對の關係に置かれている。

明治開化思想の先驅、偉大な啓蒙家であつた福澤諭吉の「女大學評論」や、「新女大學」などに説かれてゐる兩性の道徳律は、多くの人も指摘するように、當時における進歩的な意見として著名である。

「夫れ女子は男子に等しく生れて」という冒頭で書かれた前後二十三ヶ條の「新女大學」には、婦人の獨自行動に立つての徳育や知育や體育の均齊が、「自ら屈す可からず、又他をして屈伏せしむべからず」という自然の合法が、人間生活の理念として説かれてゐるだけでなく、結婚生活における正しい夫婦關係の確立や再婚の自由や、婦人の經濟的自立性にまで及んでゐる。例えば、娘の結婚に方つて、生計不如意でなかつたら、「娘を手放して人の妻にするも萬一の場合に他人を煩わさずして自立する丈けの基本財産を與えて生涯の安心を得しむるは是亦父母の本意なる可し。」という用意周到さで、福澤は故に因襲から脱する道を説いた。

詠歌には巧みなれども、自身獨立の一義について夢想だにすることなく、數十百部の小説を讀

みながら一冊の生理書も讀んでいない女性の多いのを慨歎して、「學問の教育に至りては女子も男子も相違あることなし」であるにも拘らず、日本のように女の學問を等閑にしてきた國では、その段階に到るまでに相當の年月が要るだろうと見ている。「文明普通」の程度として、「殊に吾輩が日本女子に限りて是非ともその知識を開發せんと欲する所は、社會上の經濟思想と法律思想と此二者にあり」と言つて、社會生活で女が無力なのは、この經濟や法律に對する認識の缺如が最も大きな原因だと説いてゐる。

もちろん、これを今日の人々の眼から見れば、「女性に本來優美なるべきものなれば、議論をするにも物柔らかに、激昂してはならぬ」とか、「家を治め子を育てるは女性の天職なれば、女子は學問技術に於て男子に及ばざるが當然」だという風に結んでゐる邊りは、不満を隠せない底のものに違いないが、キョリー夫妻が物理學校の粗末な實驗室で、ラヂウムの發見に成功した翌年の明治三十二年という年代の日本に、初めて公にした性道徳の意見としては、まことに新鮮な倫理觀でもあつた譯である。

明治五年に早くも、「學問のすゝめ」という書を著し、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と説き、萬人の權利の平等を論じ、學問を鼓舞した福澤が、「夫れ女子は男子に等しく生れて」と「新女大學」で、婦人の獨立を説きだしたのは明治廿二年である。いかに階級改革が婦人問題を追い越して

行われ、説かれねばならなかつたかが解る筈である。

こうした一般情勢が、女性たちの自覺を強く動かしたことは事實だが、彼女らが社會から負わされた立場というものの大勢は、依然として無力な存在でしかなかつたのである。言うまでもなくそれは、この時期の社會、經濟の段階が、女性の社會的進出を促すような情態にまで高まつていなかつたからである。女性たちは、獨立した經濟的基礎を得ようにも途がなかつた。家内手工業の域をようやく脱した近代産業の展開はあつたが、大規模な勞働力を必要としなかつた故に、女性たちが生産に引込まれるようなことは無かつたからでもある。

従つてこの時期の女性たちは、學問を修めて教員にでもなる以外に、獨自の生活地盤を得ることは出来なかつたのだ。しかし、これは何も學校教育萬能の時代だからという意味ではない。學校教育萬能の風潮は、たしかに當時の生活理想の一つとして顯著ではあつたが、單にその反映として、女性たちが體裁のいい職業を選ぶために學問を志した譯ではない。この間の消息を傳える女性に、「塵風戀風」の初野がある。彼女の生活が讀者に訴ふるものは、襲い來る經濟生活の不安に立向つて、資力を失つた女性が、いかに凄しく洩れ飛いてくる世の荒波に闘いを挑まねばならなかつたかと云ふことの事實である。

弱い女の身にとつて、これは痛ましい抵抗であり、足掻きでもある。しかし、かかる足掻きに

身を挺しつゝ、初野は自己の生活の運命を切り開いていつたのである。

6.

萩原初野は妾腹の出で、異母兄や親類や、その他、彼女の妾腹の出であることを知つてゐる郷里の人々からは、毎に嘲罵と冷笑とを浴せかけられている。彼女はどうかしてその恥辱を雪ぎたいという一念から、東京に出て、その頃の女子最高の學府に學んだ。彼女はそこを卒業し、立身出世をして、自分を嘲弄した者どもを見返してやりたいと意氣込むのである。そのような決意から、彼女は一心を籠めて學業にいそしんだ。

たまたま、創立十周年の祝賀會が催され、彼女は英語の御前講演を聞え上ぐべき光榮に浴し、胸をはすませて颯爽と登校するのであるが、その途次、不幸にして負傷する。限られた學資以外に送金して貰えぬ境遇の初野は、病院へ擔ぎ込まれたが入院料が心配になるのである。異母兄の酷い仕打を逃れて出奔した妹を、金を工面してようやく郷里へ歸らせた矢先であつてみれば、どこをどうたゞいても金が出る當はない。登校用の自轉車でも賣つて拵えるより外に途はないのだが、その自轉車も買手はないという。

三週間かからねば全癒しないと言渡されているにも拘らず、初野は十日に満たない身體を下宿に運んで来る。そんな折、下宿へ出入りする殿井恭一という洋畫家が、彼女の急場をお救いしたいと申し出る。

萬策つきた彼女は、見も知らぬ殿井から融通を受け、病院の拂いや看護婦の御禮やら、滞つた下宿の拂いに充てようと喜んで出かける。だが病院へ来て見ると、自分の拂うべき入院料は誰かの手によつて済まされている。意外である。廣い東京に見知つた人のない初野は、感謝しようにも心當りがまるで無いのである。不本意とは考えたが、殿井には返金する。

定まつた學費以外に一文も郷里から送つて来ないことは判つてゐるし、またそれだけで現在の物入りの後片附が出来ないことも承知はしているが、だからと云つて、他人の援助を受けることは不名譽である。しかも、大事な夏の卒業試験も近附いている。社會に出て好地位を得るも、名譽を受けるも、一に卒業の成績によつて決まるのだ。それを思えば、一時も斯うして遊んでいる暇はない。假りにいま退院したために、少しぐらい片腕が利かなくなろうとも、生涯の榮辱浮沈の岐路に臨んで、何を怖れ、何を躊躇する必要があるか。初野は、我とわが身にそう言い聞かせて、決意の臍を固めるのであつた。

しかし殿井は、彼女の辭退をも憚らず、執拗に言い寄つては附纏う。下宿の主婦が取持役なの

である。殿井の厚志が疚しい魂膽から出ていることを知つた初野は、彼の誘惑に負けまいと努力する。

そんな折、再び妹が出奔して下宿へ轉げ込んで来る。兄の虐待の益よつものに堪えられなくなつたと言るのである。彼女は、この血の繋がつた妹を、どんな危険の障害に暴されても面倒みようと決心する。ところが翌日、兄から意外な電報が来た。

ナミ カネモツテニゲタ オサエテオケ。

お波が金を拐帯して逃げた——初野はどうしても信じ難く思われた。兄は直ぐやつて来た。彼女は波が、そんな悪事を働く少女でないことを懸命に辯護するのだが、兄は聞き容れぬどころか、ますます激昂するばかりである。

「これは何だ、汝等二人申合せてした仕事だ。金を盗んだのも、逃げて来たのも、皆んな初の指圖だ。」

「兄様、何ですつて……何ですつて、それは貴方、あんまり失禮じゃありませんか。」

「いや、それに違いない。ふたり共謀になつて、この兄に迷惑をかけようと云うんだ。此の室中を家探しするからそう思え。」

「家探しでも何でもなすつて下さい。だけれど、若し無かつたら如何します。いくら兄さんで

も、そんな言掛りをつけて、無かつたらどうするんです」

「出なければ、警察の手を借りても出してみせる。ま、そつちへ退かんか」

兄は無遠慮に机や本箱や文庫を、手當りしだい探していたが、やがて鏡臺の抽斗に古新聞に包まつた女の紙入があるのを見つけると掌で叩いてから、にツと眼をむいた。

「これは何だ！」

波は事實、金を持つて逃げたのである。初野は今更の如く驚いたが、考えて見れば、こんな少女の心をねじ曲げたのも、結局は、兄夫婦の仕打の酷いのが然らしめた仕業であらう。二人は、いつそ厄介になるまい。ならなくても、やつてゆける。いや、どうでもやり抜こう。彼女は腹を据え、そう心に決意した。そして、きつぱりと關係を斷つことを宣言する。

「これから今後は貴方のお世話には成りません。學費も要りません。私と波と二人は、死んでも貴方の厄介にはなりません」

こうして初野姉妹は、いよいよ求めた逆境に立向かねばならなかつたのである。

卒業試験までには三ヶ月もある。だが學費はおろか、下宿の拂いさえない。姉妹のように親しく交わっている學友（芳枝）に金の無心を頼んで見るが、芳枝の父の破廉恥な行爲から反つて夫人に疑われ、融通を受けるどころか、恥を掻かされて歸つて来る。殿井は相變らず色々の手管で

言寄つてくる。妹の波は、殿井から補助を受けてはどうかと姉に勧めるが、一度變な行爲に出られてから初野は、彼の好意を受ける氣はしなかつた。持物や身の廻りの物を金に代えては、どうか急場を凌いでいたが、不幸にも、初野は脚氣に冒され、物質的にも精神的にも身動きならぬ苦境に陥る。

押し迫つて来る生活苦に面して、彼女は泣こうにも泣けなかつた。ある時は、辛くとも郷里に歸つて兄の厄介になるるか、それとも、いつそ殿井に身を委せて、この苦境を救つて貰おうか、とも考えるが、「なんぼ、か弱い女でも荒い浮世の波を、こゝまで漕ぎ來つて、すぐ手のとゞく岸に上らずに、このまゝ押流されてなるものか」と、じつと踏みこたえて辛抱する。しかし、金はどこからも浮いてはこなかつた。初野は詮方なく、卒業までの約束で、お波に女中奉公して貰う。

殿井は、波が女中奉公に出たことを知つて、初野に再度補助する旨を申出るが、彼女は頑として受け容れない。彼はせめて波だけでも自分の許に置いて面倒をみてやろうと考え、奉公先から暇を取つて連れ戻す。芳枝は初野に、父母の無禮を詫びるために友達を介して諒解を求める。初野もそれを快よく受け、卒業までの補助を芳枝に依頼する。

下宿をはらつて借家に移つた初野は、殿井に預けておいた妹を無理やり引取りはしたが、芳枝の許婚の東吾が家出したことから、芳枝の援助が断切れ、再び生活難に見舞われる。東吾は、

夏木子爵家の養子として育てられ、ゆくゆくは芳枝の夫となる人である。たまたま、東吾は初野の許を訪れ、生活費の足しにと言つて金を置いてゆく。東吾は以前から初野を戀していた。芳枝の夫になる身であることは知りながらも、初野を思い切ることが出来なかつたのだ。知れぬように病院の拂いを済ませたのも彼である。

彼は初野に一切を打明けて、將來の誓いを迫つた。初野も秘かに東吾を慕つていた。しかし東吾は、義姉妹の誓いのある芳枝の夫となる人である。彼女は芳枝に濟まないといい、何度か諦めようと決意するが、その都度、東吾に勵まされて思い止まる。東吾の出たあとの夏木家では、芳枝に婿を取らうとするが、芳枝は東吾以外の妻にはなるまいと決心して初野の許へ遁れて来る。芳枝の父母も縁談を断念して東吾の行方を探す。

初野は進退に迷つた。自分の本心に忠實であらうとすれば芳枝を欺くことになり、友情に誠ならうとすれば、最愛の東吾を失うことになる。「芳枝さんには濟まぬけれど、自分の幸福には替へられない」ところから、意を決して芳枝には東吾の居所を偽つて教える。

一方、芳枝の父母や東吾の實家の親たちは、東吾の隠れ家を突止め、揃つて押掛ける。一旦は除籍の手續を辯護士に依頼した東吾ではあるが、そして初野と將來の契りを固く交した東吾ではあるが、ついに親たちの言葉に随つて、初野を思い切つて夏木家へ歸ることを承諾する。丁度その

時、東吾の許を訪ねた初野は、縁側の物陰でそれを聞き、憤りと悲しみに震えながら匿つている芳枝の下宿へ引返す。欺かれた口惜しさに、彼女は東吾が房州へ行つたと芳枝に告げて戻つて来る。

偽られたとも知らず芳枝は、置手紙を遺して翌朝の船で房州へ立とうとする。

芳枝から手紙を届けられた初野は、芳枝が悲壯な決意で出て行つたのを知つて後を追う。船が出るところであつた。芳枝は救えた。だが疲労と傷心とで元氣を喪つていた初野は、その場へ倒れ、病院へ運ばれたが程なく息を引取る。病名は脚氣衝心であつた。

死の瞬間まで、卒業試験を氣にしながら彼女は死んでゆく。故郷の母（實母）の卒業を待つてゐることや、殿井の許に逃げて行つた妹のことを初めとして、邪慳な兄の手前、それから子爵夫人（芳枝の母）に罵られた口惜しさなど、四方八方を思い廻らせば、一日も早く獨立自活の身になるよりほかに生きてゆく途のないことを考へて刻苦したにも拘らず、試験を一週間前に控えて死んだのである。

更めて説くまでもなく、彼女の自覺には、今日から見て物足らぬ箇所や缺點はあるのだが、しかし、ともかく彼女は、男の作つた在來の社會が、女性を如何に慘めに遇しているかと云うこと、及びこの慘めさから逃れるためには、女性に經濟的獨立がなければならぬと云うことを痛感している。この痛感あるがために、彼女の専門教育を受けていることにも、そこに非常な眞剣さ

が宿つた。ただ、今日から見て物足りないのは、彼女が、女性として彼女自身の誇りの自覺を持つていないことである。彼女は社會的に、ただ男子に及ばざらんことを怖れた。女性は、男子に劣るべきものという潜在觀念が、彼女からは未だ抜け切らなかつたのである。

詰るところ、男女の對等感において、彼女の自覺は、まだ具體的な理解にまで辿り着かなかつた。とは言え、その意志の強固であることに於て、獨立心の旺盛なことに於て、しかも、それが二十年代の新しい女性によく見るような、一種の附焼刃からではなく、全く彼女自身の内心の要求から來ている點において、その前の時代には見ることに出來ない、確固とした足場を築き上げようとする女性であることは事實であらう。

一部の人は、こうした女の生活力や意志の強さを、當時移植されつつあつた西歐の個人主義思想などの影響とも見ているが、初野の場合などに、それを當嵌めるのは必ずしも至當だとは思えない。何故ならば、彼女は西歐思想に影響される前に、おのれに襲いかかる生活苦を切り拓く經驗において、自分の生活と運命とを支配するものが、社會や道德でなくて、餘りにも多く自身自身の努力に懸つていられることを痛感していたからである。彼女の生活態度や思考の強さは、言うまでもなく、そこから來ていると思われる。だからして彼女の欲求には、生活のための打算と、ある種の計量とが恒に踏まれていたのである。彼女の生活に對する考えが附焼刃でないのは、生

活と思考とが、離れ難く結ばれていたからでもあつたのだ。前代の女性に見られない意志の強さは、要するに、經濟的獨立がなければ女性は救われまいという自覺が、彼女の考えの奥底に絶えず意識されていたからではあるまいか。これは、「虞美人草」の藤尾や、「煤煙」の朋子には見られない傾向である。と云うのは、藤尾の性格から、ゴーチエの「アントニーとクレオパトラ」を耽讀するような浪漫的な要素を拭い去つた部分が、現實的に生々しく際立つて來ているからである。おのれの運命を、己れ自身の自發的な意思と實踐とによつて開拓しようという傾向の芽生えは、數々の先進女性によつて觀念的に受繼がれ、觀念的なるが故に、限りなき犠牲と哀愁の淵に臨まねばならなかつたことは事實である。しかしその反面には、こうした現實生活との格闘を経て、新たな自覺へと實質的に歩み始めた女性たちの一群のあることは、注目すべき事柄である。

「魔風戀風」が書かれる二十五年も前に、「私は何よりも先に人間です。貴方と同様に人間です」とノラをして言わしめる、イブセンの「人形の家」は書かれ、五年おくれてモーパッサンは「女の一生」を書いていいる。「クロイツェル・ソナタ」をトルストイが世に出したのは、「女の一生」が書かれた四年後の明治二十年である。影山英子や中島湘煙等の政治運動が漸く影を没し、中江・板垣らの運動が影を潜めて、下田歌子等の治警撤廢運動が起る少し前の明治二十年に、外國の作家たちは、こうして幾つかの小説や戯曲のなかで、女の人間性を問題にしていたのである。

「人形の家」のノラは、青年辯護士ヘルメルと結婚して幸福に暮っていたが、二年ほど過ぎたころ夫は病氣になり、轉地療養することになる。ノラは夫に内密で療養費を才覚するために、クログスタットという男から借金をするのであるが、保証人に思いつく人がないため、數日前死んだ自分の父をまだ存命しているように偽筆で署名しておく。彼女は愛する夫のために謀つたこのような偽りを、已むを得ぬ應急の處置だと考えた。轉地先から健康を取返して歸つたヘルメルは、次第に地位を高めて大銀行の支配人の位置を占める。この間にノラは、すでに三人の子の母となつた。家計を注意深く切盛りながら、夫には内密の借金を僅かずつながら返済していた。そのような事情を知らぬヘルメルは、ノラが絶えず小遣をもとめるので「うちの無駄使いやさん」とも呼び、又そのたびに明るく燥ぐので「小雲雀」とか、「栗鼠」とか呼んで愛撫の眼を屢叩いた。ノラは幸福であり、充足した境涯にあるのを感じた。

ノラの債權者であるクログスタットは、リンネ夫人というノラの舊友と戀愛關係にあつたが、リンネ夫人に捨てられると共に放埒に身を持崩す。そうしている間に、彼の勤めている銀行に、

新しい支配人としてヘルメルが就任する。そのために彼クログスタットは滅首されるような破目に陥る。やむなく、彼はノラの文書偽造という弱點をつかんで、彼女を唆かす。つまり、ノラからヘルメルに、滅首することのないように懇願させるのである。しかし、そのような複雑な事情を知らぬヘルメルは、ノラの希いを受付けようとはしない。危機は足早に迫つて來た。

かくして、クログスタットは最後の手段を執らねばならなかつた。もし、自分の要求が徹らぬとすれば、ノラの偽造事件を公開して、ヘルメルの社會的地位を葬るぞという脅迫狀を發送する。何らの經緯に通じないヘルメルが、その脅迫の手紙を開いた刹那、ノラをどう處置するだらうか。

ノラの心は、せわしく波立つた。今こそ否應なく、夫の愛の眞偽が確かめられるのだ。どれほどの眞實が自分に傾けられているか。

だが彼女は秘かに信するところがあつた。自分のしたことは、すべて夫のための一時の方便に過ぎぬのだから、たとい社會的に公開されたところで、道徳的な恥辱となることはあるまい。また、男らしい勇氣のある夫は、罪を一身に引受けて法の裁きをさえ恐れなく受けてくれるだらう。その時は、自分も身投なり何なりして愛の責任を果そう。夫は多分、憫むべき妻だという勦りから一さいを許してくれるに違いない。

しかし、それは甘い幻想に過ぎなかつた。クログスタットの脅迫狀を開いたヘルメルは、震え

る憤りと恐怖の表情も露に、唾を飛ばしてノラを罵倒した。おれの社会的地位、榮譽の一さいがこれで終りを告げるのではないかと、ヘルメルの憤怒は、ノラの意想を越えた激しさであつた。」そこへクログスタットの第二信が届く。そして形勢は逆轉するのである。

第二信が書かれたのは、リンネ夫人がノラの苦境に同情して、クログスタットとの愛の復活を代償に、ヘルメルを脅迫しないように頼みこんだからである。彼女の請いを容れたクログスタットは、早速偽造文書をその手紙に同封してきた。ヘルメルは、第二の手紙を眺めて狂喜する。——これで私は救われた——と。傍で見守つていたノラは、飛立たんばかりの夫に冷やかに尋ねる。——すると、わたしは——。

「無論お前もだ」と言い、附け足して、「恐ろしい荒鷲の爪から助け出した小鳩のようなお前を、自分の廣い翼で覆うてやる——男が自分の妻の過失を許した時ほど、穏かな美しい氣持はない。女はその時から二重の意味で男のものとなる。妻であると同時に、子供でもあるから——」しかし、ノラはこのように打つて變つた寛大さの底を見極めずにはいられなかつた。彼女は、これまでの八年間、自分はたゞ夫の氣紛きまぐれに弄ばされる玩具以上のものではなかつたこと、人間的な誠實を透して愛されなかつたことを自覺した。この事實を彼女は反省して次のように言う。

「さあ、わたしはこの家で乞食のように、ほんの手から口の暮しを續けて來たのですね。わたし

は貴方に贖當をしてお目にかけて、それで暮しを立てて來たわけですわ……」

このような自覺から彼女は躊躇ためらわず家出を決心する。ノラは、夫が喜んでゐる隙に衣裳を脱ぐために別室へ行く。だが、あまり手間取るので夫は屏口から覗き込みながら訊ねる。「お前は何をするんだね」とノラは、はつきりした口調で、「假裝かりものの衣裳を脱ぐのです」と諷刺的に答える。彼女は身仕度を済ませて、家出を告げる。

ヘルメル お前の家庭も、お前の夫も、お前の子供達も振捨てて行くのだね。考えてごらん、世間が何というか。

ノラ 世間なんか何と申しても構いません。わたしは、そうすることが自分のために必要なのです。

ヘルメル いやはや、とんでもない奴だ。だが、それではお前の神聖な義務が済むまい。

ノラ わたしの神聖な義務とは何でしょう。

ヘルメル それを今さら私に訊こうといふのかね。夫に對し、子供に對する義務さ。

ノラ わたしには他に、同様の神聖な義務がありません。

ヘルメル そんなものがあるものか、あるならどんな義務だか言つて見ろ。

ノラ 私自身に對する義務です。

ヘルメル 第一に、お前は妻であり、母親である。

ノラ そんなことは、もう信じません。私は何よりも先に人間です——あなたと同様に人間です。

かくてノラは、もはやヘルメルへの愛情は微塵に打碎かれたことを断言し、自己を、みずから
の手で築き直すという決意のもとに、「人形の家」を去つて行くのである。

八年という歳月を押し込めていたこの家は、自分にとつて意味がなかつただけでなく、夫にとつても、遊戯室でしかなかつたのではあるまいか。彼女はヘルメルとの結婚が、自分にとつて少しも幸福でなかつたことを考え、次のように訴える。「私は實家では、お父さんの人形つ子であつたように、こちらへ来ては貴方の人形妻でした」と。そしてその人形妻が、夫の療養費を拵えるために、内密でクログスタットから借金して轉地させたのも知らず、偽造文書の罪だけは名譽のために妻に負わせる。

夫の自分に對する眞實の愛とは何であつたのか。ノラは奇蹟の起ることを望んだ。すなわち、クログスタットの要求など跳ね除け、自分から進んで出て、一さいを自分の身に夫が引受けてくれるだらうことを。

しかし、一さいは明白になつた。彼女は言つた。「あなたは、ご自分に降懸かる心配がもう無くなつたとすると、もう一切の危険が無くなつたとすると——あなたは今更なんのことも無かつたような顔をして、そつくり舊と同じように、わたしは又あなたの雲雀さんになる。あなたのお人形になる。だが、わたしの心には啓示おとしが閃めきました。八年の間この家で、わたしは餘所あまの他人と同棲して、三人までも子供を生んだのだと——あゝ、それを思うだけでも堪りません——」すると、ヘルメルは言うのである。「しかし、いかに愛する女のためにだつて、名譽を犠牲に供する男はないぞ」ノラは首を振つた。「でも何百萬という女は、それをしてきたのです」

何百萬という女性が、何千年もの昔から子を生んで育てると同じように、本能的に盲目的に、肉體も靈魂も擧げて無條件で男の前に捧げてきた。これが女にとつて生れながらの一つの道徳であり、義務であつた。ところが、法律は——男子の作つた法律は、それとは別な形式一片の道徳や義務を認めて、女たちの、そういう人類自然の愛情に根ざす献身や犠牲を認めない。そればかりではなく男性は、平常無事の日ば女性の捧げるそらした自然な愛情を十分に享樂しながら、一旦法律とか世間體とかの形式的な束縛を受けるとなると、昨日までの放恣な享樂主義者は、身を翻して、今日は方正な君子になり澄まそうとするのである。

ノラは我慢すべきでないことを悟つた。そして奇蹟があらわれたら戻つて來ることを告げるの

あつ。

ヘルメル その奇蹟の中の奇蹟とは何だろう。

ノラ それは、あなたとわたしと二人ともに、すっかり變化が起つて、それこそ——。

ヘルメル 變化が起つて、それこそ——なんだね。

ノラ それこそわたし達の共同生活が、そのまま夫婦の生活になれる曉でしょう。

こうしてノラは、男の手に成つた法則と、女の行爲を男の立場から判断する裁判官と原告とを有する男向に作られた社會にむかつて、男女が人格的にも獨立し、眞に對等の資格で結ばれる結婚というものを希つたのである。

で。

與謝野晶子一派の文學活動が、男女學生の間に移しく瀰漫したのも、このイブセンの「人形の家」が日本に紹介された前後のことである。

○ わがこころ君を戀ふると高ゆくや親もちいさし道もちいさし

やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君

「不義はお家の御法度」と云われていた婦人道德の絆を、大膽にも截切つて歌われたこの戀愛詩は、まことに、王朝以來日本の女性が初めて勇敢に戀愛の權利と神聖とを誇つたものとして、注目に値する。戀愛萬能の勝関は、若い男女の心と、感情とを物狂わしく揺振つていつた。當時の男女學生たちは、この「明星派」の本能解放の叫びに、直接か、間接か、耳を傾けないものはいほどだつたのである。しかし、晶子の歌にあらわれた熱情も、當時の戀愛萬能の叫びも、共に歴史の或る時期の、すなわち、人間個性の解放の途上における一つの積極的な姿態として受取られなければならない。

こゝには、愛情の自然な發露を遮つた舊いモラルや、觀念への激しい抗議と嘲笑がある。その意味では、愛情を無自覺なものから、人間的なものに押し上げようとする闘いである。しかし、それは同時に、愛情を餘りにも本能とエゴイズムのなかに閉込めるといふ弱點をもつ。それ故に、そのような奔放さの増長の果、傍若無人な享樂のなかに、或は、何ら新しきものの、豊富な創造を加えない官能の浪費に終らざるを得なかつた。たゞ、このように奔放な、本能のロマンチックな叫びによつてしか、舊い觀念や形式から一個の人間として飛立つことが出来なかつたのである。

こゝに歴史の制約があり、進歩の意義と價値の歴史性とがある。そのような制約と、歴史的意

義の認識を深めないでは、このような本能的愛情の燃焼を讀えた詩の、進歩と退歩のけじめも定かに説き明かされぬのである。

イブセンの社會劇に前後して、露西亞の作家（トルストイ、ドストエフスキー、ゴリキー）のものが讀まれるようになり、エレン・ケイ^{*}も紹介された。「ブルー・ストックキング」（青鞥）の組織されたものこの直後である。これは宛もメリー・ウォルステンクラフトが、ルソーらの自由民権論を婦人界に移植したと同じく、彼女らは一般思想界の個人主義思潮の流れを、女性の立場に適用しながら婦人解放の運動を起したのである。

* エレン・ケイは瑞典の母性保護論者。（一八四九—一九二六）彼女は、人類の明日への努力とは良き人種の創造にあり、良き人類は良き兒童により、良き兒童は良き母によつて決定されると言い、母性の擁護に献身した。

平塚明子を中心に起された「青鞥社」は、言うまでもなく政治運動のための結社ではなく、女流文學雜誌「青鞥」を機關誌とした婦人解放の文藝運動で、平塚明子はその創刊號に書いた「原始女性に太陽であつた」という表明が、青鞥同人の主張でもあつた譯である。そして、「本社は女流文學の發達を圖り、各自天賦の特性を發揮せしめて、他日女流の天才を生まむことを目的とす」と、規約の一條にもある如く、この一派の運動は、社會運動や政治運動にその重點を置くと云うより

は、むしろ、女性の發刺とした精神の自由と、獨立の意思とを發展せしめることに使命を感じていたのである。

青鞥派の運動は、新聞や雜誌に多くの話題や波瀾を喚び起した割に、思つたほど發展もしなかつたと云うのが一致した意見であるが、しかし、その活動が短く、また主張も不徹底だつたとは云え、この一派の運動は、新しい道徳を打樹てるに相應しい良識と、勇敢さとを有つていた。筆に、口に、實踐に兎も角、舊い傳來の秩序を、覺めやらぬ一般の空氣にめげず打破していつた。それによつて、一般の女性も漠然とはあるが、この運動の中心の思想を、一應はつきりとした理論として受取ることが出來た。

「蜃中樓」の敏子が、借物の衣裳で女の權利を主張した時から、すでに二十五年という歲月が流れている。中島湘煙や影山英子が、女の主權と獨立を叫びながら活動したのは、青鞥の組織される三十餘年も前のことである。それは、青鞥派の運動が、明治も終り近くの四十四年に、初めて組織されたものだからである。

男と女とが人格的にも獨立し、眞に對等の資格で結ばれることをこいねがつてノラが家を出て

行つたのは一八七八年。すなわち明治十一年である。また、この思想の日本的な移植が、福澤諭吉によつて「新女大學」となつて顯れたのが、明治卅二年（一八九九）である。

そして、この思想が、知識婦人の先驅的な實踐の叫びとなつて、「青鞜派」が動き出したのは明治の終り（一九一一）であると云うことを考え合せると、そこには、女の歴史が背負つてゐるこの國の生活の特殊性と傳統とが暗示ぶかく感じられる。

かくて明治期の小説に反映した女性像には、「蜃中樓」の敏子から「魔風戀風」の初野に至るまで、それぞれの意味で、一定の生活層に生きた女の人生や心情が窺われる。

◎ 封建社會から根づよく傳わつてきた女の道徳を、そのまま美しい人生として生きた「十三夜」のお關や、「婦系圖」のお薦。娘として親のため、嫁いでは良人のため、子の爲に、おのれの悲喜を殺し、諦めの人生に殉じていつたお關やお薦。「七去の罪」に逆いもせず生涯を畢え果てたお關にお薦。

* 「七去の罪」は支那の故事にある女の訓えであつて、その中には、七つの教訓が示されている。即ち「女に七去とて惡しき事七つあり。一には舅姑に順わざる女は去るべし。二には、子なき女は去るべし。三には、淫亂なれば去るべし。四には、倍氣深ければ去るべし。五には、癩病などの惡しき疾あれば去るべし。六には、多言にして慎しみなく物言ひ惡しきは、親類とも仲惡しくなりて家亂るるものなれば去るべし。七には、物竊む心あるものは去るべし。」

徳川期に完成された婦人道徳は、わけても徳川から明治へかけて女の鑑とまで言われた貝原益軒の「女大學」などは、この支那の故事に書かれてある「七去の罪」を根本原理としていたようである。

また中江藤樹の「鑑草」に説かれている「女訓」も、これとはほぼ同じ意味のことが言われている。

また、「如何なれば斯く枉れる世ぞ。身は夫を戀い慕いて、病よりも思に死なむ」とまで、一途に夫を戀い慕いながら、「枉れる」俗習や掟に反くことも出来ずして死んでゆく「不如歸」の浪子。また、物質生活への中途半端な目覺めに、おのれの青春を誤つた「金色夜叉」のお宮。これらの女性たちは孰れも、おのれに負わされた生活の痛苦に挫折しながら亡びゆかねばならなかつたのである。

經濟生活の近代的な展開に伴なつて、人心は或る慌しさのうちに變化しつつあつたけれども、生活の様式とか習慣とか云うような、人間生活のうちで最も變革することの困難な、後れ勝ちな部分が、封建時代の儘の状態でいた當時の生活形態のなかで、女たちが、精神的にも肉體的にも自主的にならうとするのは、多くの犠牲を避けることが出来なかつたのである。

實際から言つて、彼女たちは、環境に對して自由に振舞うことよりも、先ず自身に對して自由に行動することが困難だつたのだ。従つて、徳川期の女性たちが亡びたと同じ経路で、彼女たち

も自己を抛棄しなければならなかつたのである。習俗や制度の複雑な道程で、女性の演じた役割は、社会的に眺めるとき、女性の實權の崩れ失われる委となつた。しかし、この悲しむべき事實は、社會の變遷に比例して女性の厭うべき傳統ともなつてきているのである。

明治期の小説に反映した女性たちの生活には、何百年も前から受渡されてきた道德の重さが、開化へと傾きつつある世相の奥底に、特徴的な形で宿されてはいるが、それにしても「魔風戀風」の初野や妹のお波のような、生活と運命とを自己の力で切り開こうとする女性も見出されない譯ではないのである。彼女らの逞しい意志と生活力とは、青鞥派の人達さえなし得なかつた女の獨立の途を、やがては切り開き、確信と決意とをもつて、環境の波浪に立向つて突進するに違ひなかつた。

II 明治女性の環境と輿論

1。

「戀愛は人生の秘鑰なり。戀愛ありて後、人生あり。戀愛を抽き去りたらむには、人生何の色味かあらむ……。」

これは、明治浪漫主義の先驅者、北村透谷によつて書かれた言葉である。かれの有名な論文「厭世詩家と女性」の冒頭の言葉である。

透谷が、このように戀愛の新しい意義と、その人生的價値を聲はりあげて鼓吹し、數々の論文で、舊い觀念の凡てに向つて挑戦したのは、明治廿五六年、すなわち、日清戰爭の直前であつた。そして、女性と戀愛の尊重と、その價値を、ひろく人生の課題として捉え、それを新しい時代の夜明けの言葉として投げ出した文學者は、恐らく透谷をもつて嚆矢するのではあるまいか。多くの政治小説、その他において、自由平等思想の勃興に伴ない、男女同權の要求や自覺は唱えられただけでも、それは多く、西歐思潮の直輸入による政治的な感化の程度に過ぎなかつた。

透谷は、云うまでもなく、戀愛の價值や、女性の尊重を、自由平等觀の立場から説いたのではない。彼は、當時の社會において、戀愛が色慾として濫りに口にすることを憚るような生理的な現象としてしか理解されていないことに挑戦した。或は、當時の文學が戀愛の眞實を描くよりも、好色を描くことに耽けるのを烈しく攻撃した。

つまり、戀愛を野卑なものとして眉をひそめる社會的傾向や、遊里における女性の人工的な風俗や、好色的な面を享樂の立場から描く小説を強く否定したのである。

——抑も戀愛は凡ての初めなり。——と、透谷は書いた。親子の愛なり朋友の愛に至るまで凡そ愛情の名を荷うべき者にして戀愛の根基より起らざるものはなし。進んで上天に達すべき淨愛までも、この戀愛と關聯すること多く、人間の運命の主要なる部分までも、この男女の戀愛に因縁すること少なからず。——當時の有名な小説家紅葉、露伴が、戀愛を好色と誤り、或は、遊里の傳統から生れた風俗を享樂的に描くことを非難し、そのような風潮が、江戸時代の頽廢した文化のなかに咲亂れた元祿文學から尾を延いて傳つたものであることを指摘して、透谷は新時代のために憤怒の拳を握つた。そして、以上の章句は、その中の一節である。色慾の形容以外に考へることの出來なかつた當時の一般的な戀愛觀に對立して、透谷の考へた戀愛が、いかに廣い人生的價值とのかゝわりを深くしているか。彼にとつて、戀愛は、單に男女の間に交される情熱の

高まりのみではなかつた。戀愛は、彼にとつて宇宙の元素であり、至高な愛情の凡ての根源であつた。いわば、彼は、戀愛の感情のなかに、宇宙的な生命の昂揚を讀み、人間の凡ゆる愛情との協同性を眺めたのである。このような戀愛の理解は、當時にあつて眼をみはる革新の思想であつたのみならず、その後の、そして現代に及んで、未だその主張の生命は枯れ凋んだものとは云へなす。

透谷は、かように、戀愛感情の價值を大きく人間の問題として捉え、それを生理的な現象として蔑む傾向に抗議した。「プラトン……の、言えりし如く戀愛は地下のものには非ざるなり、天上より地下に降りたる神使の如きものなることを記憶せよ。……」と、いう主張は、いかに彼が、戀愛を崇高なものとして幻想したかを傳える。色慾の卑しむべき表現としてしか考へなかつた一般の風潮に烈しい憤りを覺えた彼が、戀愛を人間的、現實的なものとしてではなく、神祕的な幻影のなかに受取らざるを得なかつたのも、無理からぬことであろう。彼は、そのように戀愛を、人間の本能に根ざすものとしては、はつきり言えなかつたけれども、戀愛が自然の感情であること、何ら卑下すべきものではないこと、そして、その感情は如何にしても抑止されず、變形できぬものであることを認めていた。それは次のような言葉となつて迸り出ている。

『戀愛の感情を譬えてみれば……野外に逍遙して芬郁たる花香を嗅ぐとき、其の花の在るところ

に至らんと願うは自然の情なり、其花に達する時に之を摘み取りて胸に挿まんとするも亦自然の情なり、この情は底なき湖の如くに一種の自然界の元素と呼ぶより外はなかるべし。之を打つとも破るべからず、之を鑄るとも形すべからず、之を抜き去らんとするも能くすべからず、宇宙の存すると共に存する一種の靈界の原素にあらずして何ぞや。……』戀愛は、人間の自然の感情の麗しい流露であつて、その感情は底なき湖の如く深く、如何にそれを叩きのめそうとしても不可能な根強さを有つものであると叫んでいる。透谷の叫びが、如何に激しく挑戦的であつたか、しかも、それを卑下し、抑止し、侮蔑する傳統に向つて如何に強く抗議したかは、當時の社會觀念の覺めやらぬ惰眠に起因している。

2。

明治開化が、日本の國內的な革新の自覺であつたと同時に、國家の世界に對する覺醒でもあつたから、當然歐米先進國の制度、文化の攝取によつて、我が國の發展を刺戟し、鼓舞しなければならなかつた。従つて、女性の世界にも歐化主義の侵入は免れなかつた。教育の普及は一層それを助長した。しかし、女性の歐化的な傾向は、多くは風俗の模倣や、僅かの先覺的な女性の政治

的な氣焰となつて表現されたに過ぎなかつた。

一ばん女性の近代的な自覺は、遙かに遅れ、迂餘曲折した複雑な過程を辿らなければならなかつた。一般の社會道徳においても、封建的な弊風は、歐化の疾風に何の係わりもなく、風俗は鬻から束髪に變つても、因襲的な女性觀は、益々縮められた殻のなかに押込められるかに見えた。

明治初年における同權論の主張や、風俗の歐化は、ごく一部の先進的な女性による衝動的な表現ではあつた。しかし、その表現は、日本の革新が、女性の地位の向上や、人格の尊重によつて更に充實するといふ考えから出發していた。だが、轉換期の常として、その本來の意義を飛越えて、風俗の壞亂となり、女政客のあられもない腕まくり姿は、人々の眉をひそめさせる傾向を導いたであらう。そして、その先覺的な女性の近代的な自覺が、未だ充分に實質的な建設の方向に進まない前に、すなわち、明治二十年頃を境として、國粹論の擡頭となり、女性の問題のみならず、凡ての文化に歐化の抑制が主張された。その抑制の聲と共に、舊來の傳統は再び蘇り、従つて婦人運動も消滅し去つた。しかし、初期の衝動的な運動は、そういう傳統の復活がなくとも、次第に衰微せざるを得ないような矛盾や、直輸入の弱點を有つていた。西洋に於ても、それは母性擁護の運動に變化せざるを得なかつた。わが國では、同權の主張や、婦人參政權運動が成功しなかつただけでなく、廢娼運動さえ省みられなかつた。しかし、明治十七八年から二十年頃にか

ての、歐化主義の絶頂を極めた鹿鳴館時代の、男女同権の思潮は、そのまゝ延長されなかつたけれども、國運の發展に伴つて男女教育の均等という形で引繼がれ、下田歌子、杉本萩江、戸田極子、鷺山(吉岡)彌生等の運動となつたが、それも氣運熱せず成功するに至らなかつた。

一方、現實社會の状態も、同権はおろか、女性の人間的な愛情の自然を尊ぶ傾向さえ遮られていた。透谷の憤怒はそこから出發した。事實明治の革新的人物、政治的傑物さえ傾城の巷に政治を論じ、花柳の世界からよき伴侶を選ぶ傾向さえあつた。と、いうのは、當時における傳統文化の粹が、そのような世界に最も約爛たる姿を傳えていたからであり、活動する男性の社交の場所にも乏しく、よき伴侶を選ぶ機會にも恵まれなかつたからである。ともかく斯様にして、明治時代における花柳の世界に生きた女性が、むしろ凡ゆる點で時代を先驅しつゝあるかにさえ思われ、一般女性の風俗がそれを模倣する傾向さえあらわれたのである。それは古代ギリシヤの昔、名望ある婦人が賣笑婦の世界からあらわれ、傑物の妻が歴史にあらわれず、時の偉大な人物と交際し、それと愛情を深めた娼婦が有名婦人として傳えられているのと類似する現象かも知れない。一般婦人の教養が高まらず、絶えず屋内に閉込められて、その自由な心身の發達を遮つた慣習が、却つて娼婦となつた女性を競争の意識から文化的にも向上させ、愛情の眞實に目覺める機會をも與えたのである。彼女らの世界は人工的、背德的ではあつたが、女性の人間的な自然の能力を、一

般の婦人より自由に伸張させ得る可能性があつた。女性の教養と愛情の自然を、發展させる方向になかつた當時の社會傾向が、娼婦の不自然な技術的な愛情にさえ男性を引攪う機縁を與えたのである。

* 廢娼の運動は、明治五年から全国的に起つていたうえ、男女交際の自由も唱えられていたけれども、

それは特殊な上流の一部のものに限られて、一般の人々には何の影響もなく、當時の書生の戀愛の唯一の對象が娼妓しかなかつたことが、坪内逍遙の「當世書生氣質」(十八年)に描き出されている。

このような事情から考えても、わが國に流れた歐化思想や、開化の論理が、如何に現實改造の實踐力を持たなかつたかは明瞭である。

明治の自然主義以前の文學が愛情を好色の世界に塗籠めたのも、前述のように、一般の愛情が人間的な自然の成熟をなし得なかつたからである。愛情の自然と、女性の人間的な生長が阻まれたところに、同権思想の輸入は、餘りにも突飛な逆立とならざるを得なかつた譯である。同権的主張の前に、その同権的基礎を高める、女性の人間的な生長が考えられねばならなかつた。しかし、わが國では、徳川封建制の長い鎖國的な壓迫のなかで、婦人の自然な生長の氣運が閉され、慌しく維新の御代となつた。凡ゆる革新の主張と實踐の流れに沿うて婦人の問題も俎上にのぼり、

西洋の模倣に越つたのも無理ならぬことである。だが、その無理ならぬ婦人運動の要求は、受容
れられる地盤も背景も有たなかつたのである。

何より、女性の愛情を自然に開花させ、その開花を促す教養と、知性の發達がなければならな
かつた。透谷の戀愛神聖論は、もともとプラトニックな愛情の鼓吹ではあつたが、愛情の偉大な
人間的價值と、その自然性とを抑壓すれば崇高な愛情の本質は歪められ、肉慾的な本能の墮落に
陥ることを暗示し、口を極めて肉體の純潔を説き、好色的な戀愛文學を非難した。しかし、透谷
の説いた女性の愛情に對する要望は、具體的には、どのように展開したであろうか。教育上では、
良妻賢母主義^{*}が唱えられたが、良妻となり、賢母となるためには、女性における愛情の自然の成
熟と生物的な愛情を越えた人間的な知性の擴大がなければならぬ。だが、わが國の婦人教育は
良妻となり、賢母となるための人間愛情の自然的な生長を遮り、むしろ、それを人工的に表現す
る方向さえ執られたと云えるであろう。愛情の理性よりも、むしろ、夫唱婦隨の名によつて愛情
の盲目が説かれた。このように愛情を卑下し、その發展の自然な生長への教養を怠つた果て、過
去における婦人の數々の犠牲は免れなかつた。例えば、この現象の現れは、明治から大正にかけ
て、婦人雑誌の口繪に花柳界の名妓の姿が絶えず、その紹介が截ち切れなかつたことによつても
反映されている。或は、大正、昭和にかけて、夫婦和合の秘訣が、婦人雑誌の主要なテーマであり、

毎月くり返される有様だつたことにも表現されている。教育家さえも、夫婦の和合には、妻が花
柳界の女性の表現に注目することを怠るなど説いた。明治、大正時代において、わが國の醇風美
俗が、いかに一般に守られ難く、その破綻と犠牲の實例を多くもつか、婦人の歴史を少しでも顧
る人の嘆きの一つでもあろう。

良妻賢母主義は、女性の個人主義思想の抑制として、その折中主義として現れた。新時代の家庭は、
もはや傳統的な盲目の服従では支え難く、ある程度の夫と妻との間の理解と協力とを必要としたから
であつた。

しかし、この主義は、人によつて色々に説かれ、舊い傳統と相へだてるところ少い説も多かつた。
ともかく、そこには婦人の消極的な役割しか説かれず、稍もすれば家庭中心の個人主義に陥らせる危
険さえあつた。缺陷は、それが形式的であつたこと、その基礎を支える正しい愛情の展開を遮つたこ
とである。

たとえば、婦人雑誌が、つねに夫婦和合の秘訣を掲げたのは、一般が、それを要求したからに
違いない。その悪弊は、單に婦人の個人主義の破綻とばかりは云えない。男性のエゴイズムが、
女性の人間性を理解し成熟させ得なかつた故に、或は、男性がリベリズムのなかにさ迷い出なが
ら、その伴侶である女性の個性的な生長を快く眺め得なかつたからでもあつた。この事情は、洋

の東西を問わないのである。たゞ、自由主義的ヨーロッパ諸國や、アメリカにおいて、女性の形式的な自由が許され、女尊男卑の弊風にさえ増長したとは云え、それは單に、表面的な男性一般の功利的な讓歩にとどまり、女性自身の同權的基礎は、實に脆弱だつたのである。と、ともに愛情は互にエゴイズムの窄い限界において妥協し、和合はするが、愛情の全人間的な發展の協同的な成熟の基礎は極めて薄弱なものであつた。そして、ルネッサンス的な愛情の自然の恢復、原始時代における素朴な共同愛の復活が、こんにちの世界全般において要求されている譯である。

わが國の、かような複雑な發展の過程で、明治の女性が闘い取らなければならなかつたのは、透谷の指す愛情の人間の尊重と、その自然な生長への可能性であつた。それは同時に、良妻たり、賢母たり得る最も重要な條件でさえあつた。しかし、先進女性は、形式的な自由の獲得に急ぎ、教育は、反動的に、愛情の自由と、自由な愛情の發展とを同一視しながら、良妻賢母の基礎の形成を忘れたのである。いわば、そのどちらにおいても、愛情の人間的な昂揚と、伸張の努力を等閑にして、みずからの目標を根柢から充實させ得なかつたのである。

逆上の歐米の崇拜と、その模倣の明治初年から大正にかけての風潮というも、一面に我が國の文化發展の急激な疾走のための犠牲であり、過失ではあつたが、その過失と犠牲が明治から大正にかけて絶えず引起され、その禍根がいつ跡を断たれるとも知れなかつたという風な形勢は、

女性や愛情の問題が、餘りにも生理的に解かれ、餘りにも形式的に導かれたからである。愛情の精神的な、理性的な發展が促されなかつたための犠牲は、「金色夜叉」の、それとなつて現れている。彼女が初め、精神的な愛情を唯物的な欲望に摩替えたのは、愛情そのものが未熟だつたため、そして、自主的な個性なきゆえの、利那的な盲動に過ぎなかつた。彼女が貫一と別れて富山へ嫁したのは、はつきり意識した計量の末とは言われない。愛情の何物かを知らない前に、唯物的な欲求に誘われて、おのれを破滅の淵に引入れたのである。彼女の、金と愛との二重の分裂は、むしろ、良妻賢母となり得るに必要な、愛情の稀薄さから促されたのだ。それ故に、彼女は金錢欲の破滅というより、愛情の精神的未熟の犠牲なのである。それに較べて、「婦系圖」のお蔭は、より愛情のふくよかな成熟を表現している。彼女が傾城の巷に育つたからである。そこには、金錢による服従の苦惱はあつても、愛情の自由と成熟が不自然ながら培われる機縁をもつていた。そして彼女は、愛情の自主的な希いを撓め、それを堪え忍ぶところに情熱の奔放な充實を感じ得たのである。ともかく、愛情の心理的、浪漫的燃焼には怯むところがなかつた。そして又、彼女の、社會の掟に對する服従と云い、謙讓というも、單なる盲従というのではなく、愛人早瀬の、社會的生長を念う献身的愛情の理解から生まれたというも過言ではあるまい。つまり彼女は、少くとも愛情の理性を、愛人に殉ずるの道に見出したのである。

明治後期における小説の女性、たとえば「虞美人草」の藤尾を典型とする新しい教養の破滅は、新時代の常套的な敗北ではあるが、そこには初めから愛情の人間的な発動が感じられない。つまり愛情の人間的な伝統なき故の、他力本願的な過失さえ窺えるのではないか。愛情の自然な、そして、潤いある豊穰な伝統と秩序とが、彼女の性格に根付いていたならば、流行の亞流となり、男性をエゴイズム追求の素材と見るような傾向には流されなかつた筈である。藤尾の悲劇は、「金色夜叉」の宮の悲劇に通じている。つまり彼女らの愛情に知性の洗練なく、人間的な愛情の根柢が浅く、眞の意味の愛情の個性が芽吹かなかつたからである。愛情の満足を、自己の創造に依るよりも、他に求め、他に縋ることによつてのみ満たし、埋めるといふ傳統が、一ど輕はずみな好奇心、心に捉われると、どういふ利那的破滅を齎すかを暗示するものだ。

「煤煙」の朋子には愛情の非人間性が、極度に近代化された形であられる。彼女の心理の二重の分裂と云い、愛と憎惡の絶えざる感情的な纏れと云い、それは愛情の人間的な目標と理性の彷徨を示す以外のものではない。新しい衝動にたわいなく身を委ね、偶然の出來心によつて、生涯

の破滅に導かれるというのは、人間的自主性の脆さ故である。過失や失敗は、次の成長の榮養とならなければならぬ。偶然の出來心は、理性によつて、その眞偽が確かめられねばならぬ。

「地獄の花」の園子は、みずからの肉體を犠牲にして、愛情の眞實に近附かねばならなかつた。「魔風戀風」の初野は、成功欲とその生活との葛藤から、女性の人間的獨立への自覺の途を辿つた。女性が正しい自覺に辿り着くためには、いかに他力本願的な、自己目標の喪失と云うことが煩いの根據であつたか。娘が妻となり、母となつて、夫や、家や、國家や社會に貢獻するための道も、精神の自律的な發展と、個性の人間の充實なくしては完璧ではなかつたのである。

女性を從屬的な眼で眺め、生理的な役割だけに閉籠めては、女性の天職を果す機能それ自身も、萎縮せざるを得なかつたのである。いわば、嫁してはひたすら家風に隨い、夫の命に平伏すのみでは、家庭の平和は保たれなかつた。

結婚の愛情は、一般に妻と夫との知能的な距りや、妻の愛情の消極的な受動性に對する夫の不満から崩れた。それは、愛情そのものを下劣なものとしてしか眺め得ず、女性の知能的發展を異端視した俗習と、眞實の愛情を自己形成する途が何ら與えられなかつた女性の傳統に由來する。このような女性の悲劇は、もちろん、女性だけのものには終らなかつた。男性もまた、女性の受動的な愛情にのみ理想を求め、その自由な自己創造を無視した結果は、家庭の無味や寂寞となつ

て逆襲されたのである。

振返つて見れば、明治時代の小説にあらわれた婦人の悲劇も、習俗に對立して芽生えた個人主義や、物質主義の嘆きと云うよりは、むしろ、そういう要求を餘りにも表面的な衝動や、形式的な要求に導かざるを得なかつた事情に深く係わるのではないか。早急な、不自然な自覺と、その表現に赴かざるを得なかつたのは、愛情の人間的な形成の環境が熟さないうちに、早くも近代的なエゴイズムや、物質崇拜の傾向に捉われたからである。初めに掲げた、透谷の戀愛神聖論が、いかに先驅的なものであり、しかも、人間愛情の基本の充實に必要な叫びであつたか、その叫びの生命が、明治を越えた大正の時代にも枯れ凋むしほことが無かつたと云うことは注目されねばならない。そこに、わが國における女性の辿つた致命的な精神の弱點が、何ら内側から鍛えられ教化される機縁に恵まれなかつたことの暗示がある。新しく装われた思想や、風俗の波を受けるたびに、たわいなく自己を喪失していつたものは、女性ばかりではなく、インテリ全體の日本の特殊性でさえあつた。自己の功利にのみ捉われるものが、ついに自らの個性を失うと同じく、個性の自律的な形成なきものは、環境と運命に押流されて、自己を失わざるを得ない。しかし、歴史、そして國家や社會は、寧ろなく次の段階へと發展をやめない。その發展の過程には、受動的だつた個人も、いつか、積極的に行動しなければならぬ危機を感じる。そして、事實、明治文學にあらわれ

た受動的な他力本願の世界を、さ迷い續けた女性も、明治の後期になると、自己の生活と愛情とを、おのれの獨自な努力によつて開拓しようという息吹きを傳えるのである。このような生活や愛情の認識と、獨立への歩みも、たとえば、「魔風戀風」の世界から窺われるように、リベラリズムの誘惑からではなかつた。女性の社會的進出の可能、それに焚附けられた成功熱が、女性を家庭の温室から社會の荒波にひきいれ、試練しはじめたからである。生活の智慧が、いかに深く人間の正統な本質的な形成に盡すものであるか、それに比ぶれば、請賣の思想や、つけ焼刃の教養が、いかに果無く机上の空論に終り、いかに無慙な自己犠牲の結果を齎したか。「虞美人草」の藤尾と、「魔風戀風」の初枝とは、同じ犠牲に仆れながらも、その自覺と、悲劇の性格に於ては、全く對蹠的である。ともに、歴史の時代的特質を表現しながらも、一方は教養の淺薄な自負という否定の方向に自らを滅ぼし、他方は、次の發展の系譜に連なる犠牲に殉じた。

西歐思想の模倣の遊戯とは別に、女性の人間の成長の可能性は、その社會的進出が促され、獨立の必要に迫る環境が齎された時に、初めて實質的に芽吹いたのである。しかし、その芽吹きは甚だ脆く、僅かな霜にも傷つかねばならなかつたことは云うまでもない。とは云え、そういう成長のなかで自らを充實させ得た女性も稀有とは言われないであらう。たゞ、そのような成長の順調な姿は、文學的に表現されなかつたと云うことは事實であり、そして一般的には、女性の人間

的充實が未熟のまゝ殉ずるの道にあつたのである。いわば、女性の全能力を揮わせるような社会的氣運は、容易に齎されなかつた。女性をして、家のなかに、戸外に、性的な差別なく活動せしめるような機運の到来は、劃期的には終戦以後であろう。と、すれば、明治女性の成長に飢えた憧れの夢は、今こそ初めて、實踐的な可能の世界に現實化されたと云うべきである。可能はたゞ、各々の緊張と努力に、その國民的個性の充實に深く係わるのである。

第二章 解放の悲劇から生活愛へ（大正期）

この章の主要な作品と作者

藤森成吉「何が彼女をさうさせたか」

徳田秋聲「あらくれ」

菊池寛「眞珠夫人」

水上瀧太郎「律子と瑞枝」

永井荷風「つゆのあとさき」

1 教養の悲劇

1。

明治年代の小説に反映した女性の倫理、愛情の展開、生活態度を、大正期の小説にあらわれる女主人公たちのそれに比較すると、そこには矢張り、種々の相異や懸隔が窺われる。しかも、興味のあることは、單に生活條件が變つてきたという理由からだけでなく、その感情や心理や氣分にも、明治年代の女性に見られない一面が形成されつつあるように考えられる。

それは、生活に對する考え方や、判断の仕方が違つてきていることを意味する譯だが、事實、物事に對する處理の仕方にも、女の立場からの自覺が、一そう強く意識されていて、「虞美人草」の藤尾や、「浮雲^{*}」のお勢が執つたような、あの教養を鼻にかけて、お高く取澄ます態度などは、些かも見受けられない。戀愛感情にも、透谷に代表されたあの浪漫性は全くなくなり、娘である自分が、妻である自分が、母である自分が、それぞれ功利的に女 立場から反省され初めてきたことは注目に値する。

言うまでもなくこれは、庶民生活がより社会的な性質を帯びてきたことを意味するし、また作家自身が、庶民の日常や心理に、人間的な感動を示し初めたことの反證とも考えられる。

* 「浮雲」(二葉亭四迷)は、わが國の寫實主義作家の先驅として有名である。ここに現われるお勢は、近代的な思潮の風俗に憧れる女性として母親と對立的に描かれている。

「浮雲」は、文三という主人公のインテリ的な實行力の弱さや、意識過剰を描いたものだが、お勢も、開化期の尖端を泳ぐ潑刺たる女性としてあらわれる。しかし、やはり當時の思潮に感染されただけの本當の自覺がないから、何かと教養を鼻にかけて、流行にかぶれた姿であらわれる。例えば、親より大切なものがある、それは「人じゃないの。アノ眞理」などと嘯く風に描かれている。しかし、明治の尖端を走つた女性の、文學的反映として、見直し難いものであることは疑いない。

また、大正期に這入る頃から國民生活の構造も、日露戦争を一の階梯として新しく形成されつつあつたことも事實なのである。大正三年の日獨宣戰の布告は、斯かるさ中に降懸つてきた歐洲戰亂の餘波でもあつた。もちろん日獨戦争とは云つても、青島攻撃だけの戰であつてみれば、日露戦争當時のような衝撃や緊張は、國民に與えなかつたかも知れぬが、それにしても、他の交戰國と違つて、經濟關係に大きい變動が齎されたことは事實であらう。いわゆる船成金や鐵成金の簇生がそれである。

國家經濟の膨脹時代として、大正六年から八年へかけての社會情勢は、全く過去に見出し難い社會現象を現出するに至つた。鑛山と一部重工業の他に、あまり大規模な組織をもたなかつた當時の一般産業も、金融關係の活潑な動きに伴れて、組織化された工場や、會社を陸續と生み初めた。高度の技術と、強力な生産力とが慌しく要望されてきた。交通機關の完備に隨つて、貿易方面も一そう殷賑し、國際關係も新しい段階に立たされたのである。

女性の職業戰線への進出は、こうした一般情勢の機運に促されて、初めて顯著な展開を示すようになったのである。水上瀧太郎の諸作に描かれる女事務員たちの生活は、この時代の女性の自覺を反映している點で、また自覺した女性が經濟的に獨立することが如何に困難であるかを物語つている點で、一定の生活層に生きる女の相貌を見事に活寫している。「律子と瑞枝」は、この間の消息を伝える傑れた作品の一つであることに疑いはあるまい。

2。

律子と瑞枝は同じ下宿に寝起きしながら會社に勤めていたが、律子が病氣で床に臥すようになってから、瑞枝は収入の多い別の會社へ住みかえて律子の醫者代やら下宿の拂いを援助している

が、金の要るところから男の誘惑にするすると引込まれ、酒臭い息を吐きながら夜更けになつて戻ることもあるようになる。人が變つたようにけばけばしい化粧や装いを好むようになった瑞枝を見て、律子姉弟は心を痛めるが、依然として瑞枝は改める風もない。

そうこうするうちに、律子は病氣缺勤のゆえで、會社を解雇される。収入の途を断られた律子は、體がもとに恢復するのを待つて懸命に就職口を捜すが、求人廣告を出している會社は、どれもこれもがインチキ會社ばかりで、なかなか適当な勤先がない。そんな折、自動車の事故に遭つて瑞枝が負傷する。律子は弟と協力して入院料を工面するが、傷が癒えて瑞枝が下宿に歸つて来る頃になつても、律子の就職は決まらない。下宿の主婦は滞つている下宿代を口積く請求する。しかし、年のゆかない賢一（律子の弟）の収入ではどうにもならない。

たまたま、以前勤めていた會社の上役の竹村という男が訪ねて来る。竹村は獨身で、前から律子を妻に欲しがつていた男である。好かぬ男ではあるが、事情が事情ゆえ、律子は竹村に金の無心を頼んでみる。すると彼は、承諾する代りに結婚してはくれないかと言うのである。だが律子は結婚は厭だという。お金も拜借するだけで結構だという。

律子 第一あたたくしは、あなたに對して少しも戀を感じてはおりませんの。たゞとりひきを致

そうかと思ひましてねえ。

竹村 冗談はよしましょう。僕は實際眞剣であなたに結婚を申込んだのですから、

律子 あたしこそ眞剣なのです。

竹村 今のお話はお話として、僕は決して代償を求めようとは思いません。しかし、兎に角金策して見ましよう。出来るか出来ないか、いずれあらためて伺います。

こうして竹村はすぐすど歸つて行つたが、今まで律子の病床を見舞つた折、金が入用なら用立てたい旨を何度か話したにも拘らず、一度として彼女は、その好意を受けようとしたことはない。彼にしてみれば、むしろ彼女の頑さを腹立たしく思つていたのであるが、その律子が金の代償に體を提供しようと言うのである。陰で聽いていた瑞枝も、律子の日常や性格を知つているだけに、ちよつと驚かされたが、やはり本心から言つたのではあるまいと思つた。五百圓だの千圓などという金が、一介のサラリーマンにとつて、どのくらい大きい負擔になるか位は知らぬことはない。それを平氣で口にするのは、要するに追返したい腹なのだ。瑞枝はそう考えて「あんな事いつて追拂われては堪らないわね」と笑つたが、律子は追拂うつもりで言つたのではないという。「あなた、ほんとに自分をくれてやろうかと思つたの——でも、女には體の外に提供するものは何もな

いのだから——腕力があれば土方にもなれるけれど、あたし達では駄目だし、あたし達の持つて
いる才能なら、男の方が餘計もつてに違いない。どうしても切羽つまつた場合に、女がお金を
得る道は他にはないのですから——。」こうして彼女は、瑞枝が曾つて落込んだと同様の経路に、
やがて自分も落ち込むであろうことを感ずる。

社會的に酬いられることの少い女性の不利な立場から脱れるためには、女は、それが有ること
で美しいとも言われてきた自然的素質や生命の誇りを、感謝されることもなく捨て去らねばなら
なかつたのである。男が喜んだと同じ生の喜びを享受するためには、女は、美德とされる肉體の
純潔や精神的誇りをも犠牲に供しなければならなかつたのである。それが證據には、男に讃えら
れてきた女の傳説には、財産と家系を重んじる男の社會に讃えられてきた女の傳説には、命を賭
けて肉體の純潔を護り續けた健氣な女の意味が語り傳えられているのではないか。

3。

家族というものが父權とともに形成され始めた抑よの昔から、詳しく言うならば、人類が初め
て經濟生活を營んだ原始共同體の時代が崩壊し始めた當初から、女の獨立は、社會的にも經濟的

にも天上の理想として押退けられていた有様である。それは古代から中世へ、中世から嚙て近世
へと、歴史變遷の過程に沿つて社會的には變化を遂げてきたけれど、しかし、依然として男の支
配を却けるほどの強固な生活地盤を與えられていなかつたのは事實である。

日本における女の生活の變遷過程にも、それは特徴的な相すがたで描かれている。天真な心で生活を
愉しんだ萬葉時代以後、女性たちは、社會的にも道德的にも重くるしい様々な制約を受け、その
伸び／＼とした自然性の發露にも或る種の絆を受けてきた。佛教や儒教が渡來した頃から、三界
とか三從の教えが傳わり、道德的にも女は、そうした忍苦の面へ背を向けて生きることが許されな
くなつた。訓えに従つて生きる女たちの暗い面貌は、江戸時代の庶民文學にも反映し、「心中天の
綱島」(近松)の小春のような女性ともなつて、われわれの悲痛を焚附けるのである。だが、これ
は明治期の小説にも、この種の女性は描かれている。たとえば、樋口一葉や尾崎紅葉の諸作に描
かれる女性がそうであり、徳富蘆花の「不如歸」にしても、泉鏡花の「婦系圖」、岩野泡鳴の「毒
藥女」、二葉亭四迷の「其面影」など總べてに、また、いわゆる「新しい型」の女の典型として描か
れた「虞美人草」の藤尾にしても、「煤煙」の朋子にしても、いずれも女であることの誇りを失う
という側面で、美しく亡びた女性たちである。

彼女らの弱さを、あるものは氣質や性格の故だとも言つてゐる。たしかに、氣質や性格もある

だろう。が、しかし、そのような氣質や性格を、一そう固定させ、人生的信條にまで育んでいつた境遇なり社會環境というものは、一體いかなる繋がりて説明されたいのであろう。

言うまでもなく人間は、與えられた境遇なり社會的環境なりを、それぞれの生き方で生きていく。こうした一人一人の生き方は、氣質や性格の違いで、それぞれに異なっているし、また才能や個性の相異が同一ではない。同一ではないけれど、しかし、一人の人間の歴史に照し合せても分るように、單なる性格が、その人間の生涯を先天的に約束してゆくものでないことは事實であらう。同時に又、境遇なり環境なりが、個々の人生や運命を絶對的に決定するものでないことも明らかである。しかし多くの人は、どうせ俺はこんな性格なのだ、とも言うし、また、自分はこんな性格になつて了つたとも言ふのである。

この二様の言葉には興味ふかい内容が含まれている。と云うのは、前者は性格を先天的のものとして宿命的に考へているし、後者は、環境が人間の性格を變へてしまつたという風に解釋されているからである。

つまり、前者にとつては性格は生れ具つたもの、變らないもの、という風に考へられているのに反し、後者は、性格は境遇によつて變り得るもの、動くもの、という風に考へられている譯である。しかし、いずれも一方的な解釋に終つてゐることは争ひ難く思われる。何故ならば先、

天的なもの、宿命的なものとして運命づけてゐる時には、彼はその性格が環境と觸れ合うことによつて生ずる人生的な面を忘れてゐるか、さもなければ氣附かずにゐるからである。すると性格と運命との闘争は、つまり、運命を切拓くという自發的な努力は、意味を喪つてしまふ譯になる。

また、自分はこんな性格になつてしまつたと言つて、環境が人間の性格を變へるものだと言張する側の場合は、性格は變り得る、という面だけが取上げられて、外側の及ぼす影響だけを問題にして、外側の力に向つて闘う自分の内側の意志や努力は見落されてゐる。これは性格と運命というものの關係が、一方的に取上げられた場合に出てくる結論である。して見ると、もともとどんな性格なのだと言葉も、こんな性格になつてしまつたと言葉も、生きる過程で築かれてきた人間の側面であることに疑いはない。だがそれだけでは、人生内容として現實的に何らの解決も與えられないであらう。何故ならば、そこには人間の努力が何一つ現實との觸れ合いの面で闘われていないのだから。

従つて、もともとどんな性格だと言つて人生を諦めたり、こんな性格になつてしまつたと言つて、不幸な境遇を環境に擦りつけてゐる間は、現實としては何らの解決も與えられないものでない。つまりそこでは、人間の主體が問題なのだ。おのれの意志や努力によつて、先天的であるものを克服し、また環境からの悪しき力をも内側の努力によつて變革する。人間の生活に對する能動性

とは、要するに、人間自身の主體的行爲を云うのである。だから性格と運命の闘いは、宿命としてではなく、生活の飛躍として考えられねばならぬのではあるまいか。

長い年代に互つて、運命という言葉が人生に大きな力をもつてきたのは、人間がおのれの力に恃み得ないで、環境に従順であつたところから生じたのであろう。してみると、多くの小説に映つた女性たちの亡びの人生とは、生きる意志弱きが故の諦めではなかつたか。

明治期の小説に描かれた女性に比較して、「律子と瑞枝」の主人公律子は、生活に對する自信と、人生や戀愛に對する自覺といい、明治年代の女性に見られない確固とした意志をもつ女ではあるが、經濟的に獨立することが困難なところから、知らず識らず環境に負かされてゆく。女の自活が、なぜ困難であるかを考え、次のように彼女は語っている。「腕力があれば土方にもなれるけれど、あたし達では駄目だし、あたし達の持つてゐる才能なら、男の方が餘計もつてゐるに違ひない」と。

この言葉は、女自身の傳統的弱點を告白してゐるばかりでなく、當時の經濟關係が、女性の勞働力をそれほど必要としない段階に在つたことを物語つてゐる。そして、「切羽詰つた場合に、女がお金を得る道は、體を提供する以外に何もない」という告白を考え合わせれば、當時の女性たちに興えられた生活面の狭さが如實に窺われるではないか。しかも、その自覺や認識において、

過去のどの作品にも容易に見出し難いほど思慮ふかく行動する律子が、それを告白してゐるのである。

こうした決意にまで彼女を導いた経路には、絶えず不安定だつた當時の庶民生活と、俸給生活者の弱い心理が語られている。とくに、歐洲戰亂の餘得で著しく財界の賑わつた大正六七年の好況時代において、そうだつたことを考えると、女の不幸と云うものが暗示ぶかく思われるのではないか。

4。

大正期の中葉は、一夜成金の輩出した好況時代として特徴的であるばかりでなく、國民思想の變遷の甚しかつた年代として、また意味ふかい一時期でもあつた。五六年の頃、兆候を示した急進思想が、二三年後には大旋風の如く當時の知識人を捲き込んで、いわゆる思想混亂の時代を現出したのである。世界大戰によつて招來された左翼思想などが、模倣的にわが國土をも襲つて、國民の間に陰鬱な思想的悩みや軋轢を生んだのもこの時期である。

思潮の動きからいつても、明治期のそれとは著しい懸隔が示されている。前者が舊時代の道徳

や意識からの離脱に苦しんだのに比べて、後者は、社会的な立場から人間生活と生活の条件とを探ろうとしている。思想的にも経済的にも、とにかく慌だしい空気の充満した時代であることは事實であろう。

直接には、男の手によつて装いを變えてゆく社會生活ではあつても、激動する生活の波間には、やはり女の生活が浮標のごとく漂つてゐる。緊迫した社會生活の波浪に採まれながら夭折する若く美しい浮標の一つに、「眞珠夫人」の瑠璃子がある。

「記憶のよい讀者は、去年の二科會に展覽された「眞珠夫人」と題した肖像畫が、秋の季節を通じての傑作として、美術批評家達の讚辭を浴びたことを記憶してゐるだろう。それは、清麗高雅、眞珠のごとき美貌をもつた若き夫人の立姿であつた。而も、この肖像畫の成功は、その顔に巧に現された自覺した近代的女性に特有な、理智的な、精神的な表情の輝きであると云われていた」と作者も附記してゐるように、「眞珠夫人」の瑠璃子は、聰明並びなき美しき女性である。しかし、このように理智と天稟とに恵まれた彼女が、何故に、その生涯を通じて忘れることの出来なかつた戀人をも棄て、また自分の誇りをも棄てて、親と子ほども年の違ふ男の許に嫁びて行かねばならなかつたか。ここに彼女の性格的な破綻があつたのである。

瑠璃子は、單に教養ある女性というだけでなく、女の誇りに對しても強い自覺と信條とを持つ

てゐる。この事は、未亡人になつてからの彼女の行動にあらわれてゐるばかりでなく、莊田勝平に嫁びて行く時の動機にも窺われるし、結婚生活のなかにも露骨に示されている。

莊田勝平は、謂ふところの一夜成金である。機微に鋭い彼は、歐洲動亂が始まるや、早速才覺を廻らして巧に遊きまわり、一躍して千萬銀を積み上げる。つい、三四年前まで、徹徹たる一貿易商であつた彼は、金が出来るに隨つて、自分の世界がだん／＼擴がつてゆくを感じる。今迄は「其處にいるか」とも聲をかけてくれなかつた人々が、何時の間にか、自分の周圍に集まつて来る。近づき難いと思つていた一流の實業家や政治家たちが、何時の間にか、自分と同じ食卓につき、自分を招待したり、されたりするようになる。その他、彼の金力が物を言うところは到處にあつた。綠酒紅燈の巷でも、彼は自分の金の力が萬能であるのを知つた。彼は、凡てが金の力だと思つた。金の力さえあれば、どんな事でも不可能ではないと考へた。彼にとつて、金力は唯一の信仰であつた。

だが、たまたま園遊會を催したとき、招待者のなかに自分を罵倒する人間がいた。しかも、それが自分の子供にも等しい學生服の男と若い娘である。彼は、信仰を踏み躪られた憤りと口惜しさに顫えながら、金の力が人間にとつて、どれほど怖ろしいものであるかを知らしめてやろうと決意する。若い男とは杉野直也であり、娘は、女主人公の瑠璃子である。

勝平は、その青年が自分の邸へ出入りする杉野子爵の息子であることが分ると、早速杉野を介して、瑠璃子を妻に欲しいと申込むが、彼女の父から言下に断られ、仕方なく今度は瑠璃子の父の借用証文を一手に蒐めようと畫策する。貴族院の副將として知られた唐澤男爵は、その長い政治生活ですつかり財を失い、抵當に這入っている邸で、つましく瑠璃子と暮らしていたのだが、莊田から手厳しい借金の催促を受けて、ますます苦境に陥る。だが莊田は借金の催促だけでは嫌らず、唐澤が會つて法相の椅子を占めていた頃、秘書官として仕えた木下某を使つて軸物の鑑定を求めさせる。唐澤は、木下ごときが「夏珪」の眞物を持つてゐる筈がないと思ひ、見せすに持つて歸つたが、いと勸めるが、たつて懇望するので置いて行かせる。彼が歸つたあと、それとなく軸物を見ると、贋物どころか夏珪のものの中でも逸品と思われる畫幅である。苦境に陥つてゐる矢先のこととて、ふらふらと金に代える氣になり、瑠璃子の眼を盗んで持出す。だが莊田から告訴されるに及んで、初めて謀られたことを知り、憤りと自責から自殺を企てるが、瑠璃子に遮られて未遂に了る。

自分ら親子に對する莊田の惡どい報復手段に堪えかね、彼女は自分から進んで莊田の妻になることを承諾する。瑠璃子の申出を聞いて老男爵は半ばは驚き、半ばは怒りもしたが、彼女は初めの決意をどうしても譲えそうとはしない。

「親の難儀を救うために子が犠牲になる。親の難儀を救うために、娘が身賣をする。そんな道徳は、古い昔の、封建時代の道徳ではないか。お前が、そんな馬鹿なことを考える。聰明なお前が、そんな馬鹿なことを考える。お父様を救おうとして、お前があんな豚のような男に身を委す。考へるだけでも汚らしいことだ！ お前を犠牲にして、自分の難儀を助かるうなどと、そんなさもないことを考へる父だと思ふのか。」

老男爵はそう言つて難詰するが、彼女は、お父様の身代りになると云うような消極的な動機からではないという。自分は、法律の網を潜るばかりでなく法律を道具に使つて善人を陥れようとする悪魔を、法律に代つて罰してやるのだと云う。一家が受けた迫害に復讐するだけでなく、社會のために、人間全體のために、法律が罰し得ない悪魔を罰してやろうと思ふのだという。すると父は、お前の動機はそれでもいい。だがあの男と結婚することが、どうしてあの男を罰することになるのだ。どうして一家が受けた迫害を復讐することになるのだ、と云う。彼女は冷やかに答へた。

「結婚は手段です。あの男に對する刑罰と復讐とが、それに續くのです」
かくて彼女は、父の止めるのも聞き容れず莊田と結婚するのである。

莊田との結婚が新聞に報道されると、第二の小森幸子事件として、喧しい紛議が騒然と起つた。

小森幸子事件というのは、大正の初めに、時の宮内大臣中田伯が、還暦を過ぎた老體で、まだ二十を過ぎたばかりの處女と——爵位と權勢に憧れる虛榮の女と婚約したために、一世の激しい指弾と抗議とを招いた事件である。

莊田勝平は、當時の中田伯よりは若かつたには違いないが、年の開きは、やはり争えなかつた。従つて世情は、様々な物議を生んで、或る新聞の如きは、華族の墮落だと結論していた。だが瑠璃子は、取沙汰が激しければ激しいだけ、決意の躰を固めるのである。

彼女は、こうして莊田と結婚生活に這入つたが、果して刑罰と復讐とを、それに續けて行なつたであらうか。彼女は、先ず勝平から肌と黒髪を守ろうとした。結婚生活において、女の肉體に觸れ得ない男の苦痛が、どれほど大きいかは想像に難くない。彼は悶え苦しむに違いない。自分のものになつたと思ふ女から一切を拒まれることが、男にとつて此の上もない侮辱であることを憤るに違いない。次には勝平の息子で、二十三になる白痴と特別親しく交るのはどうか。不満に苛立つている彼は、必ず嫉妬を燃やし、憎惡の齒ぎしりを募らせるに違いない。こうした苦痛を経ることによつて、彼は、やがて精神的に破滅するだろう。

瑠璃子は、焦らずにそれをした。彼女の企ては豫定どおりに勝平を苦しめた。殊に、白痴の伴と親しくされることは、勝平にとつて我慢がならなかつた。彼は口實を設けて瑠璃子を別荘に誘

つた。

嵐の強い夜である。初めて親しい言葉をかけられた勝平は、酒の力を借りて彼女を征服しようとするが、不意の闖入者のために妨げられ、却つて命を喪う結果となる。勝平を死に導いたものは、二人の跡を追つて來た、白痴の伴勝彦である。勝平の死は、瑠璃子の生活を轉換させた。形式だけの結婚生活ではあつたが、やはり結婚の形式のなかに、妻としての形式も自から定められていて、彼女の意志にも或る種の制限が加えられていたのは事實だが、夫の死と共にその形式は消滅した。

彼女は、自分から求めて様々な男に接近していつた。戀愛を享樂しようと考えた。男たちもまた、美貌と才能とに恵まれた瑠璃子の周圍に群がり集まつて來た。こうして、彼女の放恣な生活が始まるのだが、たまたま、彼女に失戀した青木という學生の死に絡まつて、渥美という正義感の強い男が彼女の面前に現われ、不倫の行狀や行爲を難詰する。すると彼女は、女が社會から受けている道徳律の不當さを、次のように憤つて言うのである。

「女性が男性を弄ぶと貴方がた男性は、直ぐ妖婦だとか毒婦だとか、有らん限りの惡名を浴びせ掛ける。貴方などは、眼の色を変えてまで叱責なさろうとする。が、御覽なさい！ 世間の男性がどんなに、女性を弄んでいるかを。女性が男性を弄ぶに致しましたところで、それは男性の浮

動し易い心を、弄ぶに過ぎないじゃありませんか。男性が女性を弄ぶ場合は、心も肉體も、名譽も節操も蹂躪し盡すじやありませんか。眼にこそ見えませんが、この世界には、男性に弄ばれた女性の生きた惨たらしい死骸が、幾つ轉がつているか分りません——」彼女は更に續ける。「人が虎を殺すと狩獵といい、紳士的な高尚な娯樂としながら、虎がたま／＼人を殺すと、強暴とか残酷とか凡ゆる悪名を負わせるのは、人間の得手勝手です。我儘です。丁度それと同じように、男性が女性を弄ぶことを當然な普通なことになら、社會的にも妾だとか藝妓だとか、娼婦だとか女優だとか、弄ぶための特殊な女性を作りながら、反對に偶々一人か二人の女性が男性を弄ぶと、妖婦だとか毒婦だとか、凡ゆる悪名を負わせようとする。それは男性の得手勝手です。我儘です。妾はそうした男性の我儘に、一身を賭して反抗してやろうと思つています——」

こうして彼女は、男の作つた道徳と倫理に、その若き肉體と感情とを賭けて闘おうとしたのであるが、不幸にも、失戀した男の手にかかつて仆れる。

5。

以上は、「眞珠夫人」の梗概であるが、ここで見るように、瑠璃子という女性の相貌には、確か

に前代の小説に見ることの出来ない強い女の自覺が示されている。例えば、自分の行動に對する責任を、飽くまでも自分で負おうとする點において、男との對等感において、戀愛感情において、また女の立場や生活が、社會的には如何なる状態に置かれているかを思慮ぶかく省察している點において、確かに、稀有な認識に立つて人生と生活とを考えようとする女性の一人であつたことは事實である。

云うまでもなく彼女は、恵まれた環境に育ち、恵まれた趣味と教養とを身に著けることの出來た女性である。この點では、當時の女性が知り得る最高の學問と知識を具えた女性だといふことが出来る。だからして、結婚や性道徳に對する判斷にも、庶民生活のなかに育つた女性の倫理とは違つた自覺が、つまり教養からくる自覺が、自から具わつていたことは事實であらう。しかし、一面から言えば、この高い教養や學識は、却つて彼女を破滅に導く結果ともなつてゐることは興味がある。何故ならば、第一に彼女は、金の力を輕蔑する。金と云うものの現實的な力がどんなものであるかを念頭にもしていない。これは園遊會に招かれた時、戀人と交す會話にも、はつきり窺える。

「妾、來なければよかつたわ。でも、お父様が一緒に行こう／＼と云つてお勧めになるものですよから」

「僕も妹のお伴で来たのですが、どう混雑しちや厭ですわね。それにこの庭だつて、都下の名園だそうですけども、ちつとも良くないじゃありませんか。少しも自然な素直な所がありません。いやにコセ／＼して、人工的な小細工が多過ぎるじゃありませんか。殊にあの四阿あづまの建て方なんか厭ですわね」

「お金さえかければいいと思つているのでしようか」

「どうせそうでしょう。成金と云つたような連中は、金ということより外には、何にも趣味がないのでしよう。凡ての事を金の物指で計らうとする。金さえ掛ければ、何でもいいのだと考へる。今日の園遊會なんか、一人宛百圓とかを入れるとか何とか云つているそうですが、あの俗悪な趣向を御覽なさい」

「全くですわ。成金とか何とかよく新聞などに、彼等の豪華な生活を謳歌しているようですが、金で鷹ち得る彼等の生活は、どんなに単純で平凡でしょう。金が出来ると、女色を漁る、自動車を買う、家を新築する、分りもしない骨董を買う。それきりですわ。中に、よつほど心掛のいい男が寄附をする。物質上の生活などは、いくら金をかけても、直ぐ盡きると思ひます。」

④ つまり彼女には、金錢で形作る生活が賤しく思われたのである。人間の營みにとつて最も美しいもの、或は豊かなものは精神生活であつて、金錢は、むしろ人間を單純にしたり平凡にしたり、

或は墮落させるのが關の山に思われたのである。彼女には、物質の力よりも、高雅な人格や精神だけが人間生活を築くものでなければならぬと考へられた。従つて、金錢の人間に及ぼす悪い面だけが、ここでは問題にされて、反對に、金錢を媒介として營まれる經濟生活や社會生活と云うものの本體は、深く追求されはしなかつたのである。

こうした考へ方は、ユーヂットにならうとする結婚の動機にも明瞭にあらわれている。ユーヂットとは、むかし猶太のベトウリヤという都市が、ホロフェルネスという恐ろしい敵の猛將に圍まれた時、美しい少女が、ベトウリヤ第一の美しい少女が、侍女をたつた一人連れてきり、羅衣を纏つた美しい姿を虎のようなホロフェルネスの陣營に運び、容色に魅せられた敵將を、圍中でたつた一突きに刺し殺した話の主人公なのである。ベトウリヤの破壊と虐殺とを救うために、おのれの貞操を犠牲にして闘つた美しい少女こそ、他でもないユーヂットだつたのである。

牝獅子の乳で育つた野蠻人の猛將を、細い腕うでで刺し殺した猶太の少女の美しい姿が、彼女には忘れ難く思われていたのであろう。要するに瑠璃子は、こうした美しい人生の世界を、自分で築きたかつたのである。つまり、この人生や社會を、抽象的に割り切ることが美しく思われたのである。だからこそ、金錢の生活は餘りに卑賤に考へられたのだ。何故かなら、金は、餘りにも現實的な力を有つものであつたから。そしてこの觀念を育て上げたものが、恵まれた環境であり、

恵まれた教養や趣味なのであつた。

彼女は、肉體を守ることと結婚生活を回避したと思つた。戀愛を享樂することと、男性を醜弄したと考へた。自由に振舞つて生きることと、人生に徹したと思つた。しかし、息を引取る瞬間に呼び續けた戀人の直也と添えなかつたという點では、女としての人生を貫けなかつた脱落者の一人ではなかつたか。また本能的に生きることすら出来なかつたという點では、彼女の觀念は、彼女にとつて、まことに不幸な毒素でもあつた譯である。かくて最も自覺したと思われる聰明な一人の女性瑠璃子は、女の眞實の途に生きることとも出来ずして敗れ去るのである。

多くの女のために、女の不幸な立場のために、男の作つた道徳と社會惡とを破ろうとして、敢然と立向つた彼女ではあるが、こうした女の意志に振向こうともせずには現實は狂わしく飄轉を續け、その荒い波頭のなかに、女の魂と肉體とを没し去るのである。一夜或金の輩出した時代の悲劇として、教養ある女性の辿つた生涯が、ここでは痛ましい時代性格として反映されている。

Ⅰ 生活の慧智と悦び

1。

「眞珠夫人」の瑠璃子が、小説の上で仆された時期に前後して、「青椿」の後身とも云うべき「新夫人協會」が、平塚明子や市川房枝らの手によつて起された。

「原始太陽は女性であつた」という勇敢な闘いの叫びを宣言して、人間的な目覺めに奮い立つた嘗ての女性たちは、家庭を持ち、愛兒を得て、世智辛い實生活の波を潜るうちに、何時か解放という言葉を使わなくなり、か細い聲で母性の保護を訴える始末であつたが、十年の歳月を隔てたこの大正八年には、「新婦人協會」の名の許に、ようやく復活の運びに到つた有様である。

しかし、復活はしたけれども、新婦人協會の手で獲得した權利と云えば、治安警察法第五條の、「女子は政談集會に會同し、其發起者たることを得ず」という條文の修正を可能ならしめた位のものであつて、花柳病に對する結婚制限や、母體の擁護のための拒婚運動などは、仰々しい請願理由書を作成して運動したにも拘らず、ついに議會（第四十二、三の兩議會）を通すことも

出来や立消えとなつてしまつた。

尤も、この他にも、女子大學や女高師の教授などを中心にした「世帯の會」と云うような、生活改善を目的とした運動はあるにはあつたが、世人の關心を聚めるような成果を、何一つ残さず存在を喪つた。

このように、一部知識人の間には、女の生活と立場とが社會問題として重要視され初めていたことは事實である。しかし、こうした風潮は、當時の女性一般の生活心理とは酷く掛離れていた。と云うのは、この種の運動が、單に一部知識層の女性たちへのみ必要な問題であつて、肝腎の、働くことなしには生活というものを口にする必要のない一般の女性たちには、直接必要と思われない性質の問題だつたからである。従つて、これらの婦人運動は、眞に庶民生活の幸福と擁護のための運動となることは出来ずして、僅かに、それを口にしなければ寂しくて遣りきれぬ人達の趣向を満足させたに過ぎなかつたとも言える。

この事は、庶民生活を描いた幾つかの小説に登場する女主人公たちの心理に徴しても、はつきり頷ける事柄だと思われる。例えば徳田秋聲の「あらくれ」に描かれるお島という女性などの場合がそうである。

彼女は、生活に負けない女である。自分から男を棄てても平氣で獨立の出来るしつかりした氣

魄の持主である。

七つの時に養女として貰われてゆき、養親やしんから入婿の話の出る年頃まで、商賣の紙漉を手傳つたり、野良にも出たりして不自由なく育てられたお島は、作男としてその家に長く働いている養父の甥に當る作太郎という薄野呂の男を婿に選ぶらしい親の意向を耳にすると、養家の身代など目もくれずに、きつぱりと斷ろうと考える。だが養父母は、執拗に彼女を説いて作太郎を勧める。お島はその度に、實家へ歸つては不貞腐れて幾晩も泊つて來るのであるが、たまたま養母の知合の醫者に年頃の弟があつて、それならばどうかという話が出た時には、初めてほつとした氣持で返事をするのである。

しかし、いよ／＼婚禮の夜になつて、夫となる花婿が、自分の知つている町醫者の弟でないことが判ると、彼女は、前後も考えずに家を飛出す。肩すかしを食わされた養家の親たちは、お島の實家へ何度となく出掛けて連戻せうとするが、彼女は従おうとはしなかつた。

作のところへ歸る位なら、死んだがましと考えていたお島は、再び甘言に誘われはしなかつたが、翌年の春になつて或る鐘詰屋へ嫁入ることになると、「天性の反抗心から、傍で強い附けようとしているようなこの縁談について、結婚を目の前に控えている多くの女のように、素直な満足と喜悅に和らぎ浸ることは出来なかつた」と作者も書いてある通り、彼女の氣質は、間男を持つ

ことを恥ともしないような養母の傍らで、物事を素直に悦んだり悲しんだりすることの出来ない女として育てられていたのである。

これは終生を通じて、いつも、彼女を危険から救っている強靱な性格でもあつた。彼女は、初めて嫁かづいた雑詰屋の鶴さんと別れ話が持上つた時にも、決して悲しんだり歎いたりはしなかつた。

唾み合いこそすれ、夫婦は夫婦だと信じ込んでいるお島の姉は、甲斐々々しく立働く彼女を眺めて「能く思い切れた」と感心する。しかし、お島は笑つて言うのである。

「藝者や女郎じゃあるまいし、いつ迄くよくよしていたつて仕方がないでしょう。私はあんなへな／＼した男は大嫌いです——」

こうして彼女は、一年足らずの鶴さんとの夫婦暮しに嘗めさせられた、甘いとも苦いとも解らないような苦しい生活のいざこざから遁れて、どこまで弾むか知れないような體を、荒い仕事をするので楽しませているのである。だが子供のないお島は、間もなく獨り暮しをしている伯母の許へ體を預け、裁縫の手助けなどして暮していたが、たまたまその家へ出入りする小野田という若い裁縫師と親しくなつたことから、初めて自分自身の心と力を打籠めて働けるような仕事に取附こうと思ひ立つのである。

それは、丁度その頃はじまつた外國との戦争（歐洲戦争）が、色々の仕事を供給している最中だつたからでもあるが、一つには、自分の仕事に思うさま働いてみたい——盲動と屈從を強いられて来たこれまでの境界から脱けるためにも、自分自身の力で出来る仕事を、思うさま仕遂げてみたいと考へたのである。

小野田の持つてくる仕事は、寒さを目先にした戦地にいる軍人の防寒外套の類や帽子であつた。彼女は、精一杯の働きをした。

「平氣で日に二圓ばかりの働きをするお島の帯の間の財布の中には、いつも、自分の指先から産み出した金がざくざくしていた」と作者も書いているように、彼女は疲れと倦むことを忘れて働いた。

しかし、それだけの働きで満足できなかった彼女は、ときどき納品にゆく被服廠の役員に、洋服屋になつてはと褒められてその氣になり、資本を工面して小野田と洋服屋を始める。ミシンや裁板を据えつけて職人も搜し、小僧も集めて店は出したが、結果は思わしくなかつた。二人は轉と住居を變えた。或るときは上海に渡ろうともしたし、また郷里の土地を分けて貰つて、それを金に代えようとも考へた。だがどれも思わしくなく、東京へ舞戻つて店を出したが、結果は同じであつた。しかし、彼女は怯まずに店を續けた。

都合のいい条件ばかりである。生活の安定を得るために、男から男へ移つていつた女は昔から算えきれない。だが、おのれの力を信頼して自らの信念によつて生き抜こうと努力した女性は稀である。「律子と瑞枝」に描かれる律子も、確かに眞剣な態度で生活に立向つてはいる。だが、どんづまりの境遇に直面した時、「切羽詰つた場合に女がお金を得る途は、體を提供する以外に何もなし」と言つて、自分の弱點を自分から、女の弱點として諦めているのに較べれば、お島は遙かに、生活の努力にひたむきであり、運命の自主的な開拓者である。

同じ混亂の時代に生きた女性として、「眞珠夫人」の瑠璃子と「あらくれ」のお島とを比較すると、そこには、一定の生活層に生きた女性の相貌が窺われる。共に、自分の信條に従つて生きた女性ではあるが、この二つの女性像には、鋭く異なる側面が附着して、單に性格の違いというには、餘りにも意味が過剰しているように思われる。何故ならば、前者は教養や學識の點で優れているにも拘らず、現實との闘いで敗れているのに反し、後者は、特別の學問や才能がないにも拘らず、生活そのものに負けないだけでなく、女としての人生の眞實に打克つている。

たしかに、瑠璃子も人生を諦めてはいなかつた。心を偽つて結婚した時も、未亡人となつてからの空白な生活を送る時も、運命的に自分の人生を考えるような事はしなかつた。が、たつた一つの希いとして、その若い肉體と魂とを賭けて闘おうとした男性への抗議が、喪つた自分の生命

の悦びや誇りにも代え得るほど、現實的に果し得られたであろうか。決して果されはしなかつたのである。一人の男性の感情を弄ぶことは出来たかも知れないが、男の道徳や既成觀念には傷一つ與えることは出来なかつたのである。して見ると、中つたと思つた彈は、思つただけで相手を仆してはいなかつたのだ。彼女が眞實と考へて行なつた道は、結果としては、このような觀念の遊戯に過ぎなかつたのである。

◎ お島はどうか。彼女は、觀念的に自分の人生や生活を設計しようとしなかつた。自分の置かれている境遇をはつきりと知つていた。そして、その境遇に繋がつた世界だけを誤りなく生きようと努めた。質素な望みではあつたが、しかし、それは生活に深く根をおろした者のみの有つ信條であつた。彼女は、自分の生活が空想や飛躍に充たされたものでないことを知つていた。知つていればこそ、働くことによつて、運命と人生とを探り當てようとしたのである。

特別の教養や學問を有たなかつた彼女は、人生を具體的に體驗することによつて、事物に對する判断や評價の能力を鍛へることが出来た。それは必然的に、彼女の觀念を現實的なものにし、その思考感情をも、太く逞しいものに仕上げた。環境の條件と、彼女自身の有つ斯うした諸條件とが混り合うことによつて、お島の間像は出来上るのであるが、瑠璃子との相違は、やはり、單に生活能力の點だけでなく、こうした思考感情にも著しい不一致があつたのである。この二つ

の女性像にあらわれている相違は、第一次歐洲戰爭當時の、日本の知識層と庶民階層に生きた女性の相貌として、興味ある對照を示している。

もちろん、この二つの女性像にあらわれた生活態度や心理傾向をもつて、この時期の女の生體を代表させることは出来ないが、とにかく或る生活層に生きた女性たちの特色を傳えていることは事實であろう。言うまでもなくこの時期は、歐洲戰亂の影響から國內機構にも劇しい變化が見えていた。世相は慌しく動き、人心も頹廢へと下降していた。一般的に好況時代と云われているが、思想的に心理的に混亂した時代だったのである。

3。

こうした風潮を物語るように、享樂機關は俄に殖え、カフェーや踊り場が到る處に出來、酌婦、ならざる女給が、重役やサラリーマンを相手にするようになった。男たちの斯うした頹廢的な氣分は、女の世界にも反映し、お島とは違つた型の女たちが、巷にどつさり登場してきた。永井荷風の「つゆのあとさき」に描かれる君江などは、こうした女性の一面を最もよく傳えている女である。

彼女は、氣の進まない縁談を振切つて上京し、小學校の友達で、今では人の妾になつてゐる京子という藝者あがりの女の許に寄寓するが、京子の旦那が會社の金を費消したことから檢事局へ送られることになり、その結果京子は、藝者をしてゐる時分のお馴染を家に引張つてきたり、待合に誘つたりして暮すようになるが、一つの家に寝起きする君江も、京子が楽しんでゐるそうした生活へ引込まれてゆき、果は藝者にまで成らうと考える。だが、藝者になるためには鑑札が必要。鑑札は實家へ問合せた上でなければ、警察から交付されない。詮方なく、彼女は女給になる。

京子と別れて下宿住居をするようになって、君江の生活は、一そう深刻に墮落してゆく。郷里へ金を送る必要もない彼女は、別段小遣といつて要る譯もなく、ただ衣類に身の廻りの品だけだが、それは店の収入で間に合う。従つて彼女は、特別、男から金を貰おうとも考えなかつた。氣の赴くままに身を委せてゆけば良かったのである。

彼女の周圍には、色々な種類の男が、次々と接近してきた。彼女は、近附いて來る男が、年寄であらうと、醜い男であらうと、その時の氣分に應じて考慮しなかつた。或る時は藝術家と、或る時は會社員と、また或る時は得體の知れぬ老人とも出かけた。

「お前のお蔭で俺も色々な事を経験するよ。六十になつて、ベンチで女を待ち合すなんて、實に我ながら意想外だ」

連れ立つた男からそんな風に述べられても、彼女は、特別に感動もしなかつた。荒んだ生活であることを反省もしなかつたし、深入つてゆく自分を、危険とも考えなかつたのである。全く自己放心の世界である。こうした彼女の生活態度は、京子の家へよく出入りした昔馴染の男と會つたとき交す會話などに、最もよく現れている。

「諏訪町の二階では實に色々な事をしたね。兎に角お前と京子とは實にいい相棒だよ。僕は晝間眞面目な仕事をしている最中でも、ふいと妙な事を考えだすと、すぐにお前のことを思い出す。それから京子の事を思い出して、夢でも見ているような心持になるんだ」

「それでも京子さんに較べれば、わたしの方がまだ健全だわね」

「どつちとも云えない。お前の方が見かけが素人らしく見えるだけ罪が深いよ。カフェーへ行つてから別に變つたのも出来ないかね」

「銀座はあんまり評判になるから、そう思うようにはやれないわ。そこへ行くと藝者の方が大ぴらで、面倒くさくなくつていいわ。」

ここに窺えるように、君江の生活態度には、反省もなければ抑制もない。有るものは、ただ、生きることを享樂の手段と考えるような、痺れた腦細胞の機能だけである。

ここには、廣津和郎の「女給」という小説に描かれる千代子という女主人公の如き、生活の苦しみもなければ、人生的悩みもない。また、男のためならば墮落することも厭わない「愛すればこそ」の澄子のような、男に對するひたむきな愛情すら君江は持ち合してはいなかつた。まことに、頽廢の氣分と傾き切つた心理だけが、彼女の生活の本體でもあつたのである。これこそ、世相の變轉に自己意識を呑み込まれ、環境に屈服し果てた人間の相である。

有島武郎の、「或る女」にあらわれる葉子は、それとは氣附かぬながら經濟的據りどころを求め、努めて男から男へと移つてゆく。

近松秋江の、「黒髪」の女主人公お園は、死ぬほど惚れられた男の愛情をも、金錢で推し量つてゐる。ゾラの諸作に描かれる暗黒面の女たちも、一樣に金錢の虜になつてゐる。金錢の價値と魅力は、バルザックの描いたグランデ爺さんによつて、餘りに明確に描かれてはいるけれど、女が經濟生活の面で擇ぶ金錢の途は、それぞれの不幸と弱點とを有つてゐる點で意味ふかく考えられる。しかし、君江の場合は違つてゐる。

* 「或る女」は、有島武郎の傑作の一つである。

「或る女」の才氣煥發な美貌の葉子は、封建的な舊い觀念を蹴つて、奔放に思う儘に戀愛に突進し行

く女性として描かれる。しかし、次第に加わる肉體の衰えのために、男への烈しい嫉妬を感じ、自ら孤獨な寂しさを味い、過去の奔放さを後悔するが如く描かれている。

彼女は、舊い觀念からの脱走を、たゞ男との愛情の自由のなかに求め、愛情を生理的な解放の一面に集中させているが如くに見える。そして、男の隷屬から脱れようとしながら、その基礎となる經濟的な獨立は少しも考えず、愛する男から扶養されることによつて、結局、より墮落した形で縛られてゆくことを感じねばならなくなる。

舊い觀念を脱出するに、全生活の改造を計らなかつたこと、單に男との愛情の受渡しにのみ、自由を楽しんだ果は、結局、求めた自由から逆に縛られる羽目となつた。彼女の如く、解放の全生活的努力に氣附かず、如何に多くの女性が、肉體の放恣な愛の浪費に倒れて行つたことであろう。

現代に、このようなタイプが、教訓として蘇生する要もないのであろうか。

君江は、男との交渉に、物質的な目算もなければ、愛情の計量さえ考えない。僅かに残されているものは、肉慾の生活を樂しもうとする性本能の欲求だけである。ここに彼女の生活態度の特徴は見出せるのであるが、しかし斯うした女の頹廢は、必ずしも君江に限られてはいなかつた。彼女の周圍に多くの男が集まつて來ると同様、隣りの女にも、爛れた生活を追い求める男たちが寄生した。これはその後にも續いた享樂面の常道ではあるけれど、特に、鋭い傾斜を示していた

當時の一般風潮として、見逃し難い心理傾向とも思われる。

ここに、彼女たちの頹廢の社會的根據は見出せるのであるが、しかし、こうした大勢に逆らうことも出來ずして、女の悦びと誇りを、ただ男との經緯の間にだけ、その解決を求めて行かねばならなかつたのは、彼女らの不幸の最大原因でもあつた。

4。

だが數少い女性の幾人かは、女を陥れる黒い魔の手に立向つて生きようとした。閉された世界から脱れるために、舊い仕來りから解き放たれるために、女の生長を阻んでいる悪しき關係や習俗の掟に、か細い腕の女たちは、身を挺して闘おうと努力した。

藤森成吉の「何が彼女をさうさせたか」に描かれるすみ子は、この意味での數少い女性の一人であることに疑いはない。

この少女の辿つた生長の經路は、不幸な女たちが、その生涯で負わされたと同じ暗い流轉の連續である。

病夫を棄てて駈落する女の娘として育てられた彼女は、土臭い百姓女の娘とは思われぬほど利

發な美しい少女であつた。だが父を喪つて呑んだくれの叔父の手へ引取られると、間もなく子供芝居の役者に賣られ、食いものにするとしか考えない叔父の弗箱として舞臺を踏むのである。

子供芝居に出る役者の大方は、富裕な親をもつた子供が主で、すみ子とは逆に、金を持出して藝を習う側の人達であつた。だが美しく生れついた彼女は、役向は何時もよく、客の人氣も圖抜けていた。しかし、彼女の評判を親身になつて悦んでくれる者はなく、却つて周囲からは妬まれ、「田舎者」であることが蔑視と反感を買つた。そんな事情も知らずに、叔父は、たびたび出向いては、お部屋（座長）から金をせびつた。果は衝突した。

再び叔父の手へ戻つたすみ子は、幾何かの金でまた人手に渡され、物貰いの手先になつて門附をする身となる。たまたま拘留されたとき、警官から國へ歸ることを勧められ、彼女もその氣になるが、親方の手が廻つていて、警察を出るとすぐ捉まえられ、再び門附をして歩かなければならなかつた。お探ね者だつた親方が、騙りの現行を押えられて警察へ引かれてから、寄方のないすみ子は、養育院へ收容された。彼女にとつて、ここは安全な住家であつた。ここへ收容される人々は、寄方のない老人や行倒れの人たちであつた。彼女と同じ境遇で世を渡つてきた者たちばかりである。

收容されてまだ一週間と経たないうち、身元調べの係をしている原という男から、小間使に行

かぬかと勧められる。

「普通なら、まだ入つて来て一週間も経たないような者を、いくら何だつて外へ出す譯にやあゆかないが、お前なら可愛らしいし、はしっこいし、それに氣立も優しいし、どんな處へ出したつて大丈夫だからつて、僕が大いに主張したんだ。こんな處とは較べものにならないほど暮しもいいし、第一、お前がこれから世の中へ出て一人前になる爲に、どんなにいい手掛りになるか分らないと思うんだが、どうだね、一つ行つてみる氣はないか」

こんな風に勧められて小間使に行く氣になる。

市の參事會員で、養育院とも關係の深い秋山家へ雇われることになつて、すみ子は、上流家庭の内情を知らされる。

自分と同じ年恰好の娘が、小學校の行き歸りを車で通うことや、禮儀を人一倍おもんずる奥方の氣質や、收賄の嫌疑のかかる主人のことや、魚は必ず骨を抜いて食膳へつけるこの家の習慣など會つて経験したことのない事ばかりを見せつけられる。收容者の誰からも評判の良かつた原さんは、「こんな處とは較べものにならぬ程いいところだ」と言つて勧めてくれた。どががいいのであらう。彼女は、考えざるを得なかつた。

いいと思う主人たちさえ、收賄の嫌疑に掛り、固苦しい見榮や體面のために、伸び伸び成長す

ることも出来ない娘さえいるではないか。そして家族を除いた他の者は、卑屈な盲従と、鼠のうな猪さで生きている。

すみ子は、これが世間で云ういいところかと思つた。そして、こうした環境に不感症になつた人間を、世間では辛抱者というに違いない。これが、十三の少女の後頭部に意識された世間であつた。彼女は、堪らない憤りを感じた。

食事の時であつた。何か一口まく立てねば納まらない奥方が、女中たちと一緒に膳へ向つてゐる勝手元へ顔を出した。その時すみ子は、醤油差しを取つて香の物へ掛けようとしていた。

秀子 おすみ、お前、香の物へむらさきを掛けちやいけないう。躰けの爲に、うちじや召使いには一切のうら事はさせない定めになつてるんだからね。

(すみ子びつくりして醤油注しを戻す。)

秀子 おせい、お前からよく云つて置かなくちや駄目じやないか。一體そんなところへむらさき注しを置いて、きつとお前達は始終コソコソ掛けてるんだらう。おすみ、お前知らなかつたから無理アないが、これから色々おせい達に聞いてお置き。

すみ子 (唇を噛んで) はう。

秀子 云う事さえよく聞きア、この後どんなにでき引き痛てやるからね。今までお前は不仕合せな目にはツかり遭つてきたさうだけれど、これからは本當に仕合せになれるよ。どう？ 昨日来たばツかりでも、もう随分しあわせな氣がするだらう。

(すみ子俯向いたまゝ黙つてゐる。)

秀子 食べ物だつて、養育院なんかとは較べ物になるまい。そんな海苔やお魚なんぞ、あそこ

にいたんじや、食べようつたつて食べられないだらう。

(すみ子相變らず無言。)

秀子 養育院の御飯なんて、普通の人間じや、一口だつて食べられつこないや。臭くて不味くて……一體お魚なんて、匂いでも嗅ぐときがあるかい？

(すみ子慄える。)

秀子 目刺しの一匹でも附く事があるの？ ないだらう——どうして返事をしないの？ 恥かしいのかい？

すみ子 (突然頭をあげて) 奥さま。お魚ぐらい始終食べています。こんな残り物なんぞ、みんな犬にやつています。

(云うなり魚の皿を取つて土間へ投げつける。皿、板の間の端へ當つて、けたたましく音を立てて毀

れ飛ぶ。

秀子（見る見る蒼白く血の氣を失い、額へ青筋を立て）おすみ！ 何て眞似を主人へ向つてするんです！

すみ子（秀子の顔を睨み上げて）子供だと思つて、あんまり馬鹿にしないで下さいまし。

こうして、再び養育院へ戻されるのであるが、その後、三年のあいだ院の附屬小學校で學んで、琵琶の師匠のところへ女中に出る。だが、そこでもまた男の暴力が彼女を待つていた。

妻に先立たれた師匠は、ようやく成熟したすみ子の美しさに惹かれ、それとなく思ひ續けていたが、たまたま彼女の子供芝居の時分の昔馴染が訪ねて来たことから嫉妬し、酒の力を借りて籠絡しようとしたが果せず、却つて飛出されてしまう。師匠の家を出た彼女は、昔馴染の新太郎と連立つてさ迷い歩き、揚句の果に心中するが助けられる。

二人は別々になり、すみ子は天主園というキリスト教の婦人收容所に容れられる。ここでもまた、神の名によつて、神聖な義務を果そうとする偽善者たちの惡徳を見せつけられる。

すみ子が收容されて間もなく、おかくという三十年配の婦人が、いよいよ明日出所するが何か言傳はないかと尋ねる。それは、すみ子の情死前後の事情を知つているところから、相手の男に思ふ

ことがあつたら言い傳えてやろうという親切である。彼女は、もう新太郎のことは思い切つていふという。懐しいことは、懐しいけれど、氣の弱い男ゆえ、なまじ情に絆はだされたことを今になつて告げようものなら、却つて死を早める結果にならぬとも限らない。やつぱり諦めます、と辭退する。だが、おかくは自分の經驗から割出して、色々に愛人への思遣りを説くのである。

一度は斷つたすみ子も、重ねて勧められるとその氣になり、慌しい思いで手紙を書く。だが生憎、その手紙をおかくが懐ろへ入れようとするところを、主任の矢澤うめ子に見附かる。矢澤は何喰わぬ顔で支度は出来たかという。おかくはほつとしながら手廻りの荷を持つて後へ随うと、矢澤は立停まつて、何を入れたの、と訊ねる。「何か手紙みたいなものを入れたね。」おかくは、詮方なく取出す。

うめ子（封を破つて黙讀してから）これ、すみ子から頼まれたの？

おかく はい奥さま。

うめ子 そう云う事は、ここでは固く禁じてある事を知りませんか？

おかく（絶體絶命的に）よく知つております……でも、無理矢理すみちゃんから頼まれたもんですから、つい可哀相になつて――

うめ子 人が可哀相なら神さまの掟はどうなつても構わないですか？ せつかく立派に今日出ようつて云うのに、そんな罪を犯しては困るじやありませんか？

おかく 奥さま、どうぞ、今日だけは御見逃し下さい。わたし、奥さまのお力で今日こゝを出られるのを、どんなに神様に感謝しているか知れません。それを、こんな真似をして、……まつたく悪魔に魅入られたんでございます。でも、奥様の御言葉で心から悔い改めて、悪魔を追い出してやりました。どうぞお信じ下さい。

うめ子 (それに答えず) きつと、すみ子に押附けられたんですね。

おかく はい。

こうしておかくは、別に咎められずに出所する。おかくの出所した翌日は、日曜説教の日である。うめ子は、手紙の一件を厳しくすみ子に訊問した。すみ子は悔い改めることを誓つて詫び入るが、天主團の主任はなかなか聞き容れず、神さまへの贖の爲めにも、もう一度大勢の前で證を立てろという。それだけは是非赦して下さいと云つて憫みを乞うのだが、矢澤は、なおも聞き容れぬのである。參會者がどやどや入つてくる。お祈りが始まる。讚美歌が終ると、うめ子が説教臺に立つた。

うめ子 これから日曜の説教をいたします (間をおいて) その前に、一寸時間を頂きて姉妹の一人に證をさせます。これは普通の順序では御座いませぬ。が、今日お話して見たい聖書の中の言葉が、その姉妹の事に大へん深い関係がございますので、さきに證をして貰つた方が餘計わかつて頂けるだろうと思つて、臨時に變えたのでございます。どうぞ御承知下さい。

(老人達の方へ向つて一寸頭をさげる)

うめ子 (大びらに呼ぶ) では、すみ子さん。

(全衆一齊にすみ子の上に視線を集める)

うめ子 ここへ來て證をして下さい。

(すみ子癡癡的に身體を慄わせて俯む。傍の者、低く「すみちゃん」と言いながら膝で體を突つく。)

うめ子 (重ねて) さつき約束したように、みんなの前で證をして下さい。

(すみ子相變らず黙つて働かない)

うめ子 (咎めるように) すみ子さん。

すみ子 (眞蒼になつた顔をあげて) あたし、約束なんかしません。

うめ子 (意外そうに) だつて――

すみ子（首を振つて）いゝえ。

（うめ子怒り氣味になり睨む。すみ子見つめ返す。會衆緊張して來る。）

うめ子 ようござんす。あなたがどうしても恥かしくつて言えなければ、わたしが代つて上げ
ましよう。（會衆の方へ向き直つて）皆さん！

すみ子（突然起ち上つて、半ばうめ子に向つて、半ばは會衆へ向つて、咽ぶように叫ぶ）愛だなんて

——神さまが、愛だなんてみんな嘘です！

（みんな驚愕して彼女を見る）

すみ子 あたしがあんなにお詫びしたのに、許さないで、どこまでも苦しめて恥をかかせよう
なんて、そんな神さまなら決して愛じゃありません。神さまが愛なら、あたしもう夙に許し
て貰つてる筈です！

（皆唖る。）

うめ子（痙攣を起して）お黙りなさい。すみ子さん。

すみ子 いゝえ申します。神さまは愛でも何でもありません。そんな神さまなんか、無い方が
オツと増しです。あたし、今までは本當に神さまを信じようと思つていました。でも、もう
信じません。天主國なんて嘘です。何もかも大嘘です！

かくて彼女は、信仰に生きる人達の生活にも、自分を安住させてくれる世界のないことを悟る
のである。

子に對して負うべき責任を自覺してくれなかつた母、子供である自分を忘れたように男と家を出て行つた母、こうした母を持つた子供として育つたすみ子は、多くの子供が受けたと同じ愛情すら懸けられずに、呑んだくれの叔父から人の手に、そして、やがて獨りの力で荒い生活の波を漕ぎ抜けようとして「社會」に出るのだが、そこに待ち構えていた人間の世界は、餘りにも虚偽と欺瞞に満たされた世界であつた。人間としての悦びや誇りは、少なくとも女として迎つた彼女の十六年の生涯には見出せなかつた。彼女は、染々とそれを知つた。

説教のあつた夜である。夜陰に乗じて放火する。彼女は、嬉しそうに燃盛る火焰を眺めた。天主園は焼けた。彼女も捕えられた。

西鶴の描いた「戀草からげし八百屋物語」のお七は、戀しい男に逢おうとして放火する。田山花袋の「重右衛門の最後」に出てくる得體の知れぬ少女も、儂い最後を遂げる重右衛門の怨みを晴らそうとして、村全體に火を放つ。すみ子は、この何れでもなかつた。

まことに、彼女をしてそこに導いた経路には、この世の凡ゆる女たちが嘖まされたと同様の、誤られた道徳や因襲や環境の拍車があつたのである。萬葉以後、明治の初期へかけて多くの小説に描かれた女主人公たちの生活は、一樣に、「七去の罪」に逆らわぬことと、三従の教えに殉ずることであつた。貞節と夫唱婦従の道徳である。これらは徳川期に完成された女の美德であると同時に、その後の世代に生きる女の道徳をも規定していた。このことは、大正を隔てて今日にまで續く傳統である。

前代の小説に描かれた多くの女性たちと比較するとき、すみ子は、確かに前進している。女である自分の生活を自覺している點で、人間として、一人の人格として女の誇りを持つと努力している點で、人間を片輪にしている虚偽の生活と偽善行爲とを見抜いている點で、またそれと闘おうとして、ひよわな魂を勇氣づけながら環境に立向つている點で、前のどの小説にも見られない高さに、おのれの生活を引上げている。

窪川稻子の「キヤラメル工場から」のひろ子も、すみ子と同じ年頃の少女である。

仕事のない父親と、兄弟の多い家庭からキヤラメル工場へ通うひろ子は、一日十八錢の工場労働者である。始業時間の早いその工場では、ひろ子と同年配の少女たちが、毎朝の如く、始業に遅れまいとして、三膳はいる胃の腑へ一膳だけ容れては駆けつける。遅刻でもすると、一日休まねばならなかつたからである。彼女たちは、一日でも休むことが恐ろしかつた。一日分だけ、肉を殺されるように家計が削られた。これは勤勞者の生活に共通すると同時に、彼女らの小さな脳髓にも泌みこんでいる常識であつた。

水である限り凍つてしまうような冬の日であつても、罐洗いにお湯を使うことも出来ず、油を賣ることなど、もちろん出来ないこれらの少女たちの生活は、「新婦人協會」(平塚明子らの婦人運動)の人達が想像さえしなかつた、女の暗い生活面である。日給制が廢止されて、一罐の賃銀を數えるようになった頃から、ひろ子たちは、倍の勞働と努力とを傾けねばならなかつた。震災を過ぎる前後の一部經濟の餘波が、このか細い彼女らの兩腕に、ひし／＼と伸掛つてきたのである。

少女たちは、金にならなくなると、或る者はお酌になり、或る者は女中に鞍替して働きに出た。ひろ子も、郷里の先生から、「誰かから何とか學費を出して貰うように工面して、大したこともないのだから、小學校だけは卒業する方がよからう」と書いて來た時分には、キヤラメル工場を罷めて、チャンそば屋に住込んでいた。

彼女は、こうした境遇に置かれている自分を、決して幸福とは思っていないが、と云つて、すみ子の如く積極的に自分から突き抜けようとはしなかつた。

同じ年頃の少女であり、同じ働く境遇の生活に置かれていながらも、この二人の少女の生長の過程には、著しく懸隔が示されている。すみ子が、衝突する生活の矛盾や不調和に憤りをもつて立向つているのに反し、ひろ子は、郷里の先生から、小學校だけは卒業するようにと云つて手紙が来た時も、讀みかけて破り、破いたのを掴んで便所に入り、暗いチャンそば屋の便所の中で、用も足さずに泣きながら讀んでいる少女である。この少女の姿こそ、或いは當時の少女一般の姿であつたかも知れない。

學校へも碌々やつて貰えず、家計の一部を分擔させられて油断なく働かねばならないこれらの少女たちは、現實として負わされている諸々の負擔や重荷や、女であることの名によつて傳統的に押しつけられてきた道徳上の勘定書に對して、やがては目覺め、はつきりした判斷と認識によつて自己を正統に生かす日もあつたに違いない。

すみ子のような少女が、それを物語つていると同時に、女の自覺の方向に、新しい一つの基礎を示していることは興味がある。彼女は、その克服の生活を経て、やがて片岡鐵兵の「生ける人形」の弘子のような女性ともなり、ずつと近くへきて、「母系家族」の葵ともなり、或いは、「東京

の女性」の節子のような女性ともなつて成長するに違いない。

Ⅲ 解放された犠牲（大正期の省察）

1。
明治から昭和に橋を架けた大正の時代は、僅かに十数年の期間に過ぎぬが、わが國民が日露戦捷によつて世界的自覺を促され、さらに歐洲大戰によつて、愈々その自覺に緊張を加えねばならなかつた時である。しかし、事實は、この時期を普通デモクラシーの時代として、改造、解放の合言葉が諷しく言交された時代として知られている。従つて、一般の思想も、女性のモラルも、既成の圍みから解き放たれて、劃期的に放漫な弛みを帯びた時代である。それは、谷崎潤一郎、その他の唯美主義、耽美派といわれる作家たちによつて特徴的に描かれている。

谷崎潤一郎の描いた女性の多くは、因襲から食出^{はみだ}すばかりでなく、戀愛を情痴の一面に引下して人工的な技巧を凝らすか、功利的に享樂する姿として描かれている。そこには、因襲が表われているだけでなく、正しい愛情の自然ささえ嘲られている。愛情が、本能的な面で技巧をこらされ、その技巧的な變態のなかに異常な美が求められている。戀愛が最早や美の正しい形成に盡さ

ず、異常な怪奇の世界に頽廢しゆく姿をこゝに見る。このように怪奇な、背德的な、そして殘虐の情調のなかに美を求めたのは、オスカー・ワイルドの「サロメ」や、「ドリアングレートの畫像」などである。或いは、ボードレールの詩である。これらは總べて世紀末の個人主義における不安に根差していた。その不安の心理と、肉體的慾望との痺れ歪んだ合奏の響であつた。世紀の不安に怖れ戦きながら、自己の生存の他に目標を失つた焦躁のあらわれでもあつた。ワイルドのサロメは愛を受け容れられなかつた怨みから、豫言者ヨカナアの血汐したたる生首に接吻しながら、復讐の快感に浸る。云わば、このようにして疲勞し、焦躁する個人主義の憫れな人間的破滅が描かれたのである。

また一方、大正期の文學においては、女性も最早、舊い掟に忍従の美を讚えるものとしてではなく、因襲の無價値を冷笑し、高らかに、嗤い去る姿として描き出されている。それは、菊池寛、芥川龍之介の作品のなかに、新しい理智の目覺めとして、描かれている。

たとえば、「眞珠夫人」の瑠璃子は、因襲への反抗に燃え、それを復讐し、冷笑しようとして自らを滅ぼしてゆく。理智の窄さ、エゴイステックな自己優越心の、空虚な敗北であつた。芥川の「袈裟と盛遠」における袈裟と盛遠は、互のエゴイズムを満足させることにのみに捉われて、愛情の共感に浸り得ない様を、抉り出されている。個人主義に捉われた愛情の冷酷さと無情な姿の指摘

である。

⑨ その他の作品においても、芥川は習俗から解放された女性のエゴイズムが、形式主義を否定して自主的に伸びようとしながら愛情の本質に辿りつき得ない姿を捉えている。云わば、大正期において折角たゞかい取つた女性の自主性が、いかなる悲劇に遭遇しなければならなかつたかを暗示している。

⑩ 概括的に言えば、明治期の女性は、個人意識の目覚めが解放される機縁なき故に苦惱したとすれば、大正期の女性は、解放されたための悲哀を、解放されながら倒れゆく悲劇を演じたと云えるだろうか。

また、大正期の文學の特色とも云うべき愛情の纏れは、明治期にはあらわれなかつた男の悲哀の姿として描かれている。たとえば、近松秋江の「別れた妻に送る手紙」「疑惑」、その他である。それは、寧ろ男の封建的な、消極的な感情が、新しく目覚めた女性に取残され、侮蔑される形であらわれている。それを、より際立つた姿で捉えたのが谷崎潤一郎の「痴人の愛」であろう。ここでは、女性の世紀末的なダンの姿デカと、情痴に溺れゆく男の溺愛とが描かれているが、男は恒

に、女性の氣紛れな心の量り難さと、技巧的な愛情の功利性に悩まされている。いわば、解放された女性の放恣な振舞いが、すでに男性の因襲的、保守的なエゴイズムを嘲笑うかに見える。

もちろん、谷崎、近松の描いた女性は、新しいモラルの正しい自覚の面ではなく、その自覚の恣なデカダンの時を降る姿において描かれているが、兎も角、これまで男の自己的な心理に媚びることによつて、おのれを失つた女性が、反對に保守的な男性を悩まし続けるのである。そして、このような解放された女性の放漫な心理と姿態が、男の悲哀を焚附ける有様は、その後すくなくならず、小説のテーマとなり得たのだ。そうして、このような頹廢のなかにも、歴史の成長と、舊い形式の崩壊とが互に入亂れつゝ、避け難いものとして示されたのである。云わば、自己を時代の前面に押し立てて舊觀念を蹴りつけるのではなく、消極的に自己を防ぐ形で抵抗した姿とも云えよう。かようにして女性の解放が、舊いモラルの崩れゆく姿として亡びゆく反面に、正しいモラルの現実的な芽生えも、力強く育ちつつあつたのである。

2。

大正時代は、劃期的な職業婦人の進出の時代であつたことは前述した。一般産業界の躍進と共

にショップガール、事務員の進出、その他喫茶店、カフェーの増加と相俟つて、それらの職場の女性が家庭の経済的な補いのために、或いは獨立への自覺に沿うて、都市から、田園から、工場へ、會社へ、デパートや喫茶店に、なだれ込んだ。

この時代、激しい生活の波と、思想の變轉に翻弄されながら、過去の傳統を失うと共に、おのれの個性の、自發性をも併せて消失し、船頭のない船のように生活の流れに随つて、人間的な誇りや價値の凡てを犠牲にした女性もあつた。しかも動物的に、何らかの悦樂に耽ろうとする憫むべき姿は、「つゆのあとさき」の君江に具體化されている。そして、こゝで結局、大正時代の解放の勝利が空しい自己の喪失の姿となり了つたのであるが、そのような頹廢のなかにも、女性の生活力の旺盛さ、それに伴う功利心の芽生えは、證明されている。言い換えれば、君江のようなデカダン^{カダン}は、生活との闘いを、女性の最も安易な面から切開いた一つの犠牲であつた。

そのような犠牲と敗北は、その職域の消費的な環境からも強く影響されたであろう。しかし、堅實な、正しい自主性と、理性的なモラルの發芽は、どのような環境のなかにも見られた筈であるし、殊に、多くの産業的な面に泳ぎ出た若い女性たちは、たとえば、「律子と瑞枝」の律子の如く、人生に對し、愛情に對して舊いモラルに盲目ではあり得なかつた筈である。律子も、生活の困難にはたわいなく倒れず、確かな理智の批判と自信を貫こうとした。たとい彼女は熟さない環

境のために、それを貫き得なかつたとしても、彼女に發芽した生活の理智は、「あらくれ」のお島のような生活力の旺盛な意思と寄合わされて歴史の發展のなかに生き延びたに違いない。それは、他の女性のなかに統一的に引繼がれ、成熟していつたに相違ない。その結果は、昭和の文學にあらわれる女性の、獨立的な歩みの逞しさともなり、或いは、愛情の知的な成長へと引繼がれ、受渡されてきたのである。

大正期は、なるほど個性解放の犠牲と、悲劇の姿態をも表現しなければならなかつたが、その犠牲は、犠牲のまゝに終りを告げたのではない。しかも、その犠牲と、頹廢と、悲劇のなかに、彼女らを苦しめた戒めや圍いが、彼女らの涙の抗議によつて次第に形を失いつつ、無力化されつつあつたのである。そしてそれは反對の方向から、積極的な生活への突進が、彼女らの臚だつた自覺の眼を研ぎ澄まし、怖氣づいていた新しいモラルの試みにも、自信を振寄せたのである。思い上つた教養の悲劇、さむざむしい功利的知性で、愛情の裕さと、潤いを失う惨めさを味つたものも少くなかつたであらう。しかし、過渡期における發展性には、必ずそのような弱點が附纏うのである。過渡期における新しさや生長の芽が、つねに傳統と習俗の凝視から何か奇抜な化物のように、その非人間性を罵られるのも、そのような事情ゆえである。

われわれは、絶えず課される歴史の試鍊を、常に發展の方向に切開かねばならぬ。歴史を省み